



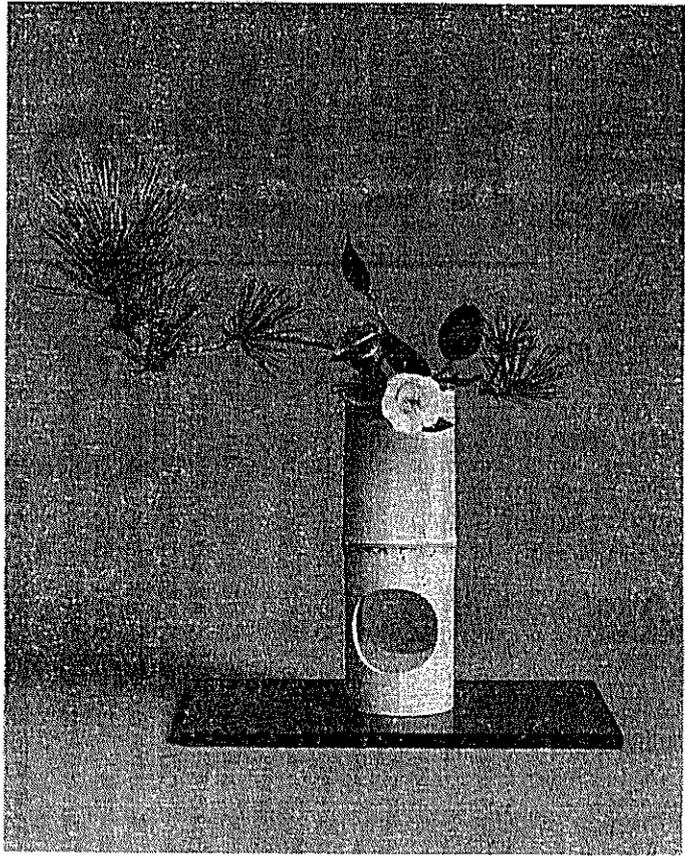
# 吉田雅日記

(113)

## 日本の心を

えと文 二井栄逸

古代、立春の日に宮中の主水司一(もいとりのつかさ)から、天皇



に奉った水のことを若水といったが、のちには元日の朝に始めて汲む水のことを若水というようになった。若水は、井華水(せいかすい)、初水、若井とも書かれ、井戸や泉などの上を鳥が渡る前に汲み上げた清浄な曉の水のことをいう。寅の刻(午前四時頃)、薄闇のなかを若水迎えに行くには、冷気肌をさすような寒さであるが、かえって精神旺盛、心身の引きしまる思いがするのである。

や花人の家では、若水を大事にするしきたりが守られていた。清新の氣に満ちた元日は、神と縁を結び、一年の招来のことごとく聖なる日であり、永遠の継承と繁栄を祈りつつ日本を確認する大きな節目となる。私も元日の朝、竹花器に初生けをして、清新の氣を満たし、旅に出ることにしている。花器の丸玉垣は、七種の宝器の中の一つで、私の好きな竹花器である。本来は格花を生ける花器であるが、私は好んでこの花器に自然花を生ける。同じ竹でも、スカリとしたきれあじを見せる真竹(まだけ)は、孟宗竹より気品があつてよい。正月の花は、たくさんに花材をつかうより二種位にしばって生ける方が気がひきまらるものである。ちり一つない能舞台の上に、スラリと立った唐織姿のシテには打ちこむ隙もない。そのような厳しさが備わるのが日本のいけばなであらう。(平成三年一月元旦記)

このよう なしきたりには、先人が築き、磨き上げた日本の暮らしの心と折りが宿っている。私が若い頃、父は元朝注連飾りをした手桶に若水を汲み上げ、竹花器にうっして前夜に用意してあつた花を生けていたことを覚えていた。茶家

観世流謡曲本  
ちくさ正文館  
ちくさ駅前  
電話01137

### 平成3年1月・2月放送予定

◆ FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

(1月)

20日(日)宝生流「鞍馬天狗」 松本 忠宏  
27日(日)観世流「源氏供養」 浦田 保利

(2月)

3日(日)宝生流「朝長」 渡辺 三郎  
10日(日)観世流「百萬」 梅若 六郎  
17日(日)高多流「田村」 栗谷 新太郎  
24日(日)観世流「当麻」 観世 鉄丞

◆ 教育テレビ(午前9時~9時40分)

2月11日(祝)大蔵流狂言「二人大名」

茂山千五郎

### 能楽友の会三周年記念例会

#### 囃子と謡の

#### コミュニケーション

一月二十九日(火)午後一時半開演

熱田 神宮能楽殿

独吟(宝生流) 俊 寛 衣斐 正宜

独吟(観世流) 三 輪 梅田 邦久

独吟(高多流) 鶴 盛 長田 麟

独吟(金春流) 実 盛 本田 光洋

管独吟(観世流) 江 口 梅田 邦久

二唄(宝生流) 三 井 寺 衣斐 正宜

二唄(金春流) 郡 本田 光洋

一調(高多流) 鳥 頭 長田 麟

一調(宝生流) 鳥 頭 大倉正之助

### 新年ご挨拶

観世流二十六世宗家

観世清和

清らかな気風に満ちた幸多き年  
になりますように願いつつ、  
新年の御挨拶とさせていただきます。

平成三年元旦

賀正  
井上嘉久  
(〒603)京都市北区紫野下鳥田町六

鳳鳴会  
武田志房

名古屋淡交会  
橋岡慈観  
瀬戸三津子  
福沢市福島町二ノ宮六 瀬戸方  
電話(〇五八七)〇三三八八番

財団法人 鎌倉能舞台  
中森晶三  
中森貫太  
〒248 鎌倉市長谷三二五-113  
電話(〇四六七)〇五五五七

名古屋観生会  
野村四郎  
東京都杉並区永福四一三〇-110  
電話(〇三三三)二一五二九  
名古屋種古場  
名古屋市中千種区日和町四ノ一〇  
小鳩方 電話七五一-一八八〇番

春鶯会  
梅若善高

竹翠会 若松宏守  
〒662 西宮市平松町四一九  
電話(〇七九八)二三一〇六〇一

邦謡会  
梅田邦久  
須部清一  
清沢美和  
今田美融  
本田

山本真賀  
山本章弘

壺泉会  
泉嘉夫

初陽会  
武田宗和

松音会  
泉泰孝  
泉雅一郎

名古屋橋岡会  
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五  
山田紀子方

大阪能楽会館  
大西智久

笙月会 中川雅章  
長浜市地福寺町八ノ二九  
電話(〇五八)〇六三〇番

生韻会  
山中義滋

下田雄三  
雄詠会中部地区連合会  
名古屋和石  
一宮花  
岐原雄  
萩原雄  
下原雄  
高文之  
倭山屋社  
中

大垣浦声会  
大垣市竹島町善念寺  
住所 京都市左京区下鴨芝本町五八  
浦田保利

名古屋修諷会  
梅若修一

上田観正会能楽堂  
社団法人 観正会  
上田観正会

上田田貴弘  
神戸市長田区大塚町三丁目一ノ一四  
電話(〇七八)六九一-一五四四九番

「尾張藩の能の歴史」の新しい文化創造の拠点として、名古屋に能楽堂を希望が高まっているが、能楽愛好者を中心に能楽師を一九とした、お城に能楽堂を作ろう会」では、この春から建設の請願に向けて署名運動をくりひろげる方針である。同会ではこの運動推進にあたり、地元で能楽研究者の協力により、地域文化の源流、能楽の歴史と発展について、いろいろな角度から執筆して頂き、建設要望の推進をめざして幅広い理解をひろげていきたいと期待している。本紙では今回、岐阜市立女子短期大学教授・辻宏一氏による「尾張藩の能の歴史」を掲載する。

徳川御三家の一つ尾張藩は、全国の諸藩の中でも、能楽の盛んなところであった。

徳川家康が関が原戦後、一六〇〇年十月(慶長五)、四男松平忠吉を、尾張清洲の地に封じ五十二万石を領知させたのが始まりである。

ところが松平忠吉は、一六〇七年(慶長十二)病死し、嗣子がいなかったため、忠吉の弟で家康の九男徳川義直(後義直と改名)が、甲斐府中から清洲に移されて尾張一國を領した。一六二〇年(慶長十五)河川の氾濫の害を避けて清洲から名古屋に移ることになった。この義直を尾張藩の藩祖としている。

義直は、大坂陣に戦功をたてたので、戦後加増により、一六三五年(寛永十二)には、六十三万三千石余に達したが、尾張藩では、一六七一年(寛文十一)元高六十一万九千五百石余として幕府に上申し、以後これが公称の知行高となった。

義直は、幼少の時から親世新九郎に小鼓を習い、舞は、義直の生母、相応院に仕えていた金春大夫の弟子にあたる女性の猿楽師、某という者に学ばれたと伝えられている。(注一)

徳川御三家が、能役者を抱えるようになった事情は、將軍秀忠が御三家に御成になるようになってからのものである。(注二)

「徳川実紀」元和六年閏十二月の項に、「この月尾張。紀伊。水戸三家。江戸の第宅落成し。臨駕のため管造せられし御成門等。結構花籃をつくされたり」とある。この頃屋敷内に、能舞台も造られたのかも知れない。



辻 宏一氏

(辻宏一氏)昭和四十二年慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程修了。岐阜市立女子短期大学英文学科教授。

### 尾張藩の能の歴史

辻 宏一

六日の項には、「尾張中納言義直御の邸に臨駕あり。夜明程なく露地口よりならせらる。……猿楽御覽。御宴あり。猿楽は加茂。忠度。熊野。道成寺。狸々。乱なり。」とある。この翌日の後家康で、後代まで尾張藩仕方の代表格とされる、金春八左衛門家の初代安喜は、「山姥」を舞っていた。寛永二年以前に、尾張藩お抱えになっていたようである。(注三)

金春八左衛門は、金春安照の次男で、もとは、藤堂高虎に仕えていたが、後義直が懇望して、合力に罷成候故、八左衛門は、賜不為仕、仕手に取立申候。然処兄弟勝父に先立相果、甥七郎重勝幼少にて、父安照年寄、取立申事危御座候故、為相親八左衛門に家業、一子相伝并家之書物悉為写、安照加判仕、一事も不残伝授仕候。……以下長くなるので省略するが、金春本家とは、確執があったことが記されている。(注四)

寛永四年五月三日には、秀忠が義直の邸に御成になつては、その時申案が演じられては、同じ年の六月二十一日は、家光が御成になり、能は加茂、清経、源氏供養、卒都婆小町、道成寺、鶴、花月、能坂の八番、狂言は、唐角力、首引、暗尼、猿座頭の四番が

米二百石、後五百石で抱えられたのである。竹田権兵衛広真から金春八郎へあつた書状などを参考に、その系譜を示すと、次のようになる。

二世金春安照(金春氏)

三世金春八左衛門(安照)

四世金春大蔵左衛門(八左衛門)

五世金春大蔵左衛門(大蔵)

六世金春大蔵左衛門(大蔵)

七世金春大蔵左衛門(大蔵)

八世金春大蔵左衛門(大蔵)

九世金春大蔵左衛門(大蔵)

十世金春大蔵左衛門(大蔵)

十一世金春大蔵左衛門(大蔵)

寛永五年六月十一日にも、秀忠が義直邸に御成をする。その時の能は、嵐山、頼政、井筒、天鼓、葵上、海士、鐘屋、狸々の八番である。同年八月九日には、家光の臨駕がある。その時も能を演じている。このように、大御所や將軍がしばしば御成になるたびに、能が演じられることになると、当然ながら、できるだけ良い能役者を召し抱えて、將軍に見せようとする傾向が生じる。

笛方藤田流の初代藤田清兵衛が召し抱えられたのは、寛永六年頃と言われる。その際、仲介の勞をとつたのが、江戸時代、親世流のワキとして、隆盛を誇った進藤流の創始者、進藤久右衛門である。進藤久右衛門が、藤田清兵衛宛に書いた、その間の事情を記す手紙が残っている。

久田観正会 久田 徹二 大倉流小鼓 松月会 松野 郁子 松野 幸子 松野 親至 馬場 信至 玉木 孝男	洗心会 奥村 富久子 千崎 名古屋市北東区水切町四ノ四三 電話(五三)九八一―三六四三番	芳韻会 稻生 芳雄 半田市船入町三十一 電話(五九)五九〇八―一五	幸福会 近藤 幸江 岡崎市鶴田町十一番地ノ三 電話(五五)六四四―二五二九	猶惠会 熊沢 恵美子 名古屋市中東区平和ケ丘3―76 日車マンシオン四〇四	水雲会 藤元 三	緑名会 田中 武 尾張旭市城山町三ツ池六一九八 電話(五五)六一五―三三〇四番	重陽会 菊池 重郷 大山市大山宇相生五九―一六 電話(五五)六八―四四一〇番	賀水会 加賀 敏彦 千崎 名古屋市守山区藤野二丁目七〇九 電話(五三)七七―八九四五番	清風会 今村 嘉勇 岩倉市東新町下境52―10 電話(五三)七七―七二三八
---	---	--	--	--	-------------	--	---	--	--

中日文化センター 謡曲・仕舞教室(名古屋栄) 岐阜・四日市 翠生 駒里 翠 名古屋市中東区社ガ丘3ノ1503 電話(五二)七〇三―五七一七番	三村 恵子 千崎 西尾市住吉町三十一二 電話(五三)五二―二五九四番	宝生 英雄 宝生 英照	名古屋異会 辰巳 孝	雲会 内藤 泰二	近藤 乾之助 千崎 東京都豊島区東鴨五―三三―八	正風会 衣斐 正宜 千崎 名古屋市中東区御器所3―23―19 御器所パークマンシオン802号 電話(五二)八八―二五六〇番	衣斐正宜後援会 千崎 名古屋市中東区名取三―二六―二六 電話(五二)五八―一一二〇番
---	--	----------------	---------------	-------------	-----------------------------	---	--

佐野 由於 千崎 東京都品川区大崎五丁目一〇の四 千崎 五反田南ハイツ一〇〇三 千崎 金沢市東野町四丁目十二―十四	倉本 雅 千崎 神戸市東灘区田中町一―13―26 本山アールパルクイン四〇一―二 電話(五七)八四―四一―五四六五番	宝生流 嘉宝 宝会 千崎 名古屋市中東区川名本町二ノ五一	吉田 俊彦 竹腰 勝一	司宝会 千崎 名古屋市中東区天白区島田二丁目三〇一 島田橋住宅三三三電話(五三)七七―七三二	金剛 永謹 千崎 京都市北区上賀茂神山七―三三	廣田後援会 廣田 陸一 廣田 幸稔	菊扇会 後援会 廣田 泰三 廣田 泰能	豊嶋能の会 豊嶋 鳴三 千春
--	---	------------------------------------	----------------	--	----------------------------	-------------------------	------------------------------	-------------------

〔④面よりつづき〕  
同年五月九日、家光が鏡直邸に御成になる。この時も能が演じられていたが、特に家光の所望で、喜多七大夫が熊坂を舞っている、喜多七大夫の名声が、最も高い頃であらうと思われる。  
寛永八年の分限帳(「名古屋市史風俗編」所引)には、金春八左衛門(二百石)、藤田清兵衛(八十石)、太鼓、藤田清兵衛(八十石)、藤田次左衛門(八十石)、役不明、山脇五郎左衛門(七十石)、狂言・丹坂善藏(六十石、役不明)、長命五左衛門(五十石、金剛

座地蔵か)、長命甚吉(五十石。役不明)、松本平次(同上)、林長兵衛(五十石、連)、藤馬権七(四十五石、役不明)、松本藤藏(同上)、田中惣十郎(四十石、役不明)、川口久五郎(三十石、役不明)、花井弥三右衛門(同上)、大原半平(同上)、大原五兵衛(同上)、その他、幸若の役者、幸若忠太夫(五十石)、幸若三助(三十石)、幸若善助(三十石)、以上、千石七十石、総数二十一人の能役者、幸若役者が召し抱えられている。(注6)

義直は、自分自身でも、寛永十二年七月十八日には、二九で、能を演じている。「徳川実紀」には、次のように書かれている。「十八日二九にて猿楽あり。尾張重相は善知鳥、紀伊重相は鐘鹿。水戸重相は芭蕉をつかままつる。御感な、めならず」  
注1 「名古屋市史風俗編」による。  
注2 岩波講座「能・狂言」1「能楽の歴史」による。  
注3 右の書「五」地方諸藩の能楽」による。

注4 野々村戒三著「近畿能楽記」による。  
注5 「謡曲講座」三巻、藤田家系譜、野々村重舟下。川七左衛門より、家伝の名笛、青海波、諏訪丸、瓦落、千鳥、鶯の五管、及び「梅花集」と言う笛の伝書を与えられる。以上「名古屋市史風俗編」による。  
注6 能役者については、岩波講座「能・狂言」一能楽の歴史も参考にした。

### 演 能 案 内

#### 名古屋宝生会定式能(第卅五期)

平成三年二月三日(日)午後一時始

熱田 神宮 能 楽 殿

番 組  
辰巳 孝 馬塚富四夫 地謡 辰巳 孝 鬼頭 喜太郎 吉田 正一 衣斐 正直 藤田 六郎兵衛 佐藤 耕司

通 小 町  
大坪十喜雄 西村 欽也 寛井 敏一 藤田 六郎兵衛 富田 正代司 衣斐 正直 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛

藤 藤  
竹内 澄子 飯富 雅介 吉田 定男 鬼頭 喜太郎 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛

竹生島 参 井上 祐一 後見 大野 弘之 後見 大野 弘之 後見 大野 弘之 後見 大野 弘之 後見 大野 弘之

僧 高安 勝久 鬼頭 英二 助川 龍夫 高安 勝久 高安 勝久 高安 勝久 高安 勝久

附 祝 言  
主 催 名 古 屋 宝 生 会  
〔要員券〕 当日券 五千元  
名古屋市昭和区山里町一三五 内藤泰二方 電話八三二一三四四九

#### 名古屋観世会定式能

平成三年二月十日(日)十二時半開演

熱田 神宮 能 楽 殿

番 組  
小島 一英 祖父江修一 本田 敏二 久田 邦久 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛

鶴 龜  
親世 芳伸 親世 芳宏 親世 芳宏 親世 芳宏 親世 芳宏 親世 芳宏

宝の笠 井上 祐一 井上 祐一 井上 祐一 井上 祐一 井上 祐一 井上 祐一

梅 舟 慶キリ 藤井 徳三 古橋 正邦 小島 一英 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛

田 村 親世 清和 山本 清 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛 藤田 六郎兵衛

附 祝 言  
主 催 名 古 屋 観 世 会  
〔要員券〕 〔初回に限り当日券は発売されません〕



伊勢金春会  
中 村 富 次  
伊勢市宮町一四一七  
電話(五五〇)二四五六番

金剛流 景雲会  
松野 恭 憲  
松野 洋 樹  
〒116 京都市右京区鴨島泉殿町一八三  
TEL(五七)四六二二二四八番  
FAX(五七)四六一六〇九八番

国際能楽研究会(I・N・I)  
宇高通成後援会  
〒606 京都市左京区高野泉町四〇  
TEL(五七)七〇一〇七九三  
名古屋事務所 前組英安方  
TEL(五七)八五二二三二四

金 春 信 高  
金 春 安 明  
〒167 東京都杉並区南荻窪3-17-16  
電話(三三三)二五七二番

金 春 欣 三  
春 敲 会  
東京都杉並区成田東四丁目35-20  
電話(三三三)七三七八二番

金 春 穂 高  
廣 瀬 瑞 弘  
〒467 名古屋市瑞穂区東栄町三二二四  
電話(五二)一八四一四七四五

本 田 光 洋  
東京都中野区上高田二ノ二五〇二  
電話(三三三)二六四一四番

名古屋金春会  
林 鉄 郎  
近 藤 修 彦  
渡 部 道 三

大阪喜多会  
和 島 富 太 郎  
〒665 宝塚市宝梅一丁目12-1  
電話(〇七九)七〇八六三〇

二 井 栄 逸  
松阪市殿町1412の3  
電話(〇五九)八二二一〇二六

長 田 驍 後 援 会  
〒514-22 津市高野尾町三三三五一四六  
電話(五五〇)〇六九七番

能 楽 講 座  
能と狂言に親しむ会  
梅 田 邦 久  
藤 田 六 郎 兵 衛

森 好 会  
森 茂 好  
〒151 東京都渋谷区代々木四一三八一二  
電話(三三三)3370-14609

喜多流 山 本 才  
名古屋千種区北千種3-3-10  
合同宿舍千種東住宅30号  
電話(〇五二)七二二一五七四番

高 安 会  
西 村 欽 也  
高 安 勝 久  
飯 富 雅 介  
杉 江 元

福 王 茂 十 郎  
〒662 西宮市名次町六番十二号  
電話(〇七九)八〇七七二

京 都 ・ 高 安 流  
岡 次 郎 右 衛 門  
向日市上植野町地田一ノ五四  
電話(〇七九)九三三二四〇六

豊 嶋 十 郎  
〒111 松戸市下矢切五五十五  
電話(〇四七)三一九八二

瞳 好 会  
森 常 好  
〒151 東京都渋谷区代々木四一三八一二  
電話(三三三)3370-14609

紅梅記

平成二年回

またその前後世襲の丞氏の四回(能会)五度の舞台に接した。強き(恋重荷)・美しさと悟り(江口)・人生無常(隅田川)など最上の表現。舞台と橋掛り一杯を使つてあの遊女の姿から菩薩と交する高麗な結末は何とも言えず佳。序の舞でシテ常座から前に進み元元が舞し、「人間愁ひの花盛り」の隅田川もまた悲しむのでなく、人間(喜怒哀楽)をみつめる心の奥が深かかと謳われる。すなでからの姿もよい(名古屋能楽鑑賞会・観世会・久田秀雄追善)。

またその前後世襲の丞氏の四回(能会)五度の舞台に接した。強き(恋重荷)・美しさと悟り(江口)・人生無常(隅田川)など最上の表現。舞台と橋掛り一杯を使つてあの遊女の姿から菩薩と交する高麗な結末は何とも言えず佳。序の舞でシテ常座から前に進み元元が舞し、「人間愁ひの花盛り」の隅田川もまた悲しむのでなく、人間(喜怒哀楽)をみつめる心の奥が深かかと謳われる。すなでからの姿もよい(名古屋能楽鑑賞会・観世会・久田秀雄追善)。

またその前後世襲の丞氏の四回(能会)五度の舞台に接した。強き(恋重荷)・美しさと悟り(江口)・人生無常(隅田川)など最上の表現。舞台と橋掛り一杯を使つてあの遊女の姿から菩薩と交する高麗な結末は何とも言えず佳。序の舞でシテ常座から前に進み元元が舞し、「人間愁ひの花盛り」の隅田川もまた悲しむのでなく、人間(喜怒哀楽)をみつめる心の奥が深かかと謳われる。すなでからの姿もよい(名古屋能楽鑑賞会・観世会・久田秀雄追善)。

「宝生会」「和泉会別会」「久田秀雄七回忌追善能」

霜月の舞台から(その二)

「清経」シテ博結。全体にさらさらした運びで淡白な印象。型は美しく、クセの哀感の中々のもの。しかし、キリの悲壮感に見られる心持はどうだろう。型が優先するように思われた。なお、前場、時雨の夕に重ね合わされるワキ淡津三郎の減入った気分の道行が省

かれ、この曲のもつ一種の深刻味が薄れたのも事実。(52分)「源氏供養」筆のすさまじい結実の源氏物語は筆者の名声を残すが、その主人公を供養しなかつた筆者は浮かばれず、追善をワキ安原院法印・雅介に願う。言葉に内在する霊力が富麗(ことたま)な

「源氏供養」筆のすさまじい結実の源氏物語は筆者の名声を残すが、その主人公を供養しなかつた筆者は浮かばれず、追善をワキ安原院法印・雅介に願う。言葉に内在する霊力が富麗(ことたま)な

またその前後世襲の丞氏の四回(能会)五度の舞台に接した。強き(恋重荷)・美しさと悟り(江口)・人生無常(隅田川)など最上の表現。舞台と橋掛り一杯を使つてあの遊女の姿から菩薩と交する高麗な結末は何とも言えず佳。序の舞でシテ常座から前に進み元元が舞し、「人間愁ひの花盛り」の隅田川もまた悲しむのでなく、人間(喜怒哀楽)をみつめる心の奥が深かかと謳われる。すなでからの姿もよい(名古屋能楽鑑賞会・観世会・久田秀雄追善)。

またその前後世襲の丞氏の四回(能会)五度の舞台に接した。強き(恋重荷)・美しさと悟り(江口)・人生無常(隅田川)など最上の表現。舞台と橋掛り一杯を使つてあの遊女の姿から菩薩と交する高麗な結末は何とも言えず佳。序の舞でシテ常座から前に進み元元が舞し、「人間愁ひの花盛り」の隅田川もまた悲しむのでなく、人間(喜怒哀楽)をみつめる心の奥が深かかと謳われる。すなでからの姿もよい(名古屋能楽鑑賞会・観世会・久田秀雄追善)。

またその前後世襲の丞氏の四回(能会)五度の舞台に接した。強き(恋重荷)・美しさと悟り(江口)・人生無常(隅田川)など最上の表現。舞台と橋掛り一杯を使つてあの遊女の姿から菩薩と交する高麗な結末は何とも言えず佳。序の舞でシテ常座から前に進み元元が舞し、「人間愁ひの花盛り」の隅田川もまた悲しむのでなく、人間(喜怒哀楽)をみつめる心の奥が深かかと謳われる。すなでからの姿もよい(名古屋能楽鑑賞会・観世会・久田秀雄追善)。

名古屋観世九阜会定期能(初回)

二月十八日(日)午前十一時始 熱田神宮能楽殿 加藤保彦 五木田武計 青木武弘 高橋一 狂言餅 仕酒 駒瀬 慎也 観世喜之

主催 名古屋観世九阜会 名古屋南区元塩町一丁目一七 (加藤保彦方) TEL(052)261-3659

Table listing various clubs and members: 高安流 飯 富 良 人, 宝生 欣 哉 閑, 谷田 宗 二 朗, 高安流 岡 同 門 会, 龍吟会 藤田 六 郎 兵 衛, 幸 圓 次 郎, 幸 義 太 郎, 野 中 正 和, 森 田 光 春, 幸 友 会 幸 華 能, 福 井 啓 次 郎, 福 井 良 久, 柳 原 富 司 忠, 桂 後 藤 孝 一 郎, 富 耀 会 柳 原 富 司 忠, 飯 島 佐 之 六, 大 倉 正 之 助, 大 倉 源 次 郎, 谷 口 正 喜, 長 生 会 鬼 頭 喜 太 郎, 吉 田 定 男, 吳 竹 会 算 三 男, 算 鈇 一, 叶 石 会 河 村 真 之 介, 河 村 大, 龜 井 俊 一, 保 忠 雄, 瀨 尾 乃 武

（面よりつづき）

「福の神」 シテ友彦、大黒頭巾に福の神の面。兩袖大きく煽るところ、鶏の戯合に似ないこともない。アド参詣人（松次郎・礼之助）に神酒を所望するところは些か狡つ辛いというか卑しい気分があつて見所の笑も失笑気味。そのせいから「ウワアッハハハハ」もひびく。（18分）

「舟弁慶」 シテ研司。シテの賣ではないが粗い舞台になり気の毒だった。省路が多く、曲としては骨抜きされたも同然。（1時間6分・11月18日・宝生会）

「飄の神」 天保年間以来上演の途絶えていたものの復曲という。シテ太郎・元秀（横浅黄・黄無地熨斗目・白地浦公英文様腰帶）。茶筌完りの活計がゆかず、鉢叩の縁で松尾明神に眼乞の参籠をする。次いで四拍子の登揚樂で小アド松尾の末社願の神・淳子（襟赤・赤地縫箔・丸紋茶下袴・側次・腰帶・大黒頭巾・面取）が杖をついて出ると、持参の瓢と黄縷水衣をシテの夢比に神慮として授ける。そこへアド鉢叩僧・友彦（無地熨斗目・腰帶・黒長衣・角頭巾・鉦）が仲間（角頭巾に二人は十徳・狂言袴、二人は縷水衣・括袴で茶筌差しを担ぐ）とシテを引き留めに尋ねて来る。そこで謡歌を聞き、元祖空世の法恩に感謝して一同は腕捲りよろしく衣の袖を上げると、聊念仏を奉納する。

後シテは衣を被いで幕の下から覗き、一旦幕内に退くと、衣を脱いで幕を捲り抜けた。既に掛かるのも外すのもすつきりと気持がよかつた。（1時間29分）

平成3年

宝生会定式能 予定

平成三年度の名古屋宝生会定式能は二月三日を初回として四回公演が行われる。

- 第一回 二月三日（日）
- 第二回 六月十六日（日）
- 第三回 九月十五日（日）

「釣狐」 シテ元弥十六歳の被さ。白藏主の老翁さを出すのはむずかしかったが、そこに潜む獣性の表情、神経質であるが故の敏捷な動作、即ち型には随処に卓抜なものを見せた。稽古ぶりが窺える杖の扱い（絶えず床から四廻程の間隔を保つ）。舞台（敷地）に出て、キッと左上を見上げ、鋭く右に面キルところに集約される恐怖と緊張のびりびりした皮膚感覚。本性露見の不安と狐師への猜疑の様子、等々。課題は、語りが少々絶叫調で聞き辛く、煽路の小歌が生硬なことか。アド祐一。異は慎重に細を解き、扱いて丁寧に仕掛けたが、土をかぶせる所作はなかつた。

「磯石」 シテすば、松次郎がアド田舎者・友彦に問わるところ、生き馬の目を抜くところから極のんびりしたもので、結果は逆に出し抜かれるのでは、と先が読めてしまふ。口では怖い怖いと言

い条、したたかな田舎者にしてから舌先三寸の軽佻で、はつたりのド迫力に欠ける感ありはしないだろうか。小アド宿屋に弘之。（26分）

「千鳥」 藤九郎（祥子）が小才の利くシテ太郎冠者を素直にのびのびやっているとところが良かったが、受けるアド酒屋の淳子も嫌味が無く、とくれば互いの駆け引きも少々あつたらんとし、薄味。主は元秀。（32分・11月23日・和泉会別会）

「隅田川」 シテ鏡之丞。大川端を暗示するかのような利久殿の縫箔は柳と飛燕、髪帯には御葉の文様、と装束の隅々に至るまで神経の行き届いた一番だった。面は曲見か。

幕を放れてからの、当て所なく風に吹かれるかの風情はカケリの浮遊感となり、ハ跡を尋ねて迷ふ心細さにはろりとシオルに至る心象描写が先ずひきつける。更に葉平の歌に抱く淳子への思いは、ハ問へども問へども、と手に持つ笹の葉先に伝わり、細かく震える。思へば限りなく遠くも、と一ノ松に抜けて勾欄に寄り、笠に手をや

つて遙かを見る感慨にも一入のものがあった。淳子としたワキ語り（雅之助好演）。身じろぎせず聞き入るシテは、「終に事終つて候」、でシオルが、その指は微かに雲々今にも鳴咽が聞こえるかであった。虚脱して直ぐには下船叶わぬシテとワキとの問答も切実なら、クドキの、徐々に感情が激しくなる辺りの感嘆も深刻。ハこの下にこそあるらめや、と語気強く立って塚に迫り、土を掘り返して吾子を見せよの辺り鬼気迫る思いだったが、淳子の幻を追うところは割と内輪だった。キリは、ハ東雲の空も、と左手を上げ、ハ明けゆけば、と下すと、ハ塚の上の、と両手で交互に去り難く撫でるようにし、ハ浅茅が願、と下居すると、うつむき加減にシオリ留とした。

子方は清水運太郎君。品があつて可愛く、そのため一層哀れを誘われたが、ワキツレ、山本清がワキと同装だったこと、前場のワキとの問答で、シテが「都にては見馴れぬ鳥なり」を抜いた（抜けた

のか？）のは不審。とまれ、抑制を利かせた心持よりも、出色の描写力で見せた隅田川だった。地は保利・貴弘ら、唯子は希世・啓次郎・定男、後見は嘉夫・祖父江修一。（1時間26分）

「雁鴎」 シテ松次郎。隠れもない射手と大言はするが、既に通りがかりの男の隣で死んだ雁を射るのにも大膽さ。言行不一致の、おどかな大名の素つ頓狂な味わいが極上。（17分）

「道成寺・赤頭」 シテ鏡二。襟白二・薄い萌黄地金襴袴・黒地宝相華尾縫箔腰巻・紺色した赤地鳳凰枝垂袴文様腰巻重拵。大柄なシテが密かに期待するところあつて静かに運んで来ると、そこに自ずから緊張を孕む。次第・サシ・道行はむしろ抑え気味に、「あら嬉しや」と一呼吸置いたところから弾むような解放感が生まれ、「連分舞を舞ひ候べし」の意気込みがひしと伝わる。物着済み、一ノ松で鏡を見込む静かな意志が好ましい。乱拍子は石段を上る心とか。小鼓は舞一、兄弟の角逐が見事。そしてひたすら上りつめると、鏡に向って駆け出すような気分、鏡に向って急脚に爆発する。鏡入は脇正席だと鏡に同化するように見えた。アイ又三郎・信行。御注進役を互いに押し付け合い、合合々々なのは親子鏡演の微笑ましさであるが、対照的にワキ茂十郎は悠揚迫らぬ重厚味で四辺を圧する。

後場は、鏡を引き上げる前に寸刻の遠慮があつて心配したが、やがて鏡鉢が鳴ってほっとした。白綾被つて踊るシテ。立上ると、赤頭・面真蛇・緋長袴の姿は如何にも大きく見え、偉丈夫のワキとの対決はダイナミックでスケールの大きな道成寺になった。キリは、ハ深淵に飛んで、と二ノ松先で跳び込むと、後は膝行して幕に入つた。それは全精力を使い果し、氣息奄奄迷れる蛇身そのもの、真蛇の面が実に効果的だった。第六郎兵衛・大鼓・鉦一・太鼓喜太郎。地は鏡之丞・四郎ら。後見保利・稔・郁子、鏡後見貴弘・拓司ら。（1時間32分・11月25日・久田秀雄七回忌追善能）

「狂言共同社」

「名古屋和泉会」

「狂言共同社」

「名古屋和泉会」

「狂言共同社」

「名古屋和泉会」

「狂言共同社」

「名古屋和泉会」



前川光隆  
前川光長

京都市右京区御室芝屋町一ノ六  
名古屋市中区東区二丁目13番3  
ツインクルガーデン前野舞台  
電話九三二一八八〇六番

大蔵狂言会  
大蔵彌右衛門  
大蔵彌太郎  
大蔵吉次郎

川崎市麻生区岡上四三八一  
電話〇四四（九八七）一一八七番

茂山千五郎  
茂山真正義  
茂山真吾  
茂山千三郎

京都市上京区中筋通り石薬師上ル

狂言共同社

名古屋和泉会

狂言共同社

茂山忠三郎

京都市左京区北白川大宮町47  
電話〇七五（七〇二）二〇一〇番

能楽の友社  
同人一同

野村又三郎

名古屋市中区正木二丁目16番25  
電話（三三三）七五五三番

朝日カルチャーセンター  
唯子教室  
小鼓 後藤孝一郎  
丸栄スカイル10階

栄能楽舞台  
名古屋市中区栄五丁目一四  
電話（二六二）一一八三番

楽諷庵舞台  
名古屋市中区南區流川町四七七八三  
電話（八三三）七〇〇一番

葵心庵舞台  
尾張旭市東大町原田二四九三ノ二  
若杉ビル（旭市役所南）  
電話 〇五六一五〇二三四六番  
能舞台 電話〇五六一五〇〇六九八

年賀欠礼申し上げます

武田詠楽会  
武田欣司  
武田邦弘

東京都世田谷区三軒茶屋二一〇一三  
電話（〇三三四）二二六三三番

観修会 祖父江修一  
多治見市日ノ出町2丁目  
電話（〇五七）三三六五六

彰諷閣舞台  
名古屋市中区植田西二丁目八〇二二  
電話（〇五二）八〇五三三〇一  
連絡先 名古屋市中区鳴海町有松寮409  
電話（〇五二）六二二一四三三八

演能写真  
ウシマド写真工房  
〒602 京都市上京区北野上七軒  
電話（三三三）一三四四番

ビデオ撮影  
西川企画  
〒451 名古屋営業所 名古屋市中区名駅  
212013 輪の内庄 小坂方  
電話（〇五二）五七一五八二六  
〒500 岐阜市北野町2012  
電話（〇五八）九八六九番

〔お断り〕  
年賀広告の掲載につきましては紙面の都合上、掲載は順不同ですのでご理解賜りますようお願いいたします。

金剛流  
名古屋周星会  
岐阜周星会  
吉川周子

名古屋市中区西崎町三三六  
電話（〇五二）七六一二二五七七

名古屋和泉会  
大垣狂言の会  
和泉元秀

名古屋和泉会  
大垣狂言の会  
和泉元秀

エンゲージリング 山田宝石 貴金属・時計・装飾品 名古屋・本山駅 電 762-2434代表

# 能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社 名古屋市中区千種2丁目18-18 (郵便番号 464) 電話 (731) 7984 振替口座 名古屋 0-36393 購読料 1年1000円 郵送の場合 1年1500円 一 部 90円

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿) (3月) 2日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料) (番組①面) 3日(日) 大蔵狂言會 (来場歓迎) (番組①面) 10日(日) 三文會大善會 (来場歓迎) (番組②面) 17日(日) 武田道善會 (有料) (番組②面) 21日(祝) 梅泉會大 (有料) (番組③面) 24日(日) 登泉會大 (来場歓迎) (番組③面) (4月) 13日(土) 青陽會定期能 (有料) 14日(日) 觀世會定期能 (有料) (番組②面) 21日(日) 邦舞會 (来場歓迎) 27日(土) 能の正會 (有料) 28日(日) 久田會 (来場歓迎) 29日(祝) 幸友會春の會 (来場歓迎) (5月) 3日(祝) 中部電力全社大会 (関係者) 5日(祝) 翼會大 (来場歓迎) 6日(休) 朋會大 (来場歓迎) 12日(日) 能楽と三曲の會 (来場歓迎) 18日(土) 觀世九奉會定期能 (有料) 19日(日) 狂言やるまい會 (有料) 26日(日) 名古屋観劇會大 (来場歓迎) (6月) 2日(日) 大槻清韻會能 (有料) 5日(水) 熱田祭奉納能 (来場歓迎) 9日(日) 名古屋観世會定期能 (有料) 15日(土) 叶石會・一關會 (来場歓迎) 16日(日) 名古屋生會定期能 (有料) (演能変更の節はご了承下さい)

### 中日名匠鑑賞能

#### 能「松風」「葵上」上演

#### 4月6日愛知文化講堂で

中日新聞社主催、文化庁後援の重要無形文化財「中日名匠鑑賞能」は、四月六日(土)愛知文化講堂で催される。中日名匠鑑賞能は、今回で八回目、昭和五十八年まで二十八回を数えた中日五流能の伝統をひきつ

ぎ、小唄つき演能。觀世清和宗家、觀世元昭、觀世善之、関根祥六、武田志房、藤井徳三、坂井重、吉井順一、藤田大五郎、茂山千五郎、茂山千之丞の諸氏が来演する。能「松風」戯之舞(觀世清和、ツレ武田宗和) 狂言「観世」(茂山千之丞、茂山千五郎) 能「葵上」空之折(觀世元昭、ツレ小島一英) はか舞(舞子、仕舞など)。前売特別席九千五百円、A席八千五百円、B席七千円、C席五千円(全指定席) 取扱い「中日サビセン」センター、中日新聞社文化事業部(電話〇五二二二二一〇七二九) デパートプレイガイド、能楽師宅。

## 狂言共同社創立100周年

### 〈狂言その世界〉

#### 3月21日 市民会館で記念公演

名古屋の和泉流狂言の伝統を守り活動している「狂言共同社」は明治二十四年(一八九一年)に創立されてからこととして丁度百周年にあたり、これを記念して、市民会館市民会館と共催により、市民の劇場「日本の心シリーズ」狂言その世界」のテーマで記念狂言會が三月二十一日(祝)名古屋市民会館中ホールで開催される。公演は、大蔵流、和泉流の名手を一堂にあつめ、名曲、人気曲をそろえ、一部(午前十時半開演)二部(午後二時半開演)の入れ替え制である。演目は次のとおり。

- 幸四郎、大蔵弥太郎 「止動方角」(茂山千五郎、茂山千之丞、茂山忠三郎、茂山千三郎)
- 錦八郎 「和泉元秀、和泉元弥、鳥越正夫」
- 右近左近 「茂山忠三郎、茂山千之丞」
- 「棒縛」(野村万作、野村又三郎、野村武司)
- 「花折」(佐藤友彦、井上礼之助ほか)
- 入場料 指定席五千円、自由席三千円。
- 取扱い「市内各プレイガイド、狂言共同社」(電話〇五二二二二一〇四三〇井上、〇五二二二二一〇一八七八八佐藤) 名古屋市民会館文化課(〇五二二二二一〇一四一)

### 平成3年2月・3月放送予定

FM能楽鑑賞 (午前8時~9時)

(2月) 24日(日) 觀世流「当麻」觀世鎮之丞

(3月) 3日(日) 觀世流「竹生」島梅若万紀夫 10日(日) 寶生流「羽」朝倉原太 17日(日) 觀世流「屋」木原康九 24日(日) 和泉流「扇」三宅藤九 31日(日) 寶生流「葵」上宝野ひろ

教育テレビ(午後2時15分~3時15分) 3月17日(日) 能楽界の話題 和泉流狂言「米市」(再) 故・三宅藤九郎ほか (放送予定につき変更の節はご理解下さい)

### 平成2年度名古屋芸術賞

#### 觀世流久田徹二氏 芸術奨励賞を受賞



久田徹二氏

名古屋芸術賞は昭和五十年に創設され、芸術奨励賞は長年に亘り優れた芸術活動を行い、芸術文化に大きな功績のあった個人又は団体、芸術奨励賞は継続的に活発な芸術活動を行い、今後とも芸術文化の振興に寄与することが期待される個人又は団体に授与される。今年度は芸術奨励賞にパレエ、佐々木恵子、日本舞踊・藤間勘察の両氏、芸術奨励賞は久田徹二氏とともに現代彫刻・黒瀬社、演劇・西川好弥、テロ・渡辺真帆子の四氏が受賞した。授賞式は二月二十日午後四時から名古屋東急ホテルで行われ、賞状と副賞(芸術奨励賞百円、芸術奨励賞五十万円)が贈られる。久田徹二氏は、昭和二十二年十月一日生れ。觀世流能楽師久田秀雄氏次男。四才で初舞台、子役として数多くの舞台を踏み、三十八年上田照也師入門、四十九年独立、「石橋」五十二年「狸々乱」五十五年「道成寺」を披く。久田觀正會を主宰し後進の育成を始め、五十一年のヨーロッパ公演への参加、自らの主催による五十八年のオランダ公演等海外における公演実績も多い。五十年から六十年にかけて明石、神戸において古典能の会を主催、能に新たな光をあてる試みに挑戦するなど、活発な活動を展開し、五十八年には能「井筒」で大阪文化祭奨励賞を受賞。六十一年から毎年、名古屋で「久田徹二能」(リサイタル)を開演、平成二年開催された亡父の追善能における「道成寺」(赤頭)は高い評価を得ている。長年の修練に培われた基礎の上に、能に現代的な演出を導入しつつ、年間十二番に及ぶ能を舞い、常に新たな演能に挑戦しつづける名古屋の觀世流の若手として今後の活躍が期待されている。

### 邦謡會能

3月23日 国立能楽堂で 邦謡會(梅田邦久師主宰)は、三月二十三日(土)東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂で「梅田邦久還暦記念・第十三回邦謡會能」を公演する。

能「養老」水波之伝(シテ梅田邦久、天女・觀世咲夫、ツレ片山伸吾、ワキ宝生開)

能「大原御幸」(シテ片山九郎右衛門、内侍・觀世芳宏、局・觀世芳伸、法皇・觀世元昭、ワキ宝生開)

狂言「蝸牛」(野村万之丞)舞臺子「天鼓」(觀世清和)仕舞「白楽天」(青木祥二郎)「西行棋」(片山慶次郎)「弱法師」(觀世鎮之丞)「野守」(片山清司) 開演十一時、全館自由席、入場料、七千円、学生三千円。

### 名古屋能楽鑑賞會 (第3回)

三月二日(土) 午後二時始

熱田神宮能楽殿

解説 能楽評論家 西 哲生

狂言 鈍 太郎 野村又三郎 後見 井上礼之助

近藤乾之助

宮 宝生 開 河村大 大倉源次郎 藤田六郎宗衛

後見 辰巳 孝 地福 耕司 田崎 隆三 衣斐 正宜 鬼頭 嘉男 佐野 晴明 吉田 俊彦 水上 輝和

主催 名古屋能楽鑑賞會 事務局 名古屋市中区大幸四丁目26番田方 TEL 七三二一四〇〇〇

### 第21回 大蔵狂言會・なごや會

三月三日(日) 正午始

熱田神宮能楽殿

小舞 泰山府君 幼げしたる物 大蔵 基誠 眞船 道明 大蔵 太郎

狂言 花 争 中津 恵吉 大西 安春 小舞 布 亮 村松 泰子 高橋由里子 海 貝 尽 新美 淑子 高倉 昌子 中村 つや 上野多佳子 福部 飛 龍 立川 一枝 藤本 道子

狂言 長 光 大塚 寿 小舞 山 伏 丹羽 節 喜賀 栄子 計盛 紘子 河村 文子 小野 加津子 岩田 栄 余路 将尊 若林 邦昌 牛田 敏明 大蔵 基照

狂言 入 間 川 松川 佳澄 牛田 敏明 大蔵 基照

千 鳥 宮本 昇 大蔵 弥右衛門

附 祝 言 (終了予定 四時二十分頃)

主催 大蔵狂言會 事務局 名古屋市中区千種2丁目28番6 電話(〇五二)五二二一三五七四

去月雅日記 (114)

神の里

えと文 二井栄逸

ゆきくれて 白一色の 神の里...

雪の能に葛城がある。山人の笠もたきも埋れて...



と深くむすばれた女性の面であるが、増の面は男性全く意識しない...

増の創作は増阿弥で、作者の名前をとって、増、あるいは増女とつけられている。

二井栄逸氏能画 「野宮」を公開...

三交会春の会 三月十日（日）午前九時半始...

訃

人間九世三宅藤九郎氏 人間国宝、狂言方泉流の九世三宅藤九郎氏は昨年十二月十九日...

宝生流 内藤泰二氏逝去 宝生流シテ方、内藤泰二氏は二月四日午前一時三分、前立線がんと...

内藤泰二先生を憶う 内藤先生の訃はその午後、鬼頭英二さんから聞かれた。今年度宝生会初回の御案内を一月七日付で頂戴した時、番組にも年度予定のシテにも先生のお名前が無く、

十四歳。 告別式は九日午後一時から東京・東日暮里五の善性寺で執り行われた。喪主は長男常好氏。

わいの芸術を拓き、ワキ方の重鎮として活躍、五十六年観世寿夫記念法政大学能楽賞、五十六年度芸術選奨文部大臣賞、五十八年度芸術選奨文部大臣賞、五十九年度芸術選奨文部大臣賞、五十九年度芸術選奨文部大臣賞、五十九年度芸術選奨文部大臣賞。

三交会春の会 三月十日（日）午前九時半始...

Table with 5 columns: Name, Role, Name, Role, Name. Lists participants for the festival.

Table with 5 columns: Name, Role, Name, Role, Name. Lists participants for the festival.

藩祖義直の頃の狂言師としては京都市の、慶長十九年(一六一四)年、百石八人扶持で召し抱えられた山脇和泉守元宜が、元宜は、実質上の和泉流狂言の創始者である。

山脇和泉家は、元來は摂津猿楽鳥飼座の出で、京都で手猿楽狂言の一座を成していたとされる。初めは主として禁裏および公家の御用を勤めていた。大藏流・猿流の二流が、それぞれ、金春座・観世座に属して、幕府直属の家柄となっていたのに対して、和泉流は、尾張藩に属し、禁裏の御用も勤めると言った、独自の流儀であった。山脇和泉家は、一流を樹立するに、弱体であったために、同じ手猿楽狂言者で、京都で活躍していた三宅藤九郎・野村又三郎の両家を加えて、和泉流を形成した。三宅藤九郎家は三世喜納の代から加賀前田藩に、野村又三郎家は、二世又三郎信之の代に尾張藩の雇いとなり、三世又三郎信明の、正徳三年三月に、尾張藩の抱えとなっていたのである。

山脇和泉元宜の系譜を示すと、次のようになる。

流祖佐々木岳楽軒(江州坂本の隠士、室町前期)——二世佐々木藤五郎元幸(岳楽軒甥、和泉一葉軒)——三世鳥飼五郎左衛門尉元純(一葉軒甥)——四世日吉万五郎超運(一葉軒弟子、もと大和猿楽金春座の狂言方で、後に京都手猿楽師の師匠格となる。)——五世宇治源右衛門光映(万五郎甥)——六世鳥飼和泉守元光(三世元純の孫子。五郎左衛門、改姓山脇)——七世山脇和泉守元宜(元光が鳥飼から叔父の氏で江州坂本の社家でゆかりの山脇に改姓したのは、官中から賤民として扱われる摂津猿楽出自の痕跡を消して、手猿楽狂言役者の立場を明確にしたものと思われる。手猿楽者出自のすぐれた役者には官中から受領号が与えられる慣習があったようである。元光は官中から石見守および和泉守の受領号を受けている。この頃、山脇和泉家の芸の基礎が確立したようである。)——八世山脇和泉守元宜(鳥飼和泉守元光の孫子。五郎左衛門、道仙。万治二年没。)——元宜は、一説には、始め石見守

と称していたが、後に和泉と、受領名を変更している。尾張家の中に、「石見」あるいは、「石見守」と称する人がいて、まぎらわしいので、「和泉」と名を替えたようである。先代の元光の「鳥飼和泉守」という名と、どうかかわりあうのかは不明であるとしている。

(注1)「名古屋市史」では、一六三一年(寛永八)年、禁裏で「花子」を演じて和泉守の受領号を受けることある。一六三五年(寛永十)年、大藏流に風流五番を、一六四六年(正保三)年、猿流に、「花子」「釣狐」などを伝授している。「わらんべ草」(大藏虎明著)八、十段に、次のように記してある。

「花子の狂言、是二番ハ、第一代にせられたる事見ず、さかず、しかるを、今の驚、又弟子の傳右衛門仕る事、誰にならひたや、ふしきなる事也。親類しらねばこそ、むこの仁政を、山脇和泉かたへやり、花子をならハせしと聞し也。」

次郎が、十八世をつぎ山脇元康を名乗った。十八年(一八九三)に、私行上の不祥事のため能楽界を引退している。その後、三宅藤九郎の長男があとをついで、十九世山脇保之(昭和十二年八一八九三七)となり、昭和二十一年に和泉と改姓して今日に至っている。

現在、山脇和泉家の系譜は、弟子家である、山脇藤左衛門・早川幸八両家の門弟達と芸系の相違する野村又三郎信成の門弟達によって結成された、名古屋の狂言共同社に伝えられているだけである。

山脇藤左衛門家は、山脇和泉守元宜の弟子、佐々藤左衛門が初代である。佐々藤左衛門は、元和年中(一六一一—一六一三)に、元宜の弟子、山脇正五郎、山脇権三郎、渡辺甚三郎、筒井市三郎の四人と共に、尾張藩主義直に、五十石で召し抱えられたが、間もなく急に五人とも解雇され、寛永年中(一六二四—一六四三)に、全員召し返された時、他の四人はすでに他藩に

〇)に尾張藩雇いとなり、同九年に、藩に召し抱えられている。四世幸八(享和二年八一八〇—二〇)明治十年八一八七—七の頃、嗣子なく絶家した。幸八の門弟、初代井上彌次郎、伊勢門水が、名古屋の狂言共同社の創立員となる。

野村又三郎家は、すでにふれたが、山脇和泉元宜が、和泉流を樹立する際に傘下に入った、手猿楽の家柄である。初代又三郎は、細川藩および堂上諸家で舞臺を勤めていたようである。二世又三郎信之(享保五年没八一七〇—二〇)は、初代の死にともなって、正徳元年(一七一)に、家督を相続する。初め加賀前田藩の抱えとなったが、後継かれて尾張藩の雇いとなる。三世又三郎信明の正徳三年(一七一三)に、尾張藩の抱えとなる。切米二五石、扶持江戸四口、尾州三口を与えられる。

九世野村又三郎信成の代に明治維新になる。この門下の山本文平、河村健三郎などが、名古屋の狂言共同社の創立員となる。十世野村又三郎信英は、大正六年(一九一七)、東京へ移住するが、十一世又三郎は、昭和三年に名古屋に移住し、今日に及んでいる。

以上、藩祖義直時代に關係する狂言師で、現在の名古屋狂言師にも通じる人達を、主に説明した。なお、上記の文は、「名古屋市史」「狂言辞典」「狂言総覧」「岩波講座、能・狂言」などを主に参照し、まとめたものである。今回は二代目尾張藩主、光友の時代の能・狂言にふれた。

注1「岩波講座能・狂言」V狂言の世界による。

注2「狂言辞典」事項編を参照した。

注3注1と同じ参考文献による。

### 名古屋梅猶会定期能

三月三十一日(祭) 正午始

熱田 神宮 能楽殿	新保 徹夫	井内 和男	池内 幸三郎	寺岡 佑子
萬ヶ丘 菊池 重郎	新保 徹夫	井内 和男	池内 幸三郎	寺岡 佑子
姥ヶ丘 梅若 盛彦	新保 徹夫	井内 和男	池内 幸三郎	寺岡 佑子
河村 敏也	河村 敏也	河村 敏也	河村 敏也	河村 敏也

〔有料〕 主催 名古屋梅猶会 附祝言 主催 名古屋梅猶会

### 名古屋観世会定式能(二回)

四月十四日(日) 十二時半開演

熱田 神宮 能楽殿	吉田 定男	藤田 六郎兵衛	中川 雅章
吉田 定男	藤田 六郎兵衛	中川 雅章	吉田 定男
藤田 六郎兵衛	中川 雅章	吉田 定男	藤田 六郎兵衛
中川 雅章	吉田 定男	藤田 六郎兵衛	中川 雅章

〔御来場歓迎〕 主催 名古屋観世会

### 尾張藩の能の歴史(三)

辻 宏

芸の趣きについては、山脇和泉家文書「狂言由緒略」に、「あらあらしくまたやさしく珍しき風儀」「若年よりわがまままに風儀人になり、すぐれて大声にて狂言もしはらしく仕儀」と、書かれている。

寛永年間(一六二四—四三)書写と思われる「狂言六義」上下と「狂言抜書」は、元宜の筆録とも言われる。和泉流狂言二三番と、一五二番の狂言から歌謡や語りなどを抜粋している。和泉流の確立を志したものと思われる。(注2)なお「狂言六義」については、元宜の養子八世和泉元永の書写で寛永末頃から正保三年二月、元永没までの間とする説もある。(注3)

山脇和泉家は、十七世元照(明治二十年八一八七—七)大正五年八一—九六の頃、中絶し、和泉は宝生流家系に預けられた。昭和十五年(一九四〇)、十六世元清の末娘・ゆき子の夫である佐藤清

### 面打教室

於名古屋・栄 朝日神社

毎週木曜日及び土曜日(それぞれ月四回)

教室の見学・能面お求めに方お気難におこし下さい

## 日本能面巧芸会

会長 林 龍 雲

事務局 名古屋市中区錦一丁目三三三九番ビル3F  
晃栄化学内 電話(〇五二)二二二一—四四五一

### 壺泉会大会

三月二十四日(日) 午前九時始

熱田 神宮 能楽殿	片岡 幸子	藤田 六郎兵衛	中川 雅章
片岡 幸子	藤田 六郎兵衛	中川 雅章	片岡 幸子
藤田 六郎兵衛	中川 雅章	片岡 幸子	藤田 六郎兵衛
中川 雅章	片岡 幸子	藤田 六郎兵衛	中川 雅章

〔有料〕 要員券、当日券八千円(自由席)

紅梅記

一年末年始

平成三年、元旦の月は満月であつた。冬の月が荒々しく動く地球をみおろす。丸い月は珍しく、それが月末の満月の頃になると、日中硝子越しの日射しが春の到来を覚

えさせる。

毎年の正月のテレビ(NHK)は元旦が泰山府君(金剛殿、一昨年正月のラジオでもよく)。花の命の曲、明るく楽し。しめなわを飾る舞台(宝町)奥ゆかし。以下おなじ。二日は狂言二題で、三本柱(野村万之丞)と福部の神(茂山千五郎)。すがすがしくおもしろい。三日は芦刈(野村四郎)。夫婦再会(三木三木)と芦刈の舞台(画面)は赤茶の色の合いがよいと思つた。それと、朝七時の開始は早い。元旦の舞(雅楽)も早朝の六・一五から。毎年である。さて十五日の鉢木、当代の名

人友枝喜久夫氏(喜)の芸にみ入る。右手が老体で終始ゆるが、謡しつかり動きに潤い。深い味わいを喜ぶ。ワキ(森茂好)佳。ラジオ(同)の方は三日と十三日の二回で新作能。佐渡をきく(十一月四日)金春田満井金特別公演。作詞・作曲は金春信高氏。増田正造氏の解説がつく。視野広く懇切丁寧(三回あり)。開かたで重い。老女物や、構成はちがうが定家などが頭をかすめた。シテ、佐渡に流された晩年の世阿弥。作者信高氏が勧める。この老妻のシテを孫娘(ツレ、金春信高の子)が供(ツレ)を連れて訪ね、話にだけ聞いていた祖父にあう。ワキは出す。所の者(アイ)は出る。まず老妻(アイ)は出る。孫を問ひ、無事を喜ぶ。なつかしむ孫娘と恐ろしく神竹の弟子であらう供の者で夜を徹して語り合う。教

え(離見の見ほか)を授け、若い孫のあでやかな熊野の舞をみて、在りし京都をしのぶ。作中こたけが明るい。秋の夜は過ぎ朝を迎える。宙目の景清とはちがひ、お互い相手の姿を目に焼きつけるようにして別れる。終つたかにみえて、今少し金鳥香の一句が口ずさ

まれる。このところがよきそである。これはたとえ「閑寺小町」の終り方、巴の切りや西行の終りのようでもある。装束のことは説明がなかった。能楽タイムズ(二月)の山崎有一郎氏担当の批評欄に載る写真で、老体のオモテは割合きびしく、水衣、着流しで頭巾をかぶる。女のソレは小面であらう。

これより先き、新作謡曲(金鳥香)も同氏放送できたが、これに次ぐ意欲の力作。機会あれば是非みたい。また近頃の新作・復曲の一篇でもある。

新作と言へば、二月の演能に臨死(心臓移植)をテーマにした新作能が披露される。七日、橋岡久馬・作曲、作詞は多田富雄(医師)東大教授、舞臺監督は橋岡主幸、昨年の社中能で定家の小鼓も打つ、新生面、文芸宗教(哲学)・科学の交差する中で表現される現代の生と死(倫理)の活問題に大きな関心を寄せたい。昔の中国と日本を演能場所とする筋は省く。後になつたが曲名は「無明の井」。(野村広二)

代続く家もある(井上松次郎家)その百年の狂言記録集を松次郎氏がこつこつとまとめ、完成が間近いと伝え聞く。完成の時は名古屋の貴重の上ない資料とならう。

三宅庄市(先代三宅藤九郎)氏昨年十二月十九日逝去。八十九歳。亡兄野村万蔵氏ともども人間国宝で、兄は重厚、弟は繊細。軽味また深味は双方共十分。若い頃は「二ツ金の飯」を食べた仲、狂言芸を勤め合う。NHKの謡曲・狂言の時間創設に努力された一人。名古屋へは随分前から来ておられるはず。戦後も愛文講堂舞台技師の三番更替掛りノ舞が思い出深い。木六歌・宗論(無布施経もか)・枕物狂・花子・水汲(藤・保之入のち元秀)・くじ罪人(万・藤・保・腰折(藤・右近・又三郎)など秀箱の一端。年賀状には自作の干支小舞謡を添えられた。

千作(二代)・忠三郎(先)・弥五郎・東次郎(先)・万蔵・藤九郎(先)諸氏のよき時代は語り草と記録の輝かしい中に入る。(野村広二)

「歳末助け合い運動・協賛能」と「野村又三郎古稀・福井啓次郎還暦・祝賀乱能」竹尾 邦太郎

「清経」ワキ淡津三郎・元、初同で気持整えるかに直して扇を開き首に掛けた髪をゆくり外してそこに載せ、ツレに遊上する辺りのしめじみとした感懐は上々。シテ雅章。ツレ(里翠)との絡みは少々懸隔が過ぎ、気分を変えての床几での合戦譚も辛気臭い。鉢巻が眉の上に滑り、中將の眉間の皺が深更目立つ面の表情にも現るうか(途中で後見が直した結局滑つてしまふ)。

クセの型どころは、ハ持つことありや眺め、と扇カザして斜に見上げるところ、ハ腰より横笛、と開いた扇と笛に擬するところ、ハ西に傾く月を、見るところなどなど、感懐的な公達のナルシズムの世界を垣間見せ、邦久・修一以下の甘美な地がこれを支えた。(57分)

「姑」当地では稀な喜多流の「姑」とあって流儀上げての意気込がひしひしと感ぜられ、期待に応えシテ長田の好演。

他流と異なりワキ(飲也)は後場に出る。そのためツレ(松井彬)とシテとの関わりがより密になる。

西下するツレの、道中を急ぐ何がなし心細さの漂う風情を形がしつとり見せて導入部から緊張する。静まり返る屋敷に案内を乞うツレに、無沙汰故の敷居の高さを感じさせる冷え冷えとした空間。そこへ憑かれたように出るシテ。孤獨を託つ憂愁の想いが一入深くなる。思ひの丈は静みと感懐になり、やがて静寂となつて、ハ感かの心やな、と正中下層に収束する。そして東の間ののりやが暗れると、今迄聞えなかった姑の音までが耳に届き、するとそれが唐の蘇武の愛情譚を想い出させることになつて再びシテの心を掻き乱す。面は深井・襟白・白摺袴・秋草文様無

「養上」シテ正宜。ハ様の弓の音は何処ぞ、と附せ加減に面遣い、或かれて来た所以を探り、ハ姿なければ、とたじくんと退つてシオル辺りの猶疑と失望の均交せになつた心持や、養上(出小袖)を打たんと居立ちはしても、気分委えて下居シオル邊の心持、など旨い。また、ハその面影も恥かしや、と扇で面を蔽い、唐織引き被るとき、髪帯がはらりと面前に垂れて鬼女の角にも見えたのが後シテを暗示するよう面白かつた。

後シテは何となくせかせかして居り、ワキ・雅介も急ぎ立てられてくるよう、折りからシテ・ワキの攻防も精彩が感じられなかつた。(49分、平成2年12月2日、歳末助け合い運動・協賛能)

「蛇足」いくら女の時代とは言え、女の怨みや妬心が三番続けば、男の気も滅入るのではなからうか。

舞臺子「養老・水汲ノ伝」シテ府二。悠揚迫らぬずかずかとした運びは大人(たいじん)の風格で、これぞ家元芸の面目。

舞臺子「安宅」シテ義太郎。ハ手まつ通る、で地が透らされての苦笑。大兵ながら必細気な弁慶は伏目がちで男舞も柔らかく静か。

「卒都婆小町」シテ啓次郎。花ノ丸文様を散した鶯色の縫綴腹巻の残りの色香。面は老女。重いが上に重々しく、幕内に姿現わしてから幕放れまでが少々じれったい位。二ノ松で胸杖のつもの杖に縮つてのクツロギ。千鳥掛に一ノ松に出で直すと勾欄に寄り、壁に向きを変えて一足踏めると、ハ身は浮草を、と果敢な気にかき、か細い笛(栄夫)がムード(?)を出す。舞台に入り、ハ月の桂の、とワキ正に向いて笠に手をやり、二足踏めて、ハ漕ぎゆく人は、と退つて返しに胸杖するまで、描写的確で次第に調子が出てくる。笠を脱ぎ、髪桶もびたり決まって中々のもの。ワキは千之丞と真吾、着流儀である。卒都婆に坐るシテを見始め、教化して退けようの意気込みは激しかったが、見事に一本取られ、ハ頭を地につけて、と文字通り頭擦りつけ両手上に向けて深々と叩頭する果敢なき。そして、

素性が知れ、ハ影恥かしき、と笠で面を隠す髪桶の一方、現在の境遇に突然目覚めるかの狂乱の物乞いは、シテの人柄も出て過激にならなかつた。

物着に風打帽子と鍔金色薬師屋し文様の長褌を着けると風姿は一変と上り、還暦と自祝する啓次郎、重習を立派に勤めさせた。なお、幸・総一郎・幸一郎ら大小獅子方俵友の地が好調で花を添えた。(1時間23分)

仕舞・一調寸感、「高砂」富司忠、生真面目。「笠ノ段」総一郎、円熟の男舞は雲間気上々。大向うから黄色い声が出る。「三笑」喜太郎・幸一郎・定男、ハ一度にどつと、という訳にゆかず、上撮った笑いが愛敬。「狸丸」松次郎、武張つた狸丸の、ハ足元はよろよろ、の泥酔のよろめきぶり。太鼓一調「姑」缺之丞、顔は又三郎と啓次郎の催主二人。蓋し玄人はたしと言ふべきか。箱声と共に花東の華やきは人気役者のもの。

舞臺子「菊慈童」シテ万之丞。祝言らしい楽の調達さと規矩の正しさ。ハ山のしたり、と面遣り切り神妙。

「安達原」黒頭・魚ノ出「この辺りに、エイト人里も」、と宿借りんとするワキ孝。「案内とはたそら」、と応えて一度は宿を断るシテ又三郎。しかし、ハ流石思へば傷しさに、戸を細目に開けてそつと様子覗うのが蟹女の面と相映つて可笑しい。クセを抜きロソギ。地との結合の間、神竹輪廻したり止めたり手捌きが良い。ハ月に夜をや、と右上を見、ハ泣き明かす、と居立ちかけて安座双シオリは思い入れたっぷり。薪を取りに立つところは、これははたり忘れるところとばかり、「ヤッ、これはいかなこと」と、ワキを振り返り、「如何に客僧達」と、凄む。中人は一ノ松で止ると腰を叩き、背を伸ばすと不安そうに髪屋を望見するや意を決して駆け込ん

だ。

アイは願之。「目が冴えて寝られやへんのや」やら、羽根帯でワキを擦るやらの横着。拳句は闇を見ての仰天は「三ござる」を取り逃がして「落ちてござる」。

後シテは一旦三ノ松に姿見せて退くと加速をつけて一ノ松に走る。キツと面切るシテにアツと驚くワキに見所の笑い一頻。黒頭の猛々しきを見せつけて又三郎、幕に退くのが何となく未練気にもう一暴れの気配を醸して三ノ松で拍子踏むと、ワキは意気揚々と正先近く出て拍子二つ踏んでトメた。(1時間9分)

「泉山伏」シテ山伏・源次郎。「一折り折って頂かうと存じます」とやって来た巨漢の太郎冠者六郎兵衛に圧倒され、たじたとたなって尻餅をつくのもさもありなん。弱々な山伏との対照が妙。しかし、舞台の展開は、売れっ子(?)の家元と若家とあって稽古不足は否めず、炬を外し放しの茶番狂言。

「石橋・大獅子」前シテ老翁・千五郎。アクセントを利かせた大きなゼスチャアが白髪三千丈式のこの唐物の詞章によくマッチして説得力がある。「雲より落ちて数干丈」と、のけ反らんばかりに滝を見上げたり、いかなかな渡れるもんですかとばかり、ハ虚空を渡る如くなり、と大きく首を横に振るやうで、威風凛々を払う堂々たる風采のワキ寂照。忠三郎も些かびりり気味。それにしても、面(阿古父尉か)と直面とが渾然一体となつた千五郎の融通無碍の境地は将に仙人の化身。

後シテは又三郎(白)、赤三郎に万作・信行・武司の二組の親子競演が目出度い。幕放れでよろけとして元氣充沛の四頭の獅子の乱舞は、映き誇る紅白の牡丹をバックに上々のフィナーレとなつた。(45分、平成2年12月27日、祝賀乱能)なお、大小笛の三拍子を助めた栄夫の力演と、徳三の笛の好演が印象に残る。

書店

流元 剛行 金流 流本 観宗  
〒101 東京都千代田区神田小川町2-1  
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入  
電話 3291-2483 3311-2483 3311-2483  
電報 3291-2483 3311-2483 3311-2483



観世流謡曲本  
ちくさ正文館  
ちくさ駅前  
電話 1137

発行 能楽の友社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年 1000円

郵送の場合 1年 1500円

一 部 90円

能楽の友

若い御二人の門出に  
ふさわしい結婚式場  
名古屋 若宮八幡社  
各種合会や宴会にも御利用下さい  
(駐車場完備)  
名古屋市中区栄3丁目35-30 電話(241)0810

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

Calendar table listing dates from March to July with event names and fees. Includes entries like '梅 猶 会 (有料)', '登 泉 大 会 (来場歓迎)', etc.

岡崎薪能 4月1日  
能「熊野」狂言「千鳥」  
平成元年十月に完成した岡崎城... 二の丸能楽堂で、きたる四月一日、二日の両日「岡崎薪能」が催される。

鵜箒能 4月8日  
岐阜護国神社  
開演午後六時。問い合わせは岡崎市役所観光課電話〇五六四一二三六二一六番。

復曲「鶉羽」を上演  
能の会20周年記念  
4月27日 名古屋公演

能の会は昭和四十六年四月発会以来、より良い能を広く一般の人々に観てもらおうと大阪を中心に活動がつけられてきたが、ことし平成三年に二十周年を迎え、この記念公演が大坂、福岡、名古屋の三都市で行われる。

青陽会定式能 (第35期) 四月十三日(土) 十二時半始  
熱田神宮能楽殿  
網之段 瀬戸三津子 地謡 今沢美和  
後見 近藤幸江 飯富雅介 筑紫一 大野誠  
久田徹二 井上松次郎 後藤孝一郎

遊行柳  
橋岡久馬師  
森田光春後援会能  
名曲の本格的な演能をめぐらす観賞会として発会以来大きな関心がもたれて

広田後援会能  
4月7日 金剛能楽堂  
六回公演は、四月七日、金剛能楽堂で催される。

名古屋観世会定式能 (二回) 四月十四日(日) 十二時半開演  
熱田神宮能楽殿  
附祝言 主催 青陽  
附祝言 主催 青陽  
附祝言 主催 青陽

# 五月雅日記

(115)

## 空のアルバム

えと文 二井栄逸

金子戴園の作品の中に、次のような歌がある。

水無月の朝の心にひびくなり  
教会堂の鐘なりしきる。

私は、どういふわけか、この歌が好きで忘れることが出来ない。この歌には空のことばがうたわいていないが、私にはひろびろとした大空の映像が浮かんでくる。

水無月になると、雨季の為、梅雨晴れにかいまみる空が水鏡に輝き、殊の外美しいのである。

今朝、家を出る時、門の前で車を待っている間、空を見上げていた。

この程ずっと寒さが続いていたが、昨夜、夜半頃から気温が上がり、暖かくなったせい、今、眺めている空は、水無月の空のようにみずみずしく、私の目に入ってくる。

出、大空に連なる思い出のかずかすは、いつも水鏡にうつまわって、私の胸の中を去る。

私の創作活動の周辺には、執拗にこの水鏡の色がまつわりついているのであろうか。

× × ×

内乱の炎が、日本列島を包みつくしていった南北朝から室町の初め、世阿弥によって完成された能は、みがきぬかれた舞台と、豪華絢爛の織物美、洗練された能の風姿、省略された演出によって永い年月を生きてきた。



そして、今日、最も心強く思われることは、能はたしかに古典としてのもの珍しさからではなく、その象徴性に充ちた演劇性に内外から、高い関心を集め、現代に生きる演劇としての新しい光を浴びつつあるということである。

(平成三年三月四日記)

### ツクマス公演

近鉄アート館狂言會

ツクマス公演として定着してきた近鉄アート館(近鉄百貨店阿倍野店九階)の公演は今回第三回目を迎え、三月二十九日(金)三十日(土)の二日間、狂言、素囃子を上演する。

狂言(大藏流)「二人袴」(茂山千之丞、丸石やすし、茂山あきら、茂山千三郎)

ツクマス・素囃子(笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・大倉正之助、太鼓・上田悟)

狂言(大藏流)「初舞」替装束(茂山正義、茂山真吾、松本薫、茂山重司、地盤・茂山千之丞、丸石やすし、茂山千三郎)

開演午後七時、指定席三千五百円、自由席二千八百円。

問い合わせ近鉄アート館(電話〇六二五二二二二)

### 梅田邦久師還暦祝賀記念会(二)

四月二十一日(日)午前八時半始

熱田 神宮 能楽殿

須部 甫 高橋 和成

砂 梅田 邦久 寛 敏一 岩田 時代  
後藤 孝二郎 鹿取 希世

眞浦美智代

安間 忠一  
横江美貴子  
吉川 睦美  
小川 泰子

寛 敏一 谷口 君子  
後藤 孝二郎 鹿取 希世

飯島美津代  
奥村 妙子  
志水 芳子

都築正三郎  
有瀬 元善

西川喜代子  
種村とし江

河村総一郎 助川 竜夫  
後藤 孝二郎 藤田 六郎兵衛  
河村総一郎 助川 竜夫  
後藤 孝二郎 藤田 六郎兵衛

### 重要無形文化財

### 中日名匠鑑賞能

四月六日(土)午後一時開演

愛知文化講堂

舞臺子絵

坂井 音重 寛 敏一 小寺 俊三  
坂井 喜之 後藤 孝二郎 藤田 六郎兵衛  
吉井 順一 地盤 高橋 昭一 藤井 邦三  
馬 銀世 高橋 昭一 藤井 邦三

舞臺 桜

川ヶせ 岡 久広 今村 喜男  
坂 武田 志房 水島 元三  
武田 志房 水島 元三

能松

武田 宗和 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛  
銀世 清和 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛  
鏡木 崇男 藤田 六郎兵衛  
野村 又三郎

後見 武田 志房 地盤 加藤 保太郎  
銀世 喜之 地盤 祖父 江修一  
久田 徹二

能葵

小島 一英 小寺 俊三  
銀世 元昭 寛 敏一 藤田 六郎兵衛  
西村 敏也 後藤 孝二郎 藤田 六郎兵衛  
飯富 雅介

舞臺 上

清沢 一政 武田 邦弘  
高橋 昭一 坂井 寛次郎  
中川 雅章 岡 久広

附祝言

後見 武田 宗和 地盤 高橋 昭一  
吉井 順一 中川 雅章

主催 中日新聞社

〔入場料〕 特別席 九千五百円 A席 八千五百円  
〔前売〕 B席 七千円、C席 五千円

### 祝賀記念会(一)

四月二十一日(日)午前八時半始

熱田 神宮 能楽殿

須部 甫 高橋 和成

砂 梅田 邦久 寛 敏一 岩田 時代  
後藤 孝二郎 鹿取 希世

眞浦美智代

安間 忠一  
横江美貴子  
吉川 睦美  
小川 泰子

寛 敏一 谷口 君子  
後藤 孝二郎 鹿取 希世

飯島美津代  
奥村 妙子  
志水 芳子

都築正三郎  
有瀬 元善

西川喜代子  
種村とし江

河村総一郎 助川 竜夫  
後藤 孝二郎 藤田 六郎兵衛  
河村総一郎 助川 竜夫  
後藤 孝二郎 藤田 六郎兵衛

舞臺 神歌

須部 甫 高橋 和成

舞臺 高

砂 梅田 邦久 寛 敏一 岩田 時代  
後藤 孝二郎 鹿取 希世

舞臺 三

眞浦美智代

舞臺 松

加藤 千晴 寛 敏一 谷口 君子  
後藤 孝二郎 鹿取 希世

舞臺 胡

飯島美津代  
奥村 妙子  
志水 芳子

舞臺 田川

都築正三郎  
有瀬 元善

舞臺 隅

西川喜代子  
種村とし江

舞臺 梅

河村総一郎 助川 竜夫  
後藤 孝二郎 藤田 六郎兵衛  
河村総一郎 助川 竜夫  
後藤 孝二郎 藤田 六郎兵衛

舞臺 葛

河村総一郎 助川 竜夫  
後藤 孝二郎 藤田 六郎兵衛

舞臺 連吟

小林よね子 牧野あけ子  
山下 松江 溝口 幾子  
水野 龍子 野々山 幾子  
山中たね子 岡田 春江

舞臺 独

梅田 邦久 深川 寿美子  
梅田 邦久 高木 町子

舞臺 大原

河合六三郎  
加藤 茂

舞臺 花

梅田 邦久 小林富美子  
小野 朗 三宅川公香

舞臺 菊

河村 総一郎 藤田 六郎兵衛  
後藤 孝二郎

舞臺 女

河村 総一郎 藤田 六郎兵衛  
後藤 孝二郎

舞臺 采

河村 総一郎 藤田 六郎兵衛  
後藤 孝二郎

仕舞 春日 竜神 山口 謙介  
独 一角 仙人 梅田 邦久 平出 京子  
舞臺 養 老 高沢寿美子 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛  
水波之伝 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛

卒都婆 小町 木村 ひで 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛  
西行 波 長谷川 田鶴 坂野 嘉子  
阿 漕 加藤 井知子  
舞臺 柳 二木 卯子 上田 悟  
寛 敏一 鹿取 希世

松井 麗子 助川 竜夫  
安達 道子 鹿取 希世  
田中 美子 水野 美代子

徳田 大尚 徳田 文代  
飯富 雅介 寛 敏一 上田 悟  
西村 敏也 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛  
前後之替 杉江 元 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛  
野村 又三郎

舞臺 求 塚 田中 美子 水野 美代子

舞臺 舟 飯富 雅介 寛 敏一 上田 悟  
前後之替 杉江 元 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛  
野村 又三郎

舞臺 繪 馬 片山 渡次郎 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛  
片山 渡次郎 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛  
片山 渡次郎 上田 悟  
片山 渡次郎 藤田 六郎兵衛

〔御来場歓迎〕 協賛 青 上 梅 田 邦 久 会 悟 会

### 平成3年3月・4月放送予定

FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

(3月)

24日(日)和泉流狂言「藤 理」三宅 藤九郎 恵み  
31日(日)宝生流「葵 上」宝生 公 野ひろ

(4月)

7日(日)観世流「雲 林」観世 清和 助  
14日(日)宝生流「蟬 通」佐野 辰 善  
21日(日)金春流「忠 度」桜 間 善  
28日(日)観世流「碓 石」奥 善

教育テレビ(午前9時~10時)

4月29日(祝)新作能「無明の井」~観世流~  
多田富雄作、橋岡久馬作曲・作舞  
シテ 橋岡久馬

(放送予定につき変更の節はご理解下さい)

二代藩主光友の治世は、慶安三年(一六五〇)から元禄六年(一六九三)までの四三年間である。三代將軍家光の晩年から、四代家綱、五代綱吉の時代にまたがっている。なかでも綱吉は、能狂と言われるほど、能を愛好した。単に能を見るだけではおさまらず、自らも能を舞った。天和元年(一六八一)四月十日の「徳川実紀」の記事によると、

「十日二九にて猿楽御覧あり。はて、御みづから自然居士。雷電を舞たまふ。猿々は小姓有田伊勢守光明なり。」

又、天和二年十月二日の「徳川実紀」の記事にも、

「廿二日二九にて猿楽御覧あり。御みづから白鹿。東北。春日龍神をまはせたまひ。項羽は小姓斎藤飛騨守三政。海士。橋弁慶は中興番黒田惣右衛門直連。頼政。土御。百方は医者並小川孝榮某なり。」とある。自ら舞うばかりでなく、下の者にも能を、なかば強制して舞わせたのである。臣下の者で能き足りなくなると、五座や諸藩の能役者を、二九番、廊下番などの武士に取り立てて、城内の非公式の能を演じさせた。

貞享三年四月三日、綱吉の所望によって、御三家や有力大名が、二九で能を舞っている。その中に、尾張藩主二代目尾張中納言光友、尾張藩主三代目尾張中納言綱吉(つなのぶ)の名前が見える。

「徳川実紀」の記事によると、「三日家門並に松平加賀守綱紀を二九に召て、猿楽をなましめられ御覧あり。羽衣は紀伊中納言。松平は松平加賀守綱紀。江口は尾張中納言光友。春日龍神は甲府宰相綱吉。龍田は紀伊中納言光貞。海士は水戸宰相光圀。杜若は尾張中納言綱吉。小鍛冶は水戸少将綱吉朝臣なり。」とある。

貞享四年五月二日にも同じような顔触れで、能が演じられている。「徳川実紀」の記事によると、「廿一日家門並に松平加賀守綱紀を二九に召して、猿楽をなましめ給ふ。高砂は紀伊中納言綱吉。八島は甲府宰相綱吉。杜若は紀伊中納言光貞。梅枝は松平加賀守綱紀。殺生石は水戸少将綱吉朝臣。狸々。乱は尾張中納言光友。役せらる。」

伊中納言光貞。梅枝は松平加賀守綱紀。殺生石は水戸少将綱吉朝臣。狸々。乱は尾張中納言光友。役せらる。」とある。尾張中納言光友は、金春八左衛門の指南を受け、技芸巧みで、九番の能を伝授されている。その上、大蔵(倉か?)太夫から秘事口伝を受け、「狸々」の小書「乱れ」を見事に舞ったと言われる。(注1「名古屋市史」)

### 尾張藩の能の歴史(三)

辻 宏一

の人々は、汚れた六塵の世に迷わない者はいないと実感し、正面からワキの諸国一見の旅の備へ目を移し、「六根の罪を作る事も、見事聞く事に、迷ふ心なるべし」と、地盤に合わせて語ったところ、光友は、綱吉の心を知って、舞台の奥へ身を退けて、舞い留めた。光友の、その場に適したとっさの気転による演能ぶりに、綱吉は感嘆し、称賛したと伝えられている。

主君光友が能好きであったことから、家臣も又、能の上手が多く、いつ賓客が訪れても、身近かに仕える者達で、役者を召さずとも、能を演じて、供応することができた。

元禄三年八月十八日の、光友大納言昇進祝賀のための初日の能九番のシテ方は「高砂」金春八左衛門、「腹」中条主水、「野々宮」出雲守棟、「鍾鹿」大蔵様、「三井寺」竹腰美濃守、「三輪」内藤頼母、「自然居士」阿部雄殿、「鞍馬天狗」津田市正、「乱」金

も雲系が続いている高安流脇方西村庄兵衛家についてふれておきた。西村庄兵衛は、金剛流脇方高安家の門人で京都出身である。元禄三年江戸で、二代藩主光友、三代藩主綱吉に謁して、脇方として召し抱えられる。当初は切符銀二十枚、扶持五口であったが、後に、切米四十石、扶持江戸五口、尾州三口となる。

元禄四年十一月十三日の、光友任官の祝賀に、高安彦九郎とともに、西村庄兵衛の名前が見える。初日の能の番組は、次のようになっている。

春八左衛門となっている。金春八左衛門以外はすべて家門・家臣によって演ぜられている。いうまでもなく、藩祖義直の時代から召し抱えられている能役者に加えて、光友の治世には、多数の能役者が召し抱えられ、尾張藩の能楽は充実し、江戸の藩邸や名古屋城で盛んに演じられる。貞享四年(一六八七)の「能之訓蒙図彙」によると、尾張藩の能役者として、

は北側に参り、宸殿玉階の下にしておはせごとを奏曲し奉る。このあたりがたきに、かたじけなくのうへまで我が家の風ふき伝ふと云ふにあふとは 敬元

西村家は、現在西村欽也氏が芸系を受継いで、活躍している。

三代目西村庄兵衛は、明和八年四月二七日後桃園天皇即位の祝賀に際して、開口を勤めていた。その時の開口文は、

### 能の会20周年記念 名古屋公演

四月二十七日(土)午後二時始 熱田 神宮 能楽 殿

観世鏡之丞 能 観世 栄夫 通小町 雨夜之伝 後見 泉 嘉夫 大槻 秀夫 後見 泉 嘉夫 大槻 秀夫 後見 泉 嘉夫 大槻 秀夫

入場料 前売指定席(正面)八千円(当日券八千五百円) 前売指定席(脇正面)七千円(当日券七千五百円) 前売自由席 五千円(当日券五千五百円) 前売学生 二千円(当日券三千円) 出演券取所 市内主要ブレイクアクト、チケットぴあ 大規模集客内、電話06-7621-6393

連吟 熊野 加藤サチ子 杉山 優子 高橋喜久子 城キリ 加々見 正 若キリ 高橋喜久子 村キリ 大場はま子 露木サチ子 ヤス 露木サチ子 今尾 正治 石黒 操子 岩田 実 梅 村松 綾 服部喜美子 木島 定子 砧 独吟 山寺 小田切敏子 木 今尾 正治 久米 宏枝 岩田 春江 素羅 鷗小町 師 神谷 功 後藤孝一郎 大野 誠 菊 慈 童 神谷 貞子 後藤孝一郎 鹿取 希世 橋 吉川宇良子 久田 徹二 宮 田中 雅子 御原富司忠 鹿取 希世 放下 僧 星野 泰子 吉田 定男 大野 誠

安宅 飯富 雅介 寛 飯富 雅介 久田 徹一 鹿取 希世 能 刀野村又三郎 太刀持 松田 高義 経 磯部 信義 吉田 定男 大野 誠 象 金井 美春 御原富司忠 大野 誠 仕舞 花 月キリ 安藤 緑郎 乱 久田 徹二 寛 飯富 雅介 鬼頭喜太郎 久田 徹一 鹿取 希世

舞外 狸々 乱 久田 徹二 寛 飯富 雅介 鬼頭喜太郎 舞子 清 象 金井 美春 御原富司忠 大野 誠 舞子 清 象 金井 美春 御原富司忠 大野 誠 舞子 清 象 金井 美春 御原富司忠 大野 誠

### 如月の舞台から

竹尾邦太郎

「通小町」シテ十喜雄、八十三翁という。運ばなど円滑味を欠くが、それが却って小町(克実)に寄せる四位ノ少将の恋着のまどかしさを巧まずに表現して、芸功がきらりと光る。決を取って引き留む。と、背後から小町の袖を取り肩に手を掛ける型の、じわりと圧迫してくるような暗い情念。闇夜を通過、思ひ詰めたムードを、難波運ばに見せる立廻。キリ前へはずはや今日も、と正中で頭取り、直柱見上げて付む逆の感懐、などなどウツテランの滋味だった。なお気になったのは揚幕のこと。ツレが出る時、幕が面にかかって文字通りお先真暗。幕放れの大事、慎重でありたい。(51分)

「舞」シテ童子。トラスのイナジの歌もあるのに何故にマイナス、イメージの歌を口ずさんだ。

「車僧」ワキ車僧、勝久、性奇矯に遠く、むしろ幕情。一方、山伏に斐したシテ太郎坊正直も、喧嘩亮の粗野より神問答する知的な面が勝る。アイ清越天狗、弘之。車僧の心の隙に付け込みはするが、見所の反応も少なく、その場が何となく白々しく、「お笑いやれ車僧」、も空しく聞えた。

後シテは、大徳見物の鈍重な尊大さといったものが感じられず、相手を指伏せんとする荒々しい威迫感が伝わらない嫌いがあつた。へ行較べせんと突っ掛けられたワキが、「いかに汝幼くとも」と受けず、シテ、ワキ問答一部省略して、「おう車を打たば……」と受けるには飛躍があり、省略の必然性があるのか不審。一曲を通じて何が急いでいたのかもシテに影響したであろう。切地謡い終りや問答入れ付祝言というのも、余韻余情を染しむ能にあつては不可解だった。(31分、2月3日、宝生会)

「鶴亀」シテ元昭。悠悠と歩を進める儀容が辺りを払い、尊厳すれば、世河が通ったけれど、今は正籠を期するようになった。それと似たところがある。

能は二月十日観世会。初番鶴亀。観世元昭。鶴と亀は観世芳宏、芳仲阿氏が仲よく、このあと田村を勤める新築元清和氏と三兄弟が来る。この曲当代のみもの。晴れ晴れとして古風ながら新春を祝うにふさわし。清和氏は田村(替装束)を強襲と舞う。悪者を打ち払う姿は威あつて佳。小さくまとまらぬように祈りたい。いよいよ清和(観)、安明(巻)、英照(宝)、永蓮(ひさのり、剛)四氏の観演が楽しみとなる。

付、楽屋で左近氏奥よりしげらく故人の思い出を語る。ふといつもの席に笑う左近氏が座しておられるような幻想にとらわれた。元昭・九郎右衛門阿氏同席。

三月に入つて今年も春の能を迎える。二日名・能楽鑑賞会。三回目的の浅春の能は野宮。近藤乾之助氏。久々。冷えた装束と開けたる位に接する。金剛殿氏の句い、観世鎮之丞氏の重厚としぶきにくら

するトワキ欽也の奏聞から鶴(芳宏)亀(芳仲)が驚を取って舞台に入る。連舞は暢達で爽やか。鶴が袖を被るとき、亀は頭と袖を巻き上げるなど、調和の中の変化も鮮やか。それでは予も、とばかり、へ君も御感のあまりにや、と壇を下りたシテは、へ舞楽を奏して舞ひ給ふ、とサシで大きくヒラキながら進歩すると楽。ゆつたりとした袖振き、重々しく踏む足拍子には威厳と鷹揚があり大夫芸の風格そのもの。楽を舞上げ、キリを舞い続けらるうちに瞬たく目にうつすらと涙が滲んだ。毎春初回は兄左近宗家と勤めてきた超満員の熱田神宮能楽舞臺に、今年からは立派に成長したその遺児達と勤める感懐だろうか。その感懐をふつ切るように、へ君の駒も、と胸強く巻き上げたが、常座に戻って踏む拍子には、亡兄への懐いの文が揺現するよう胸が熱くなった。(49分)

「宝ノ笠」主命で宝鏡への品を求めシテ太郎冠者。祐一。はほんとした空照気が如何にも隔歩み寄って手を繋ぐ態に目付柱へ

さそれうで危うい。一方、口辺に微笑浮かべながらもはしこそうな目配りのスッパ弘之は、この田舎者を籠絡せしむにはおかない。慎重であればあるだけ相手の術中に陥り、よかれと思つてしたことが裏目に出る被害者タイプの太郎冠者の弱気と、それを意に介さない狭量の主。松次郎との絡みもまた可。(30分)

「田村・警装束」シテ清和。亡父左近の後を継ぎ、観世流の大屋台骨を支えてゆかんの氣迫と、溢れんばかりの能への情熱が感じられて嬉しかった。

小町前は面喰。浅黄地帯目梅花文様縞着流に藤色水衣、美しく品のよい姿に漢気がある。名所教えに氣を取られていたシテが、ふと氣付き、「やあ」は満月の大きさに驚き、直柱右を見つめる視線にそれと悟らる。へ春宵一刻値千金のワキ茂子郎との連舞は、風流を解する人同士の間。へげに千金に代へじとは、とワキを誘い、へ今この時かや、と互いに歩み寄って手を繋ぐ態に目付柱へ

出るところなど、ホモセクシヤリテイ気味の親密さである。へ地主権理の花の色も殊なり、と大小前の面遣に佳く、へ天も花に酔へりや、は頭を取らない。

中入は、へ田村堂の、と一ノ松で月ノ願、更に扉を横に押開く型をして三ノ松に行く。且停ると、地(九郎右衛門・完治・邦久ら)の返しの型に半端で入つたのが珍しかった。アイ門前の者は友彦。緊張気味で居語りも少少硬い。

後シテは唐冠・黒頭・面大天神。亀甲片輪車飛雲文様縞黄厚板に白地狩衣の袖を折込み闘斗に着け、正繁雲文様縞半切を穿く。

背に剣を負い、唐扇構えた姿はきらびやかな中に威厳を見せて堂々の風格を漂わす。床几に掛つたクセからキリの型は目覚しく、乗り熱(なら)した馬士の雄姿を彷彿とさせる。就中、へ石山寺を、と微かに教養する辺の余韻緯々。

へ瀬田の長橋、とサシ廻して拍子強強と踏むや、へ駒も足並や、と腰を引き中腰に構えた姿は将に、へ勇むらん、の人馬一体の逸る氣持を鮮やかに見せた。へ程に、頭を取って谷底を覗き山を仰ぎ、へ天に響き地に滴ちて、と再び下を見て、へ万木青山、とサシ廻シ、へ動揺せり、と面切つた姿はキリ迄衰えず、へ一度放せば、と立ち、千の矢先の矢面に立ちはただかのように前に出ると、へ雨散と降りかかつて、と矢先避けるかに面切り動揺など、へげに、と下層平

伏するまで、息も吐かせなかつた。自信に満ちた意欲的な舞台だった。一郎、後見は徳三・芳宏。(1時間16分、2月10日、観世会)

「実盛」シテ一休。枯れた地味な茶系の装束に野性味のある尉の面振りが、後シテの、剛直な、所謂古武士の骨柄を窺わせて雰囲気がある。詞、語共に明晰で筆措に自信があり、一好調。中入の、へ聆かして、で立つて常座へ行く居たたまれぬ氣持や、へ池の辺、と直して、髪髯洗われた処へ二、と直して、髪髯洗われた処へ二、と直して佇立する辺りの感懐など的確な表現力。

後シテは紺地拾法被に萌黄地半切。クリに床几に掛り、篠原合戦に際と消えた有縁語の語りは氣力横溢。「白きこそ不審」は勇み足だがそれを押し切る勢いがあつた。「申しもあへず首を持ち」た。「申しもあへず首を持ち」と立つとトシと右膝着き、開いた扇を平らに首の重味感させせて両手で掛け持つところなど、充実感を見せる。首洗いの場、へ壘は流れ落ちて、と扇で右へ流れる型をしたり、へ皆感涙、と常座でワキ正常見て面遣フのは少々どろいだが、へ首掻き切つて、と左に押さえ込んでぐつと力を籠めて引くのは、合戦で刃割れた刀を握らせ、へ捨ててんげり、と小さく鋭くサツと袖を返したのは、鮮やかに捨て去る所作。この対照がよかった。キリで、へ風に絡めると、正先で背伸びするの象徴的。ワキ勝久、学生時代、伊勢金春時代の二回にわたる金春流の出会い、自ら演ずることになった味い得る能の醍醐味、その体験を叙述、へ細心の注意、研究心、ひたすらさびしい稽古の積み重ね、という能の真髓を知ろうとする、自分史であるが、司法の専門分野をふくめてその情熱が紙背に強く感ぜられる著作である。金春流同門会の能アルバムも多数収録されている。

著者略歴 大正十三年三月八日寺市生れ、昭和二十五年東大法学部卒業、昭和二十七年裁判官となり、名古屋地裁、福井地裁、名古屋高裁判事を歴任、昭和六十一年旭川地裁所長を経て六十一年退官、六十一年六月公証人(岐阜公証役場)となり現在に至る。

自宅 名古屋千種区若水二丁目一〇七

### 紅梅記

能三番、本一

二月下旬雪降る。梅・椿・福寿草の花が雪をかぶってつつまし。空晴れて、西側の屋根から雪がドサツと落ちる。久方振りにさく雪。座敷の雛(ひいな)が寒そうであった。

同日十四日NHK文化セミナー情報報が新作能・無明の井(先月母)で紹介する。十二分位。構成分り難し。心臓を刺された女性(ツレ)が後になって数回アイ語りは抜け、観能の男性が語る。「三途ノ川を渡るとど拒否されるところに感銘」の言は入る。なお当日配布のパンフ(受贈)に載る作詞者多田富雄氏の「作者ノート」(長文)佳。

四月NHK放送予定。

同十六日映画「十戒」を見る。(東海テレビ)。信仰対国家の激突(モーゼ)最近モセーヴ対フツツオ(乳香と没薬豊かなカナン)の地に入らず終るモーゼの一生を画

「車僧」ワキ車僧、勝久、性奇矯に遠く、むしろ幕情。一方、山伏に斐したシテ太郎坊正直も、喧嘩亮の粗野より神問答する知的な面が勝る。アイ清越天狗、弘之。車僧の心の隙に付け込みはするが、見所の反応も少なく、その場が何となく白々しく、「お笑いやれ車僧」、も空しく聞えた。

後シテは、大徳見物の鈍重な尊大さといったものが感じられず、相手を指伏せんとする荒々しい威迫感が伝わらない嫌いがあつた。へ行較べせんと突っ掛けられたワキが、「いかに汝幼くとも」と受けず、シテ、ワキ問答一部省略して、「おう車を打たば……」と受けるには飛躍があり、省略の必然性があるのか不審。一曲を通じて何が急いでいたのかもシテに影響したであろう。切地謡い終りや問答入れ付祝言というのも、余韻余情を染しむ能にあつては不可解だった。(31分、2月3日、宝生会)

「鶴亀」シテ元昭。悠悠と歩を進める儀容が辺りを払い、尊厳すれば、世河が通ったけれど、今は正籠を期するようになった。それと似たところがある。

能は二月十日観世会。初番鶴亀。観世元昭。鶴と亀は観世芳宏、芳仲阿氏が仲よく、このあと田村を勤める新築元清和氏と三兄弟が来る。この曲当代のみもの。晴れ晴れとして古風ながら新春を祝うにふさわし。清和氏は田村(替装束)を強襲と舞う。悪者を打ち払う姿は威あつて佳。小さくまとまらぬように祈りたい。いよいよ清和(観)、安明(巻)、英照(宝)、永蓮(ひさのり、剛)四氏の観演が楽しみとなる。

付、楽屋で左近氏奥よりしげらく故人の思い出を語る。ふといつもの席に笑う左近氏が座しておられるような幻想にとらわれた。元昭・九郎右衛門阿氏同席。

三月に入つて今年も春の能を迎える。二日名・能楽鑑賞会。三回目的の浅春の能は野宮。近藤乾之助氏。久々。冷えた装束と開けたる位に接する。金剛殿氏の句い、観世鎮之丞氏の重厚としぶきにくら

するトワキ欽也の奏聞から鶴(芳宏)亀(芳仲)が驚を取って舞台に入る。連舞は暢達で爽やか。鶴が袖を被るとき、亀は頭と袖を巻き上げるなど、調和の中の変化も鮮やか。それでは予も、とばかり、へ君も御感のあまりにや、と壇を下りたシテは、へ舞楽を奏して舞ひ給ふ、とサシで大きくヒラキながら進歩すると楽。ゆつたりとした袖振き、重々しく踏む足拍子には威厳と鷹揚があり大夫芸の風格そのもの。楽を舞上げ、キリを舞い続けらるうちに瞬たく目にうつすらと涙が滲んだ。毎春初回は兄左近宗家と勤めてきた超満員の熱田神宮能楽舞臺に、今年からは立派に成長したその遺児達と勤める感懐だろうか。その感懐をふつ切るように、へ君の駒も、と胸強く巻き上げたが、常座に戻って踏む拍子には、亡兄への懐いの文が揺現するよう胸が熱くなった。(49分)

「宝ノ笠」主命で宝鏡への品を求めシテ太郎冠者。祐一。はほんとした空照気が如何にも隔歩み寄って手を繋ぐ態に目付柱へ

さそれうで危うい。一方、口辺に微笑浮かべながらもはしこそうな目配りのスッパ弘之は、この田舎者を籠絡せしむにはおかない。慎重であればあるだけ相手の術中に陥り、よかれと思つてしたことが裏目に出る被害者タイプの太郎冠者の弱気と、それを意に介さない狭量の主。松次郎との絡みもまた可。(30分)

「田村・警装束」シテ清和。亡父左近の後を継ぎ、観世流の大屋台骨を支えてゆかんの氣迫と、溢れんばかりの能への情熱が感じられて嬉しかった。

小町前は面喰。浅黄地帯目梅花文様縞着流に藤色水衣、美しく品のよい姿に漢気がある。名所教えに氣を取られていたシテが、ふと氣付き、「やあ」は満月の大きさに驚き、直柱右を見つめる視線にそれと悟らる。へ春宵一刻値千金のワキ茂子郎との連舞は、風流を解する人同士の間。へげに千金に代へじとは、とワキを誘い、へ今この時かや、と互いに歩み寄って手を繋ぐ態に目付柱へ

出るところなど、ホモセクシヤリテイ気味の親密さである。へ地主権理の花の色も殊なり、と大小前の面遣に佳く、へ天も花に酔へりや、は頭を取らない。

中入は、へ田村堂の、と一ノ松で月ノ願、更に扉を横に押開く型をして三ノ松に行く。且停ると、地(九郎右衛門・完治・邦久ら)の返しの型に半端で入つたのが珍しかった。アイ門前の者は友彦。緊張気味で居語りも少少硬い。

後シテは唐冠・黒頭・面大天神。亀甲片輪車飛雲文様縞黄厚板に白地狩衣の袖を折込み闘斗に着け、正繁雲文様縞半切を穿く。

背に剣を負い、唐扇構えた姿はきらびやかな中に威厳を見せて堂々の風格を漂わす。床几に掛つたクセからキリの型は目覚しく、乗り熱(なら)した馬士の雄姿を彷彿とさせる。就中、へ石山寺を、と微かに教養する辺の余韻緯々。

へ瀬田の長橋、とサシ廻して拍子強強と踏むや、へ駒も足並や、と腰を引き中腰に構えた姿は将に、へ勇むらん、の人馬一体の逸る氣持を鮮やかに見せた。へ程に、頭を取って谷底を覗き山を仰ぎ、へ天に響き地に滴ちて、と再び下を見て、へ万木青山、とサシ廻シ、へ動揺せり、と面切つた姿はキリ迄衰えず、へ一度放せば、と立ち、千の矢先の矢面に立ちはただかのように前に出ると、へ雨散と降りかかつて、と矢先避けるかに面切り動揺など、へげに、と下層平

伏するまで、息も吐かせなかつた。自信に満ちた意欲的な舞台だった。一郎、後見は徳三・芳宏。(1時間16分、2月10日、観世会)

「実盛」シテ一休。枯れた地味な茶系の装束に野性味のある尉の面振りが、後シテの、剛直な、所謂古武士の骨柄を窺わせて雰囲気がある。詞、語共に明晰で筆措に自信があり、一好調。中入の、へ聆かして、で立つて常座へ行く居たたまれぬ氣持や、へ池の辺、と直して、髪髯洗われた処へ二、と直して、髪髯洗われた処へ二、と直して佇立する辺りの感懐など的確な表現力。

後シテは紺地拾法被に萌黄地半切。クリに床几に掛り、篠原合戦に際と消えた有縁語の語りは氣力横溢。「白きこそ不審」は勇み足だがそれを押し切る勢いがあつた。「申しもあへず首を持ち」た。「申しもあへず首を持ち」と立つとトシと右膝着き、開いた扇を平らに首の重味感させせて両手で掛け持つところなど、充実感を見せる。首洗いの場、へ壘は流れ落ちて、と扇で右へ流れる型をしたり、へ皆感涙、と常座でワキ正常見て面遣フのは少々どろいだが、へ首掻き切つて、と左に押さえ込んでぐつと力を籠めて引くのは、合戦で刃割れた刀を握らせ、へ捨ててんげり、と小さく鋭くサツと袖を返したのは、鮮やかに捨て去る所作。この対照がよかった。キリで、へ風に絡めると、正先で背伸びするの象徴的。ワキ勝久、学生時代、伊勢金春時代の二回にわたる金春流の出会い、自ら演ずることになった味い得る能の醍醐味、その体験を叙述、へ細心の注意、研究心、ひたすらさびしい稽古の積み重ね、という能の真髓を知ろうとする、自分史であるが、司法の専門分野をふくめてその情熱が紙背に強く感ぜられる著作である。金春流同門会の能アルバムも多数収録されている。

著者略歴 大正十三年三月八日寺市生れ、昭和二十五年東大法学部卒業、昭和二十七年裁判官となり、名古屋地裁、福井地裁、名古屋高裁判事を歴任、昭和六十一年旭川地裁所長を経て六十一年退官、六十一年六月公証人(岐阜公証役場)となり現在に至る。

自宅 名古屋千種区若水二丁目一〇七

### 出版紹介

松本 武氏 著

「ザインとソレン」

名古屋金春会の松本武氏は、昭和二十七年から約三十四年間裁判官としてつとめ、六十二年退官されたが、民事裁判官として歩んだ道を自著「ザインとソレン」にある戦中派裁判官の軌跡としてこのほど出版した。

著者は民事裁判、回想記、印象記とともに、第二篇には「金春流能楽修業」として六十頁にわたる「型より入つて型より出るといふこと」。「金春流との出会い」「ザインとソレン」の「養老」演能記、「安宅」と「勧進帳」演能記、「家康と金春座・観世座」演能記、村平史朗先生を偲ぶの各章で、

### 住所移転

橋岡 久馬氏

観世流・橋岡久馬氏は、橋岡会舞台を能楽堂に建直すことになり、このほど千葉市に移転した。なお能楽堂建設には、二、三年の年月を要することである。

(新住所) 千葉市大椎(おほし)町あすみが丘三丁目一六六番二号  
電話〇四七二(九四)九九五三  
FAX〇四七二(九四)九九五三

流剛流 金剛流 世宗本 流元 榎書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1 電話03(3291)2488-9 振替東京3-3552

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7 9 8 4

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円 郵送の場合 1年1500円 一 部 90円

名古屋城に能楽堂を

4月から請願署名運動

能楽協会名古屋支部 10万人目標に展開

能楽愛好家の会

名古屋城地区に能楽堂の建設を... 平成二年一月、年頭記者会見で西尾名古屋市長が「名古屋城地区に能楽堂の建設を検討したい」と発表、日刊紙も報道した。能楽協会名古屋支部では、これに対応して直ちに陳情書を提出、公立の能楽堂建設の要望を表明した。

多様な芸術分野が新しい創造を... 署名運動の進展は、このたびの請願署名運動を成功させることとなり、各社代表の方にお集まり願います。署名運動は四月十日から十日間で、各社代表の方にお集まり願います。署名運動は四月十日から十日間で、各社代表の方にお集まり願います。

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

Calendar listing dates from April to August with event names like '邦会', '能の会', '久田正会', etc., and their locations.

市立能楽堂建設請願

署名運動のお願い (要旨)

平素は能楽の振興にご後援、ご鞭撻を賜わり御礼申し上げます。この大事業をなすか成し遂げらるべく、関係者一同頑張り所存でございますが、能楽の熱心な愛好家の皆様にも署名収集に格別のご協力をお願いいたしてお願ひ申し上げます。

演能案内

幸友会春の会

四月二十九日(みどりの日) 午前10時始 熱田神宮能楽殿

異大会

五月五日(祝) 午前九時半始 熱田神宮能楽殿

Table listing names of performers and their roles for the '異大会' and '幸友会春の会' events.

Large table listing names of performers and their roles for various events, including '能班', '能蟬', '能夜鳥', and '附祝言'.

方電話〇五六三一九一四八七

# 五月雅日記

(116)

## バルカンの花

えと文 二井栄逸

もう一カ月もすればリラの花が、爽やかにそよぐ頃となる。ライラックの花のことに、仏語ではリラという。

冷涼な乾燥地を好む花木で、北海道では良く育ち、札幌では市の木にリラを指定している。

萬葉の花のように楚楚とした風情はないけれど、青紫色の陰影をちらつかせながら高原にそよぐ姿は素晴らしい。

リラの花は、はるかヨーロッパのバルカン半島からクリミア半島にかけて群生していた。



涼しいことは、謡曲にもいえる。或る程度の密度のある声。淡く、爽やかな発声。リズム、絶妙の節拍。気合い等がコントローラされた謡をきくと感動する。そしてその感動は、月日が経つてもあせることなく、いきいきとよみがえってくるものである。(平成三・四・五記)

## 幸謡会春の会

五月十一日(土)午後一時始  
岡崎城二の丸能楽堂

番組		五月十一日(土)午後一時始	
舞臺子 養	老 福葉 和	河村真之介	池田 希世
草子洗小町	小野 喜子	福井啓次郎	池田 希世
源氏供養	上田 千代	河村真之介	池田 希世
仕舞班	女クセ 宵木 朋子	福井啓次郎	池田 希世
鞍馬天狗	太田 静江	河村真之介	池田 希世
笹之段	川越 糸子	河村真之介	池田 希世
葵	上 中根 麗子	河村真之介	池田 希世
連吟賢	茂 杉浦 ゆき	河村真之介	池田 希世
舞臺子 蟬	丸 竹本百合子	河村真之介	池田 希世
山 姥	田中 米子	河村真之介	池田 希世
花 月	石川 晴子	河村真之介	池田 希世

〔御来場歓迎〕		五月十一日(土)午後一時始	
舞臺子 道明	寺 小島 照子	河村真之介	池田 希世
半 道明	萩 村井 邦子	河村真之介	池田 希世
仕舞鶴	天 鼓 龜 林 貞明	河村真之介	池田 希世
連吟阿	清 砂 小森 辰雄	河村真之介	池田 希世
祝言仕舞嵐	祝言 幸江	河村真之介	池田 希世
舞臺子 弱法師	川 河 泰子	河村真之介	池田 希世
船弁慶	磯 磯貝 勝子	河村真之介	池田 希世
主催 幸	近 藤 幸 江	河村真之介	池田 希世

## 梅田邦久師還暦祝賀

五月六日(休)十時半始

熱田 神宮 能楽 殿

素謡通小町		素謡三輪	
連吟竹生島	殺生石 加藤千代子	連吟阿	丸 杉浦 ゆき
獨吟花	小 小林 俊雄	仕舞紅葉	篠 篠原 國男
舞臺子 道明	寺 小島 照子	連吟鶴	龍 加藤 五郎
半 道明	萩 村井 邦子	舞臺子 輪	後 後藤 幸子
仕舞鶴	天 鼓 龜 林 貞明	連吟三	後 後藤 幸子
連吟阿	清 砂 小森 辰雄	舞臺子 輪	後 後藤 幸子
祝言仕舞嵐	祝言 幸江	舞臺子 輪	後 後藤 幸子
舞臺子 弱法師	川 河 泰子	舞臺子 輪	後 後藤 幸子
船弁慶	磯 磯貝 勝子	舞臺子 輪	後 後藤 幸子
主催 幸	近 藤 幸 江	舞臺子 輪	後 後藤 幸子

〔御来場歓迎〕		五月十一日(土)午後一時始	
舞臺子 道明	寺 小島 照子	河村真之介	池田 希世
半 道明	萩 村井 邦子	河村真之介	池田 希世
仕舞鶴	天 鼓 龜 林 貞明	河村真之介	池田 希世
連吟阿	清 砂 小森 辰雄	河村真之介	池田 希世
祝言仕舞嵐	祝言 幸江	河村真之介	池田 希世
舞臺子 弱法師	川 河 泰子	河村真之介	池田 希世
船弁慶	磯 磯貝 勝子	河村真之介	池田 希世
主催 幸	近 藤 幸 江	河村真之介	池田 希世

能楽堂の建設に就いて

松野 奏風

名古屋では、伝統文化を伝える拠点として、市立の能楽堂建設の要望が高まり、その実現をめざす諸願の署名運動がくりひろげられようとしている。国際都市・名古屋にふさわしい文化創造の場として、能楽堂は単に能楽界だけの課題ではなく、幅広い市民の、共有財産としての文化の象徴である。

東京舞台堂の損失は、昭和二十二年早春、梅若氏や鉄之丞氏所有を始とし、五月末、華族会館、観世会、喜多会、万三郎氏、喜之氏、赤坂の各舞台炎上を最後として、帝都に二十余を数へた能楽堂は概ね罹災し、東京能界もその灰燼と共に地に委して、焦土再び此の芸術を甦え起たせることも無きかに見えた。

易ではあるまい。そして、足の便宜の如きのみを考へて、街頭に近く、常に舞台演奏中に、堂外の電車その他雑音の聞ゆる如きことあらば第一の大失敗である。試に想定する、たとへば暫く松並木を歩して翠緑に囲まれた、簡潔清楚にして社殿然たる舞殿に到るとする。正に、能の本質味得の第一歩であり、また楽師自身が、心から斯道に身を委み精進を照らして出入する所以ともなる。

第三回たまたま会 能楽と三曲のつどい
五月十二日(日)午前十時開演
熱田神宮能楽殿
曲目: 加茂、竹生、胡蝶、鞍馬天狗、三曲演奏(略)

名古屋観世九臈会定例能
五月十八日(土)午後一時始
熱田神宮能楽殿
曲目: 水無月、兼平、兼手、兼占、兼守、兼歌、兼野、兼野、兼野、兼野

野村又三郎古稀祝賀記念 第34回狂言 やるまい会公演
五月十九日(日)午後一時開演
熱田神宮能楽殿

# 名古屋観舞会大会

五月二十六日(日) 十時始

熱田 神宮 能楽殿

正 河村 信重  
副 山本 章博

## 舞臺子

小 督 杉野 伸江 吉田 定男  
替之形 柳原富司忠 鹿取 希世

## 西王

母 滝川 一司 吉田 定男  
御原富司忠 鹿取 希世

## 仕舞

花 盛 佐藤 正次  
田代 博

## 舞臺子

天 鼓 伊藤 秀子 柳原富司忠 鹿取 希世  
養 老 駒形賢洋子 吉田 定男  
舞五段 後藤孝一郎 鹿取 希世

## 班

若 山中 節子 柳原富司忠 鹿取 希世  
女 青柳イツエ 吉田 定男  
象 太田 和子 柳原富司忠 鹿取 希世

## 羽

衣 伊藤 一枝 後藤孝一郎 鹿取 希世  
和合之舞 鹿取 希世

## 能

山本 博通  
野 西村 敏也 寛 敏一  
村雨留 飯富 雅介 後藤孝一郎  
上瀧野の心子 藤田六郎兵衛

## 仕舞

西行 桜 上瀧野の心子

## 能

山本 博通  
野 西村 敏也 寛 敏一  
村雨留 飯富 雅介 後藤孝一郎  
上瀧野の心子 藤田六郎兵衛

### 平成3年4月・5月放送予定

FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

〔4月〕	21日(日)	金 春 流「忠 度」	桜間 辰之助
	28日(日)	観 世 流「姑 姑」	奥 善 助
〔5月〕	5日(日)	観 世 流「振 待」	梅友 枝喜三郎
	12日(日)	観 世 流「小 原 御」	若 友 井元三
	21日(日)	宝 生 流「船 橋」	金 杉 浦
	28日(日)	観 世 流「歌 占」	杉 浦 元三
〔教育テレビ(午前9時~10時)〕	4月29日(祝)	新作能「無明の井」	観世流~ 多田宮雄作、橋岡久馬作曲・作舞
	5月3日(祝)	能「八 島」	喜多流~栗谷菊生
	4日(休)	狂言「釣 狐」	和泉流~和泉元弥
	6日(休)	能「腹 鼓」	和泉流~和泉元秀
	6日(休)	能「積 風」(再)	宝生流~宝生英雄

(放送予定につき変更の節はご理解下さい)

## 仕舞五之段

通 小町 豊住 雅子 河村総一郎 鹿取 希世

唐 船 鈴村 とも 河村総一郎 鹿取 希世

野 宮 中川 芳子 吉田 定男 藤田六郎兵衛

独吟 戸 山崎 栄治

舞臺子 融 水野たづ子 河村総一郎 鹿取 希世

弱 法 師 川久保彰礼 河村総一郎 鹿取 希世

野 守 川口志満子 後藤孝一郎 鹿取 希世

仕舞 雨 月 川瀬とよ子

卒都婆 小町 吉田 琴子

舞臺子 紅 葉 狩 伊藤健一郎 河村総一郎 鹿取 希世

歌 占 足立奈々子 河村総一郎 鹿取 希世

船 舟 慶 芥 栄雄 河村総一郎 鹿取 希世

番外 自然居士 山本 真賀

舞臺子 女 郎 花 山本 勝一 河村総一郎 鹿取 希世

附 祝 言 山本 真賀

〔御来場歓迎〕 指導 山本 勝一

### 弥生の舞台から

### 「三交会」「梅猶会」

竹尾 邦太郎

「純太郎」シテ又三郎。古稀を迎えるというが若々しい舞台は後場で紺地縫箔の年増の姿・高儀と、赤地縫箔の若い姿・権行の二人を手玉にとるところなど、お見事と言ふ外はない。就中、妻妾に手車を組ませ、後ろに廻って、これは誰が手車、と片足浮キで唯すとき、妾には猫撫で声で唯して背中をさする仕草をし、妾には苦々し気に唯して打掃する仕草が露骨なだけに、この御時世ではむしろもう少し枯れていた方がこのき

さや、へ来り給ふは仰りあり、とワキにアシラウところなど、自ずからの気品を示し、節木増の面がシテのたまたまに更に陰翳を与える。床几のクセは思い入れたっぷりの地(萌・暗啓・陸三)にシテの気持が深く沈滞してゆく趣で、両足組指付けた姿が慎ましい。へ浮草の、と立ち、へ心の水に誘われて、二足出ると、へ行方へも、と左下を眺め、へ鈴鹿川、と数歩出て面遣フところ、心持のある型の一々に楚々とした情態があった。中人は、へ秋の風、と立つと、へ森の、とクモリ一足引き、へ夕月夜、とひたと正面見ると、へ影少し出る、と、間に鳥居の所在確めるかに、へ黒木の、と面遣フ。間に包まれた宮屋の奥に消えるシテの鬱気な風情を運ぶの繊細に見せて出色。段段斗目・長袴・小サ刀のアイ又三郎の居語りも端正。後シテは紫長絹(花車・桜菊折枝)・排大口。車争ひ、へ人々轢に取りつきつと、と両袖返して重ねると、押しやられる態に、へ力も無き、とたらたら退つてシタルところ、身の程を思い知らされた無念と登輪が憫々と伝わる。更に、へ身はなほ牛の、と左手を上げて小さく廻るとき、露が扇に引つ掛かり、何がなし妄執取り憑く按配で思わぬ効果を見た。序ノ舞の清閑は、常座で右袖被キ面遣とするところに飽を見せ、舞上げて懐旧の想いは庭の竹まいに属高くカザシて虫の音を聴き、破ノ舞のつかつかと小刻みな運びがシテの昂りを伝えて巧みだった。キリは、へ内外の鳥居に、左手握まり、へ出で入る姿は、と左足板に着か

ばかりにぐつと入れて引き、トメは扇逆に取つて両袖返シテて拍子踏んだ。一曲を通じ観るがごとし情態が上々で、地も素晴らしい。舞臺子は六郎兵衛・源次郎・大で力儀。後見は孝正。なお、館と狂言各一番の所謂鑑賞会形式では出来るだけ季節感ある曲目の選定が望ましい。(1時間59分)

「三交会」シテ三津子。童子・黒頭・襟白赤。真紅の縫箔に萌黄水衣の対照鮮やかに可憐な花守。己が仕える地主権現の花を賞讃し

て止まない一セイ以下の確りした謡と、清水寺の立派な浴衣を聞かせたてたまらなかつたといつた語りの意気込みがよい。名所教えからワキ(雅介)を誘うところも天眞爛漫な無邪氣さが微笑ましい。落花を受けた返は少々ちよこまかしすぎた。

後シテは面平太。舞臺を大きく廻るときは極端に恐れない大胆さは、床几のクセにも遺憾なく発揮され、面遣ヒや拍子踏むときに向う意気の強さをみせて煙爽の馬上である。カケリを挟み前後獅子奮迅の活躍は目覚しく、へもとより観音の、と目付柱へきと出るスピードや、へ千の御手毎に、と目付柱へふつからんばかりの勢いには驚いた。蓋し気風のよい現代的解釈の舞臺ではあつたが、後シテには軽快味よりむしろ重厚味が求められようし、枝の器用さだけが望ましい。なお、へ弥生半ば、のワキの道行が省略されたが、将にグッドタイミングの催能だっただけに不審。地は慈観・善助・敬二らで好バックアップ。(1時間10分・3月10日・三交会)

「芭」シテ兎一。面は眉薄く鉄漿をつけたような寂し気な増。陽が山の端に沈み、入相の鐘が浦の波に響くのを聞いて居立ち、ゆつくりと立つところに、素直とした心の裡を涙の湖に映すかのムードの中人が地(萌・生香・和男)と相俟って惹きつける。

後シテは模倣大口に唐織重折。無造作にすたすたと常座に出て先ず長刀一振りした。その後の長刀捌きもそう思ったがやや生硬。しかし床几に掛った馬上の型は躍動感が素晴らしい。就中、深田に落ちて拍子踏むところや、へ手綱に絡んで、と手綱引き絞って立ち、鞭打つ態に焦燥の気持で拍子踏むところ、そして、へ前後を忘れて、と茫然と面遣ヒするところ、などなど爽に面白かつた。(1時間16分)

「舞野」シテ大名・祐一。禁猟区へ雁を射ちに行くのも無法なら、途中でアド通行人・弘之を供に強要するの無体。しかし、無理が罷り通るのも所詮は無能を曝け出すだけ。弓矢が相手に渡って

逆に脅され、身ぐるみ刺がされての「南無三宝しなたり」のトメは、祐一の人柄から些か哀れだつた。(21分)

「葛城・大和舞」シテ惠美子。面深井・襟白浅黄・白褶箔・紺地秋草文様縫箔履巻、小書で白練重折・魚袋。へ折から雪も、と右に見廻すと、背中寒さを感じてふと戸外を眺めやる様子巧く出で、薪を焚く場が一入温かかった。中人は雪綿を頂いた白地引廻の山の中。付き気味に作物に廻り込むとフツと消えたのも良かった。後シテは作物の中で詠い出し、へ法味に引かれて、と引廻が下るされ、へ来りたり、よくよく勤めおはしませ、とワキに對面し、萬の天冠に増。頬に薄紅を刷いたような面は凛とした気品があり、排大口に浅黄舞衣を重折に着る。麗に松葉・楓・桜折枝・銀杏などを散らした舞衣の文様が少々煩い。白の方がすっきりと神々しい感じがすると思うが、萬萬の遺ひ纏はるる小忌衣(白麻ニ山藍ニ花・鳥・蝶ナドノ模様ヲ摺リツケ、肩ニ赤紐ヲ垂レカケ、冠ニ日蔭莖ヲツクルナリ。大海海)に似たのだから。序ノ舞は神樂になり幣付舞で舞う。装束のせいでも鄙びた趣。キリは、へ天の香具山も、とスミで面テラン、面遣フところ、正中で、へ面はゆるやかに、と左袖で面隠すところなど心持がよく出ている。へあさまにもなりぬべし、と一ノ松に抜け、へ明けぬ前にと、と遠く上を見て、返シに三鼓(富司忠・定男・竜夫)の流シで幕に入り、ワキ勝久が合掌して留めた。(1時間14分)

「天鼓・弄鼓」シテ盛盛。ワキ勅使。雅介は立烏帽子・白大口・袴袴の唐物には珍らしい装束付なら、前シテも水衣に非ず単法被で白垂唐帽子姿。ワキの名宣から直ぐ呼出しになる単刀直入で、シテの愁嘆を省略したふん有無を言わせぬ印象の演出で、クセを抜き、急いで鼓を打つての性急である。この問答での慎重な受諾の決意と、一転、夢内後の地との掛合に見せる諦観に盛盛充実ぶりを示して好調。へ君も哀れと思し召して、で握力が萎えて袋取り落し、へ龍顔に御涙を、と、たらたらと退つ

割烹・小料理 城

●熱田神宮能楽殿喫茶部  
●住吉小路(中区栄3-10)  
電話 241-0248



名古屋城に  
能楽堂を!

# 能楽の友

発行 能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年 1000円

郵送の場合 1年 1500円

部 90円

## 演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- [5月]
  - 19日(日) 狂言やるまい会 (有料)
  - 26日(日) 名古屋観音会大会 (来場歓迎)
- [6月]
  - 2日(日) 大槻清韻会能楽 (有料) (番組①面)
  - 5日(水) 熱田祭奉納能楽 (来場歓迎) (番組②面)
  - 9日(日) 名古屋観音会定式能楽 (有料) (番組③面)
  - 15日(土) 叶石会・一韻会 (来場歓迎) (番組④面)
  - 16日(日) 名古屋宝生会定式能楽 (有料) (番組⑤面)
  - 23日(日) 狂言也留し舞会 (来場歓迎) (番組⑥面)
  - 29日(土) 能を楽しむ会 (有料)
  - 30日(日) 名古屋金春 (有料)
- [7月]
  - 7日(日) 九曲会定期能楽 (有料)
  - 12日(金) ゆか生能楽 (来場歓迎)
  - 13日(土) 朝日狂言会 (有料)
  - 14日(日) 観世楽会 (有料)
  - 21日(日) 観世楽会 (有料)
- [8月]
  - 3日(土) 名古屋新能楽 (神楽殿前)
  - 4日(日) 青陽園宝生会大会 (来場歓迎)
  - 11日(日) 青陽園宝生会大会 (来場歓迎)
  - 18日(土) 青陽園宝生会大会 (来場歓迎)
  - 24日(土) 衣斐正宜後援会 (有料)
- [9月]
  - 1日(日) 大長生会記念能楽 (有料)
  - 7日(土) 観世定式能楽 (有料)
  - 8日(日) 観世定式能楽 (有料)

(演能変更の際はご了解下さい)

## 熱田祭奉納能

### 6月5日 熱田能楽殿

能は観世流能「竹生島」宝生流能「三輪」狂言「柿山伏」ほか一調、仕舞などシテ方五流、狂言和泉流出演。入場無料 (番組②面掲載)

文化財保護審議会はこのほど重要無形文化財保持者(人間国宝)に宝生流シテ方・松本恵雄氏を認定するよう文部大臣に答申した。松本恵雄氏は大正四年十月七日、宝生流シテ方松本長二の二男として東京に生まれる。昭和九年宝生九郎重英に入門、野口兼資、近藤三三に師事、十一年初舞台、四十年重要無形文化財総合指定、四十二年重要無形文化財指定、五十七年第四回観世奉納記念法政大学能楽賞、同年芸術大賞受賞、六十二年

財団法人観世文庫設立  
芸術・文化高揚に寄与

昨年八月に急逝された観世流二十五世宗家観世左近の遺志にもとづいて設立準備が進められていた「財団法人観世文庫」がこのほど文部大臣から設立を許可され、二月二十二日に正式発足した。観世文庫は、観世宗家伝来の能楽資料の保存、活用をはかり、日本の代表的な古典芸術である能楽

の一般の普及、発展や学術的研究の進展に寄与して、観世流だけでなく、能楽社会全般に貢献することとがこの法人設立の目的である。そのために、観世宗家所蔵の能楽資料のうち、能楽研究に有用な書籍、文書はほとんどや、伝来の面装束類が観世宗家から財団に寄贈、運営資金は賛同の方によって充足され、公益法人にふさわしい適切な運営のもとに芸術・文化の

## 人間国宝に

### 宝生流 松本恵雄氏

年五十五歳双光旭日章受章。なお能楽界の人間国宝は、川崎九洲、喜多六平太、幸祥光、善竹弥五郎、松本謙三、近藤三三、野村万蔵、亀井俊雄、柿本豊次、安福春雄、松岡道雄、幸宜佳、茂山千作、豊嶋弥左衛門、高橋進、三宅藤九郎、宝生弥一、森茂好(以上故人)と後藤三三、藤田大五郎、鶴沢寿、瀬尾乃武、茂山千五郎、今回の松本恵雄氏の六氏である。

## 財団観世文庫 設立趣意書

高揚に寄与する。住所は東京都渋谷区恵比寿南一丁目一四。財団法人観世文庫の役員は次のとおり。(敬称略)

(理事長) 観世清和(常務理事) 観世芳宏、観世芳伸、安章(理事) 大丸直、観世元昭、小西甚一、小山五郎、近藤道生、清水要之助、堤清二、松岡太郎(監事) 楠谷昭男、中瀬宏通。

維新後は当主が能楽シテ方観世流の家元となってきた観世宗家には六百年の能楽の歴史を象徴する旧家だけに、能界の宝、日本の宝と云える貴重な能楽関係資料が多数所蔵されています。世阿弥自筆の能本・能楽論書を初めとする歴大な書籍・文書、指定の重要文化財も含まれる多数の能面、將軍からの拝領品を含む新旧の能装束等がそれです。観世家の歴代が蓄積してきたこれら貴重・貴重な能楽資料は、観世流のためにもより能界全体、また日本のためにも、絶対に散佚させてはならない貴重品であり、末代まで伝えて活用をはかるのが観世宗家の責務でありましょう。

先代二十五世観世左近は、そうした見地から、財団法人を設立して従来の能楽資料を安全に後世に伝え、それを能楽の発展や研究の進展に役立てると共に、観世宗家の活動を組織的な財団法人の運営の活動に展開し、日本の芸術・文化の高揚に寄与する所存です。先代の遺志と観世流の総意に基づいて「財団法人観世文庫」に対し、関係各位の絶大な御支援をお願いいたします。

## 20周年記念 鎌倉能舞台

財団法人鎌倉能舞台はことし二十周年を迎え、これを記念して五月三日、同舞台で新作能「大塔宮」が上演された。この記念能について、観世流シテ方・中森三三氏は「鎌倉能舞台二十周年に当り、NHK大河ドラマ「太平記」に合わせ、三十年前に作りながら不燃焼に終わった「大塔宮」の再演をとお話をいただき、原作者菅本正樹氏と観世宗家の快諾をいただき新作上演の運びになった」とおっしゃっている。

## 財団法人 観世文庫

記念公演には、神奈川県、NHK、KCTV、江の島電鉄、京福電鉄が後援。中森三三氏は昭和四十年映画「能」で芸術祭奨励賞受賞、四十八年鎌倉新能・鎌倉能舞台創設で鎌倉市政功労者。鎌倉能舞台二十周年記念の番組は次のとおり。

狂言「宗論」浄土僧・山本東次郎、法華僧・山本則直、宿の主・山本則俊

能「大塔宮」大塔宮・中森三三、南の方・鈴木啓吾、淵部義博、中森貫太、僧・鈴木啓吾

笛・寺井久八郎、小鼓・宮増新一郎、大鼓・安福光雄、太鼓・観世元則

## 演能案内

### 清韻会能

六月二日(日) 十二時半始  
熱田神宮能楽殿

能組  
正クセ 福生 芳雄  
今村 嘉男  
加藤 春枝  
桑野 禎剛  
赤松 正人

大鼓 今村 嘉男  
加藤 春枝  
山本 正人

近藤 幸江  
飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

飯富 雅介  
杉江 元  
後藤 孝一郎  
野村 三郎  
野村 三郎  
野村 三郎

要員券 五千元

主催 大槻清韻会

# 五月雅日記

(117)

## 葵 祭

えと文 二井栄逸

五月は新鮮な新茶の香りが薫り出し。新茶は走り茶ともいってみんなが珍重する。

五月十五日には、京都の葵祭が行われる。上鴨神社(賀茂別雷神社)と、下鴨神社(賀茂御祖神社)の祭りを一挙葵祭という。

葵祭の意味は、当日、祭員の挿頭花(かざし)に葵を用い、家々の軒にも葵をかけるしきたりから生れた名称である。

葵を用いる理由は、祭神の別雷神(わけいかづち)の生れ給うた御形山(みあれやま)に二葉の葵が生じたという由来によるもので、雷、地震の厄除けになるという。

雅びやかな牛車(ぎしや)を中心に、行列には、勅使以下、平

安朝の文武官や、下人の装束をつけた者が参加する。御所を出て、まず、下鴨神社へ渡り、ここで神事をすませ、賀茂堤を通って、上賀茂神社にゆく。この絢爛たる王朝風俗絵巻は群をなして美しい。

行列の主役は帝王代である。昔は天皇の皇女が帝王であったが、現在では市民のなかから選ばれ

昔は物見車も参加したようだ。物見車といえは、紫式部の書いた源氏物語が思い出される。

賀茂の祭の車争い、主(ぬし)は誰とも白濁の、所狭きまで立て並ぶる、物見車(ものみ



ぐるま)の横々に殊に時めく葵の上の、御車とて人を払い立ち騒ぎたる其中に……

と、光源氏の正妻葵上と、一時は源氏の君との仲を公然の秘密として、その愛を得ていた六条御息所とが、賀茂の祭の御祭の供奉の行列(光源氏も参加)を一目見ようと、葵上の方は、今を時めく光源氏の正妻として華やかな物見車

## 長良河原新能

6月1日 能「賀茂」狂言「舟ふな」

きたる六月一日(土)伊勢大橋の下流の桑名市の河原で「長良河原新能」が開催される。

主催は河原で能を観る会、後援NHK津放送局。今回の企画の趣旨について主催者側は「川と河原が歴史の中でもっていた様々な文化的な意味合いを思いかえし、そのような視点から現代の私たちが長良川とのかかわりをもつめかえず契機とした」と語っており、能の創成期のように本舞台の直後に橋がかりをつけ、広々とした場所を得て、御客席を舞台に取り囲むように設営が企画されている。

またパンフレット(座席券つき)が発行され、能の解説のほか長良川流域に残る古い文化をとりあげ

た内容で編集される。第一部は午後二時から謡曲同好会出演。第二部は午後六時三十分始。狂言「舟ふな」(野村又三郎、野村信行) 仕舞「放下僧」(加賀敏彦)「輪之段」(泉嘉夫)「網之段」(泉嘉孝)「天鼓」(山田義高) 能「賀茂」(シテ久田徹二、前ツレ松山幸親、後ツレ前野都子、ワキ西村欽也、ワキツレ飯沼雅介、杉江元、笛・鹿取希世、小鼓・柳原富司忠、大鼓・筑紫一、太鼓・鬼頭喜太郎、後見・中川雅章、須部市、地謡・泉嘉夫、泉嘉孝、山田義高、祖父江修一、加賀敏彦、清沢一政、馬場信至、玉木孝男。

さらに同氏主宰の也留舞会、借謡会は六月二十三日、熱田神宮能楽殿で中部はじめ能、能本の会員も参加して、古稀祝賀の記念狂

## 野村又三郎師 古稀祝賀記念会

6月15日 梅鑑会 第2回定期能

梅鑑会は六月十五日、大阪能楽会館で本年度第2回定期能を開催する。

能「小督」(シテ谷口澄夫、ツレ新保徹夫、森勝子)「雲雀山」(シテ仲村勇、ツレ仲村美智子)「山姥」(シテ梅若善高、ツレ梅若善久)狂言「因幡堂」(茂山忠三郎)

和泉流狂言方・野村又三郎氏による「やまのまい会」は五月十九日同氏の古稀祝賀記念として熱田神宮能楽殿で公演、「花子」「呼声」「首引」を上演。

さらには同氏主宰の也留舞会、借謡会は六月二十三日、熱田神宮能楽殿で中部はじめ能、能本の会員も参加して、古稀祝賀の記念狂

言は六月二十三日、熱田神宮能楽殿で中部はじめ能、能本の会員も参加して、古稀祝賀の記念狂

## 熱田神宮大祭奉納能

六月五日(水)午後一時開演

熱田神宮能楽殿

能組 (観世流)

今沢 美和 西村 欽也 筑紫 敏一 鬼頭喜太郎  
清沢 一政 飯沼 雅介 後藤 孝一郎 大野 誠

竹生島 佐藤 友彦

間 前野 都子 黒田 博 稲生 芳雄  
後見 梅田 邦久 地謡 松山 幸親 祖父江 修一  
近藤 幸江 今村 嘉男 加藤 保彦 加賀 敏彦

笠之段 竹市 幸司 地謡 大管 義信  
一 調(喜多流) 小林 忠三

竈 丸 長田 麟 福井啓次郎

狂言(和泉流) 柿山 伏 松田 高義 井上礼之助

仕 舞(観世流) 網之段 三村 恵子 地謡 加藤 幸江  
仕 舞(金春流) 是 界 伊藤 雄二 地謡 前田 茂樹  
杉浦 尚三

## 名古屋観世会定式能(三回)

六月九日(日)十二時半始

熱田神宮能楽殿

附祝言 主催 能楽協会名古屋支部 後援 熱田神宮

能組

ツレ久田 徹二 河村真之介 鬼頭 好信  
天女 中川 雅章 後藤 孝一郎 鹿取 希世  
梅若 盛義 飯沼 雅介 須部 正邦

千鳥 佐藤 友彦 井上礼之助 後見 井上松次郎

雨 月中入前橋岡 慈観 今村 嘉男 梅田 邦久  
水無月 井上 喜久 地謡 須部 正邦  
鉄 輪 浦田 保利 地謡 武田 邦弘

梅田 邦久 河村 宗二朗 久田 徹二  
観世 喜之 久田 邦一郎 藤田 六郎兵衛

## 梅若盛義「二」

6月29日 観世能楽堂

梅若盛義後援会主催による「第三回ころみの会」は六月二十九日(土)東京・渋谷松涛の観世能楽堂で盛義師の「隅田川」を上演する。午後一時開演、番組は次のとおり。

能「高砂」(シテ梅若盛義、ツレ梅若善久、ワキ村瀬純、間・高橋明、笛・一嶋仙幸、小鼓・亀井俊一、大鼓・国川純、太鼓・金春)

入場料S席八千円、A席六千円、B席四千円、自由席三千円。問い合わせ先 梅若盛義後援会 電話〇三三三七〇三三七七八。

## 東 京

梅若盛義後援会主催による「第三回ころみの会」は六月二十九日(土)東京・渋谷松涛の観世能楽堂で盛義師の「隅田川」を上演する。午後一時開演、番組は次のとおり。

能「高砂」(シテ梅若盛義、ツレ梅若善久、ワキ村瀬純、間・高橋明、笛・一嶋仙幸、小鼓・亀井俊一、大鼓・国川純、太鼓・金春)

入場料S席八千円、A席六千円、B席四千円、自由席三千円。問い合わせ先 梅若盛義後援会 電話〇三三三七〇三三七七八。

## 通 小 町

梅田 邦久 河村 宗二朗 久田 徹二  
観世 喜之 久田 邦一郎 藤田 六郎兵衛

附祝言 主催 名古屋観世会 当日券 八千円

紅梅記

一三、四月のこと

三月下旬から五月始めまで風邪引きで家に籠り勝ち、中能(四六)も観世会(第二回)にも行けず、八熱山Vの秘も染めず、五月一日熱山さんの舞楽神事(破王・落路入らくそん、納曾利・なそりの独り舞Vほか)も空の背を麻子越しに見上げるばかりであった。

X X X

今年の中日は観世清和氏が松風を舞う。観世とこの曲は名古屋にゆかり深く、それを新家元が勤めることに大層意義があった。その首途(かど)を明るくパスする群の一つもあり、みられぬことに切歯の思いをした。観世会(四月)は屋島(片山慶次郎)と杜若(忍ノ舞、観世之丞)の二番。春の特筆の一つ、心残りが大。そこももってきて、本年前期は茂山千五郎氏が五回六番の来演で眼福の上たるもの。それが二番(観世と夜音曲)見落す。このあとを染みにしている。なお千之丞氏が病氣養生中の由、静養に留意された。

X X X

付、長い放送の終わった「京、ふたり」(NHK)に町内会長が出演の千之丞氏が終りの結婚式で高砂を踊る。すばらしい。また千五郎氏孫の逸平君は毎回登場、画面の進行を豊かにしていた。朝日新聞

現代人物誌(夕刊、写真入り)に八二世紀の狂言担う云々Vの見出しで紹介さる。うれし。

さて三月のこと。十七日武田宗治郎・太加志道善能。能主志房(ゆきよき)。宗治郎氏は大正八年一調一管小智を勤める(小田桐惣太郎、幸清次郎追善、呉服町)。私の中学(明倫)の友人四・五人に昭和十四年頃太加志氏門下の林原氏に九番習まで習いやがて入隊して行った。

当日はまず通小町・清和と宗和。切りでワキに向い並んで合掌する姿美し。真ん中田川・志房。充実。これまた切りで、塚を上から下へふれていかず、シテ常連近から舞然と立ちつくす横顔、いや全身に万のくの悲しみと諦めを汲みとる。子方よし。

三番目道成寺・祖父江修一。上背のある同氏、大きく足を出して乱拍子を踏む。二十分を越す。近頃道成寺は鮮烈さでなく、甚だで押しつける。鮮烈さは萎上りが上。時代の傾向か。大きな舞台であった。狂言は無布無経・山本末次郎で野郎調々が佳。これも以前は独特の超然と教化をしたが、この頃はわり易い。退縮せず。

二十一日、名古屋狂言共同社成立百周年記念祝賀の狂言会。またと「山あり谷あり」の百年。そのうち私も五十年近く、いや戦前も少しくその狂言芸に接する。おだやかで品がよい。当日は東西の録々たる狂言師による六番と共同

年、先代宗家義太郎の後をついで宗家となる。日本能楽会会員。能楽協会常議員、東京能楽子科養成会講師を歴任、昭和四十九年紫綬褒章受章。

X X X

観世流シテ方、重要無形文化財保持者、梅若万三郎氏は四月二十一日午後六時三十分、肺がんのため東京・新宿区の東京医科大学病院で逝去された。享年八十三歳。告別式は二十四日正午から東京都品川区南品川五十一一六一二の海受寺で執り行われた。喪主は長男・万紀夫氏。

前半ワキ正へ一登台を出しその上に背の高い産屋を置く。其産屋は赤い布で(鳥の、鶴か、白いカタチを抜く)掩われるが、松の方はない。これがシテの動きを制約する。「山嵐」のあたりよし。後シテの出までみ、心をあとに残す。ところで満干の宝珠を踏える所で結んでは、そのあとの「上人ハワキ心僧都Vの直くなる心の真如の宝」の盛が気にかかる。ロマンの味ありわり易い調。立派なパンフが配られる。大阪・名古屋・福岡で。

この日ももう一つ馳走があった。初番の観世栄夫(シテ)・同鏡之丞(ツレ)出演の通小町である。まさに一期一会の能。シテはげしくまたふくらみあり、一ノ松の動かぬ姿佳。前ツレの面は美女(両氏より教わる)、後は若い女面で紅入り。定家と逆のようにも。両シテの感が強い。後ツレが短かい調の中で、立ってシテと並ぶゆとりまことに見事。ワキ生放哉君は大きな調にいろいろのしぐさを入れる。成長(櫻風子方)大般若(一当曲)を喜ぶ。二九日「無明の井」(橋岡久馬、佳)・受贈の本のことは次号に。(野村匠二)

観世流謡曲本

ちくさ正文館 ちくさ駅前 電話01137

計

幸円次郎氏

幸清流小鼓宗家 幸円次郎氏は四月十日午前三時二分、心不全のため小平市の学園西町病院で逝去された。享年八十歳。

幸清流シテ方、重要無形文化財保持者、梅若万三郎氏は四月二十一日午後六時三十分、肺がんのため東京・新宿区の東京医科大学病院で逝去された。享年八十三歳。告別式は二十四日正午から東京都品川区南品川五十一一六一二の海受寺で執り行われた。喪主は長男・万紀夫氏。

梅若万三郎氏 観世流シテ方、重要無形文化財保持者、梅若万三郎氏は四月二十一日午後六時三十分、肺がんのため東京・新宿区の東京医科大学病院で逝去された。享年八十三歳。告別式は二十四日正午から東京都品川区南品川五十一一六一二の海受寺で執り行われた。喪主は長男・万紀夫氏。

梅若万三郎氏は、明治四十一年三月、先代万三郎の四男に生まれる。昭和二十三年十三世万三郎を襲名。三十二年重要無形文化財保持者認定。四十二年デンマークなど欧州七カ国を歴訪し演能、海外での公演は五十六年までに合計七回、十七カ国におよび能の紹介につとめた。スウェーデンでは、同国演劇部門最高のカーネーション勲章を受章している。

梅若万三郎氏

幸清流シテ方、重要無形文化財保持者、梅若万三郎氏は四月二十一日午後六時三十分、肺がんのため東京・新宿区の東京医科大学病院で逝去された。享年八十三歳。告別式は二十四日正午から東京都品川区南品川五十一一六一二の海受寺で執り行われた。喪主は長男・万紀夫氏。

梅若万三郎氏 観世流シテ方、重要無形文化財保持者、梅若万三郎氏は四月二十一日午後六時三十分、肺がんのため東京・新宿区の東京医科大学病院で逝去された。享年八十三歳。告別式は二十四日正午から東京都品川区南品川五十一一六一二の海受寺で執り行われた。喪主は長男・万紀夫氏。

梅若万三郎氏は、明治四十一年三月、先代万三郎の四男に生まれる。昭和二十三年十三世万三郎を襲名。三十二年重要無形文化財保持者認定。四十二年デンマークなど欧州七カ国を歴訪し演能、海外での公演は五十六年までに合計七回、十七カ国におよび能の紹介につとめた。スウェーデンでは、同国演劇部門最高のカーネーション勲章を受章している。

梅若万三郎氏は、明治四十一年三月、先代万三郎の四男に生まれる。昭和二十三年十三世万三郎を襲名。三十二年重要無形文化財保持者認定。四十二年デンマークなど欧州七カ国を歴訪し演能、海外での公演は五十六年までに合計七回、十七カ国におよび能の紹介につとめた。スウェーデンでは、同国演劇部門最高のカーネーション勲章を受章している。

叶石会・一謡会大会

六月十五日(土)午前十時始 熱田神宮能楽殿

Table listing performers and their roles for the Utsuishi Kai and Ichuwaikai festival. Includes names like 吉野天人, 小袖曾我, 三井寺, etc.

名古屋宝生会定式能(第35期)

六月十六日(日)午後一時始 熱田神宮能楽殿

Table listing performers and their roles for the Nagoya Hojukai festival. Includes names like 高野物, 高野守, 高野間, etc.

平 成 3 年 5 月 ・ 6 月 放 送 予 定 FM 能 楽 鑑 賞 (午前8時~9時) 5月 19日(日)宝生流「船橋」金井章 26日(日)観世流「歌占」杉浦元三 6月 2日(日)観世流「社若」佐藤恭之助 9日(日)観世流「夜討」藤近(再)金春智万孝 16日(日)宝生流「声」大野善 23日(日)観世流「鳥追舟」大野善 30日(日)狂言・和泉流「真流沙門」大野善 教育テレビ(毎週土曜日午後7時) 6月 1日 能「絵馬」ゲスト 喜多生 平太 8日 能「隅田川」ゲスト 宝生 六之丞 15日 能「井筒」ゲスト 観世 萬之丞 22日 狂言「井筒」ゲスト 狂言 萬之丞 29日 狂言「二人大名」ゲスト 狂言 萬之丞 (放送予定につき変更の節はご理解下さい)

野村又三郎師古稀祝賀記念  
也留舞会大信謡舞会大会

六月二十三日(日)午前十一時始  
熱田神宮能楽殿

三番叟

熊野道者 伊藤菊枝  
小舞 雪の明星 丸山ナツ  
貝 貝 貝 磯原 崇

千才松田 高義  
大鼓河村格一郎  
頭取 後藤孝一郎 笛 鹿取 希世  
脇取 後藤孝一郎 良治

昆布亮  
靑薬煉  
仏師

大名田馬 晴雄 後見 野村又三郎  
大倉山崎 慎也 和泉 元秀  
スッパ 加藤志津子 田舎者 松田 高義

雷

宇治の晒 山田 良子  
よしの袖 桜井 晴子  
花の三人長者 桑原まつ江  
小舞 三人長者 高橋 貞  
通取 川 平山みよ子  
祐 善 堀田 淑子  
独吟 高 砂 桐谷 弘充  
草子洗小町 山川 秀男

佐渡狐

佐渡ノ庄司 武 越後ノ富田 雅子  
百姓 葵 野村 信行

祝言 千鳥 太郎冠者 種村とし江 主 富田 雅子  
福之神 福之神 徳田 文三 参詣人 野口 隆行  
福雷 之 神 地謡 野村又三郎  
参詣人 奥津健太郎  
松田 高義  
(終了予定 四時半頃)

〔御来場歓迎〕

特別参加 菊池みのる 会  
主 信也 留舞 会  
指 野村又三郎 信 三郎 廣

卯月の舞台から  
観世会  
能の会二十周年記念公演

竹尾 邦太郎

「墨島」シテ慶次郎。初同、  
へ都と聞けば懐かしや、と面ヲテ  
シ気味に思ひを遠く都へ馳せる風  
情は、やがて涙に咽びシオルが、  
一介の漁翁に似ぬ人品を窺わせる  
のは慶次郎の資性である。そして  
この気鬱な時を過るるに墨島の  
源平合戦譚を所望するワキ旅僧の  
気配りもさりげ無く、すつと気分  
を交えて飲也器量を見せる。「易  
き間の事」とすらりと語りに入  
るタイミングもよく、次第に己が  
話に没入してゆく中、「着たる兜  
の綴を掴んで」拳にぐつと力が入  
る辺りや、地(九郎右衛門・邦久  
ら)となつて引きちぎる型に並々  
ならぬ闘志を見せるが、へ慶の波  
松風ばかりの、とワキ正に出て薄  
く面遣いとすると、我に返つたよ  
うに、へ音淋しくぞ、とワキに向  
き直つて、へなりにける、と下居  
するところには何か虚脱感を漂わ  
せ、慶次郎、シテの心象風景の在  
り様を的確に描写する。中入は、  
ワキにアシライ立立つと、居立つ  
たまま、へ我が名や名置らん、と  
言い放つかの地で直シ、へたとひ、  
と立つと、へ夢ばし覚まし給ふな  
よ、の返しに題を返して地切に橋  
懸に入つた。

「アイは松本薫。垣々と涙みなく  
一種無機質な印象の語り、修羅  
の合戦譚にはいっそ好ましい。後  
シテは紫地拾法被・紺地立派文様  
の涼し気な品がある。床几ではは  
とんど何もせず、僅かにサン地、  
へ判官これを開し召し、とワキに  
アシライ、直してクセ、へ無念の  
次第なるべし、と微かにクモリ、  
へさてその外の人までも、とワキ  
にアシラウだけ。どっしり構え、  
威あつて揺からず、である。へ智  
者は感はず、とすつと立つた姿  
が美しく、拍子一つ強く踏んでの  
カケリは、矢叫びの音の響動に勇  
躍する気分。へ敵は誰ぞ、以下地

との掛合から切地へきびきびと歯  
切れよく、清爽の一番だった。  
(1時間41分)  
「裏書曲」シテ太郎冠者・千  
五郎。客のある度に謡を強要され  
ては堪らん、と断る口裏の酒を、  
謡聞きたさに勧めるアド主・千吉  
固より好きな酒の誘惑についつい  
相好を崩して、「これはまた例の  
大盃が出ました」と舌舐りせん  
ばかりの千五郎。小気味のよい飲  
みっぷりにちよびり早いといつ  
ても過言でない。挙句、妻の膝  
枕を盾に逃げんとするが、主が代  
ると言えばそれまで。醒めてい  
なければいけない、と気を張つて横  
臥のまま謡つた「小原木」も忘れ  
ず共に立居の分別つきかたて  
「地主の桜」では興に乗りまか  
つて小舞まで舞い出す傍若無人は千  
五郎の独演場。和泉流では見ない  
立ち上つて舞うところが珍しく、  
「声もやう出て舞も面白かつた  
は」、の千吉のはのほのとした味  
もよかつた。(16分)

「杜若・恋ノ舞」シテ鏡之丞。  
面小面・襟白二・白摺袴(七宝繫  
文様)。赤淡黄銀金段唐織(撫子  
藤文様)。物着で唐織を脱ぐため  
下に縫箔を履着に着込んでいた  
すつきりと着こなしてそれを感じ  
させない。小舞「恋ノ舞」では地  
次第から直ぐへ花冠に蝶舞片々  
たる金、となる由であるが、常の  
イロエが抜けるだけであつた。そ  
れだけに鏡之丞の思ひの深さも知  
れるが、「恋ノ舞」とは言い条、  
宝生流の「沢辺ノ舞」を踏襲した  
よう、物着の初冠にも心葉は梅  
に非ず藤の花をかざしたり、舞の  
後、へ昔男の名を留めて、の後で  
イロエが入つたりした。

さて、前シテの呼掛は、既に幕  
放れし幕を背にしてのもの、幕  
内でないのが忽然と現れた趣で、  
杜若の精を仄めかす。ワキ旅僧・  
隆之亮との問答を進めながら二ノ  
松に寄り、「色も一入襷紫の」、

と句懸しに眺めるところには杜  
若の群生が見えるようである。初  
同、へ在原の、と一足退き、へ  
(沢辺の水の)浅からず、と右ウ  
ケ、へ契りし人(も)、と直シ数  
歩出るところにはシテの心の昂り  
がある。

物着に浅黄長絹(花梨斗藤浦公  
英文様)。白地縫箔(菊梅楓ノ丸  
文様)。腰巻・初冠(巻老老懸日陰  
ノ糸心葉)。真ノ太刀を佩く。ク  
セの中、へ沢辺に句へ杜若、と面  
遣い、へ光も乱れて飛ぶ雀、と面  
ヲラシて僅かに面遣フ嗅覚と視覚  
の微妙に妙味を見せ、舞の前、へ  
御上に、と一足詰めて、へ鶯飛ぶ、  
の面遣いは舞い立つ飛翔への憧れ  
であろう。舞の途中一ノ松に抜け  
て勾欄に寄り、右袖被いて鴨子の  
静まったところで水鏡しげしげと  
見る辺りは葉平ナルシストの面目  
躍如。キリ前、地の、へ色は何れ、  
と面遣いながら正中から前に入る  
と、へ花苗浦、と右、へ指に、と  
上、へ鳴くは、と下、を見て、へ  
簾の唐衣、はあつきり左右打込ミ  
で、さらりと左袖返すとキリ地に  
なつた。少々意外だったが抒情詩  
の美しさを表現するのに、袖を抱  
擁する濃艶な型は無用ということ  
であろうか。(1時間30分・4月  
14日・観世会)

「通小町・雨夜ノ伝」ツレ里  
女・鏡之丞。襟白淡黄・白摺袴。  
段替り無紅厚板・浅黄緞水衣(肩  
上)。面は老女で「雨宿」の前ツ  
レのような出立。左手に木ノ葉入  
籠を、右手に扇を持つ。山里の老  
女らしい元気な足腰、振りのある  
声と謙虚な挙措、これが本来の姿  
であろう。舞合によく融けこんで  
いること若い里女の比ではなく、  
木ノ葉の知識も老女ならではと思  
わせる。木ノ葉の講釈について口が  
軽くなった老女の、虚を衝くかに、  
とさうであなたは「如何なる人」  
とさりげなく問うワキ僧・欣哉の  
機微。返事を地(四郎・信之ら)  
に強わす、へかき消すやうに、と  
二度小廻りして返しを聞くと、送  
り笛(六郎兵衛)で橋懸を退くあ  
たり、冷えた余韻があつた。

後ツレは襟白赤・白摺袴・赤地  
唐織。シテは柴夫。黒頭・瘦男、  
濃い黒に紛う緑の大口に白緞水衣  
薄色の袷衣をかすく。袷衣を取っ

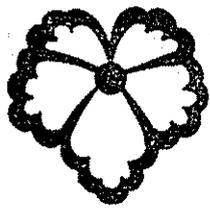
てからのシテの執念は強烈。へ煩  
悩の犬、と後座に来ると、へ打た  
るとと離れ、と腰を入れて構え  
た姿は肩に肩怒らした犬のそれに  
見え、ツレの背後に寄つて右袖取  
り、左手を肩に掛ける、へ袂を取  
つて引き留むる、には荒い息遣い  
が聞こえるかだった。立廻りは笠  
を両手に掲げ、それを押し潰さん  
ばかりに目付柱に突き当たると、左  
へ常座に廻り込み、笠を落して手  
探りし、探し当てる右手で拾っ  
て立ち、へあつた夜の夜や、と笠で  
面を覆つた。暗澹とした雰囲気  
の中、暗い情緒が風く伝わってくる、  
少々アクの強い柴夫の四位・少将  
だった。(1時間15分)

「梅舞」太郎冠者・あきら、  
次郎冠者・真吾、びつたり息の合  
つた演技は思ふも正当化させてし  
まう程。不自由な身体で酒を飲む  
ところなど、思はず身を乗り出し  
せる。三公演した「能の会」で太  
郎冠者と三度自動動るとあつて、  
あきらに開通自在な科白まわしが  
特に印象に残る。内証にしていた  
棒術のことを、主・千五郎に告げ  
口されて咎める次郎冠者に、「で  
も申し上げた」、とぬけぬけ言っ  
て退ける涼し気な素振り、その  
間(ま)が絶妙。しかし太郎冠者  
も後ろ手に縛られてみれば、後は  
退屈後に考える事は酒を飲む事  
だけ。二人の一念には主を虚仮  
(こけ)にする気持はさらさら無  
く、主の方も、へ月は一つ影は二  
つ、と謡い興じる二人の背後から、  
真剣味がよい。

後場は小宮を引き、高杯の二珠  
は元の小宮際に置き直す。後シテ  
は輪冠龍戴・泥頭・黒垂・金鏡箔  
・赤地舞衣(金鏡散シ火焰太鼓文  
様)・重折・半切(金鏡立派文様)  
・紫地腰帯(雲文様)。一ノ松で  
ワキを指し合撃してサシ謡。舞合  
に出て地との掛合から宝珠に合撃  
すると早舞になつた。舞上げ、地  
(暁夫・文鏡ら)の裡に千珠捧持  
して台に上ると面切つて左足舞合  
に下し、腰を屈めて千珠を舞合に  
置くとなつて、へ千里、と立ち、  
左右袖を返して台を下りると正中  
で、左袖返すと面切つて球を見込  
み、袖を捻ねると再び流し舞合に  
入つて破ノ舞になつた。途中スミ  
で膝を着くと千珠を拾い、再び高  
杯に戻すと、へさてまた満珠を潮  
干に置けば、と満珠の香になつ  
た。

キリは正中下居してワキに合撃  
すると、へ授け給へや、と立ち、  
一ノ松に抜けて、へ願ひも深き、  
と拍子踏んで左袖巻くと沈み、へ  
入りける、と立つて拍子二つ踏  
みトメた。

細部に神経がよく行き届き、確  
りした手順と手順の良きには感  
服。あのスミと一畳台の狭い空間  
に、千珠を沈めたり拾つたり所  
作に全く窮屈を感じさせず、のび  
のびと流麗に舞つて爽快だった。  
響子は六郎兵衛・源次郎・孝・惣  
右衛門、後見は鏡之丞・義滋。  
(1時間34分・4月27日、能の会)



料理  
あつた  
菜  
軒

本店 熱田区神戶町五〇三 電話(671) 8686-18  
本宮東門店 熱田区神宮一-11 電話(683) 5598-09  
中店 松坂屋本店10階 電話(284) 3825  
売店 松坂屋本店地下1階 電話(284) 3761



# 五月雅日記

(118)

## 玉簾

えと文 二井栄逸

去年の四月の日記に梨花一枝と題して揚貴妃をかいたことを覚えていた。

今年のはあの清婉な花は散ってしまつたが、薄べにをさしたすき通るような若葉を見ていると、やはり揚貴妃のことが思い出されてくる。それというは、来年のカレンダーの中に揚貴妃を組み入れてみようと思つたからである。

私は写生帳を各曲別に整理しているのですが、昔からのスケッチをさがし出すのはいと簡単である。

中でも昭和五十二年十月、能に親しむ会で、久々に揚貴妃の小舞を観た。その時、美しい姿の正面と側面には、美しい姿帯が各々十一本ずつ吊り下げられ、ギンシリと隙間なくすだれのようになる。



そのすだれの中からあら物凄の宮中やな、昔は驪山の春の園に、共に眺めし花の色、と、シテの謡がきこえてくる。シテは「梨花一枝、雨をおびたる粧」で、床几を立て、左右の両手ですだれを前へ押しつけて、少しかがみながら宮を出て、作り帯が各々十一本ずつ吊り下げられ、ギンシリと隙間なくすだれのようになる。

## 東海各地の薪能

### 岩倉薪能

七月二十七日(土)午後六時半 開演。会場、岩倉市お祭広場(岩倉市下本町)。来場歓迎。

狂言「蚊相撲」(井上松次郎) 能「土蜘蛛」(梅田邦久)

問い合わせ先 岩倉市教育委員会 社会教育課。

### 名古屋薪能

八月三日(土)午後六時開演。会場、熱田神社神楽殿前。

能「嵐山」(須部甫) 半能「井筒」(泉嘉夫)

能「黒塚」(玉井博結) 前売二千円(詳細次号)

### 天王薪能

八月四日(日)午後七時開演。会場は天王川公園特設舞台(雨天の場合は佐屋町中央公民館)。

能・金春流「能」(本田光洋) 前売二千円(当日二千五百円)

### 一宮薪能

狂言「昆布売」(佐藤友彦) 能「親世流「葵上」」(泉嘉夫)

問い合わせ先 一宮市教育委員会 新開後援。

狂言「通盛」(泉嘉夫)「蟬丸」(久田徹三)

道行(加賀敏彦)「松虫」(キリ)

能「竹生島」(前シテ下田雄三、後シテ奥善助、ツレ瀬戸三津子)

舞臺子「松風」(梅田邦久)

狂言「清水」(野村又三郎、野村信行)

半能「天鼓」(シテ橋岡慈観) 鑑賞券前売一般二千円(当日)

### 四日市薪能

八月一日(木)午後六時開演。会場、四日市市鶴の森公園。

能「羽衣」和合之舞(梅田邦久)

狂言「竹生島」(野村又三郎)

能「土蜘蛛」(親世流)

鑑賞券前売二千円(当日二千五百円)

問い合わせ先 四日市市文化会館

TEL0593544500

TEL0593544500

## 名古屋観世九臈会定期能(第三回)

七月七日(日)午前十一時始

素田井 簡 小林喜久 高橋一

能女 加藤保彦 西村 欽也 鬼頭英二 鹿取好世

花 西村 欽也 福井啓次郎 鹿取好世

間 佐藤友彦 吉田 妙 青木武弘

後見 観世喜久 地謡 高木美智子 坂真和久

狂言 伯母ヶ酒 野村又三郎 井上礼之助 後見 井上松次郎

仕舞 春日龍神 中所 宜夫

敦 盛クセ 高木美智子

班 女 吉田 妙 地謡 坂真和久

大雨 月前 五木田武計 遠藤 和久

能安 大江山 佐々木勝輝

後見 佐々木勝輝 高木美智子 遠藤 和久

後見 五木田武計 地謡 高橋 一 小瀬 直也

附祝言 457 名古屋南区元塩町一丁目一七(加藤保彦方) TEL052(六一)三六五九

〔要員券〕 当日券 四千元 主催事務所 名古屋観世九臈会

## 第8回野村四郎名古屋公演 能「自然居士」を観る会

七月十三日(土)午後二時開演

狂言 佐渡狐 野村又三郎 松田 高義 後見 井上礼之助

仕舞 兼 平 藤井 完治

野 宮 大槻 文蔵 地謡 井上 保治

阿 木クセ 山中 義滋 地謡 上野 朝久

能自然居士 宝生 欣也 河村 一郎 藤田 六郎兵衛

間 野村又三郎 野村 四郎

後見 井上 裕久 地謡 杉浦 保治

山 井上 義滋 地謡 杉浦 保治

後見 山中 義滋 地謡 杉浦 保治

中部日本放送文化事業部(052) 241-8111

各ブレイガイド

第33回朝日狂言会 七月十四日(日)午後一時三十分始

熱田 神 宮 能 楽 殿

文 大野 弘之 井上松次郎

地 大瀧 彌右衛門 大瀧 吉次郎

瘦 和泉 元秀 和泉 元彌

鳴 井上 祐一 井上禮之助

子 佐藤 友彦 (終了予定 四時頃)

主催 朝日新聞 後援 名古屋テレビ

取扱所 各出演者事務所・朝日新聞企画部

会費 指定期 三,〇〇〇円 自由席 二,〇〇〇円

事務所 名古屋市中区橋下町一丁目七十五井上方 電話一四三〇

松坂屋・三越・名鉄各ブレイガイド

TEL052(六一)三六五九

## 平成3年6月・7月・8月放送予定

FM能楽鑑賞(午前8時~9時)	
〔6月〕	23日(日) 観世流「鳥追舟」大野善
30日(日) 狂言「和泉流」大蔵流「宝の箱」	
〔7月〕	7日(日) 観世流「通草紙」五今藤金
14日(日) 観世流「草紙」五今藤金	
21日(日) 観世流「玄流」	
28日(日) 観世流「満流」	
〔8月〕	4日(日) 観世流「恋重荷」坂喜
11日(日) 観世流「半流」	
教育テレビ(毎週土曜日午後7時)	《日本の伝統芸能》能・狂言鑑賞入門Ⅱ
6月22日 狂言「葺」ゲスト 野村 山中	
29日 狂言「二人大名」ゲスト 茂 山中	

(放送予定につき変更の際はご理解下さい)

三代藩主綱誠(つなのぶ)の治世は、元禄六年(一六九三)から、元禄十二年(一六九九)までの九年間である。

この時期は、まだ、能狂と言われる五代將軍綱吉の時代が続いている。

その影響からか、綱誠も二代藩主光友に劣らず、能に強い関心を持っていたようで、前回でも、すでにふれたが、貞享三年(一六八六)綱吉の所望による能で、「杜若」を演じている。「鶴鶴籠中記」(「名古屋遊書」)によると、その時の番組は、ワキ権七、大鼓一郎兵衛、小鼓新右衛門、太鼓又二郎、第六郎左衛門となっている。

元禄七年七月には、綱誠の家督を嗣いで、家中の諸士、町人までも見物することを許される盛大な能が演じられる。夏の暑い盛り、白州に並んで座って見物していた町人達は、暑い陽射に、息も絶えような苦しみを感じて見物していたと、「鶴鶴籠中記」に記されている。

### 尾張藩の能の歴史(四)

辻 宏一

太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

狂言 末ひろ 和泉 飛越 吉兵衛

七月二日 二回目 この日も又大変暑く「息も絶る斗也」とある。「兼平」の能の時に食事になったようである。「汁・塩鳥・茄子・鶏・魚」一盃分不得食。

水と味噌・鶏・魚。今度の御能には御菓子なし。先年大納言様の時は「御菓子有之」とある。当時の式能の中食の様子と、今回は菓子がないことが不満に思っていることが記されていて面白い。

この日の能の番組は、次のようになっている。

半平 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

加茂 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

狂言 御田 又三郎 こんくわい和泉

半平 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

兼平 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

源之丞 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

江口 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

田村 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

喜左衛門 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

東北 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

道成寺 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

祝言 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

祝言 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

人の刀を間違えてきて掃り、騒動になったことが記されている。七月三日三回目は、次のようになっている。

源太夫 庄兵衛 大鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

源之丞 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

頼政 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

祝言 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

乱 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

ちきり木 又三郎 女山たち 市右衛門 四回目 内証の御能

弓八幡 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

屋嶋 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

源之丞 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

采女 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

道成寺 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

祝言 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

祝言 (ワキ) 大鼓源右衛門 太鼓源右衛門 小鼓七十郎 笛六六

源三郎・庄六といったワキ役者が出演している。合計八名である。大鼓は松岡甚之右衛門、石井弥市(石井流家元扱い)・石井孫三郎(石井流)・七左衛門・大蔵六郎・中村太兵衛・七右衛門(小鼓も兼務か)の七人で、松岡甚之右衛門が最も出演回数が多い。その他、石井弥市・中村太兵衛が四日間続いて出演し、石井孫三郎・大蔵六郎が三日、七左衛門二日、七右衛門一日となっている。

大蔵六郎大蔵流は、「能楽諸家系譜」によると、流祖は、金春禪竹の息子で、大蔵大夫十郎道加を初世としているが、「享保六年書上」では、道加の養弟とされる二世大蔵九郎能氏を流祖としているものもある。大蔵九郎能氏は、親世小次郎信光の弟子で、享保三年(一五三〇)頃没したらしい。その大蔵九郎能氏の御孫にあたる大蔵仁介虎家が三世を継承する。その息子平蔵正氏が四世を継ぎ、慶長十年に没する。その養子を、甥の源右衛門が継ぐ。その子源六が延宝三年(一六七五)自害し、家は断絶してしまっただけで、三世仁介虎家の養子で、小鼓に転じていた、大蔵流小鼓方二世の長右衛門宣安の孫で、正保三年(一六四六)に、藩祖義直によって、尾張藩の大鼓方として、切米七十石、扶持七口を賜わり、召し抱えられた大蔵仁右衛門宣安が六世を継ぐことになる。

源右衛門の頃までは、金春流の大鼓方であったが、宣安以後は、小鼓方大蔵流のアシライ鼓として、奈良に住み、尾張藩に仕えたようである。

なお、「能楽諸家系譜」では、小鼓方二世の長右衛門宣安を五世としている。六世を継いだ大蔵仁右衛門宣安は、明暦三年(一六五七)に没する。

七世は、大蔵仁右衛門宣安の養子、七左衛門(五世長右衛門の嗣子)の三男元禄八年(一六九五)没)が若を継承し、大蔵流大鼓を代表する形になる。この頃、「大蔵」を「大倉」に改めたようである。尾張藩では、七左衛門家を家元として認めていたが、江戸幕府では、大蔵源六自害後は、大蔵流大鼓方

として、金春三郎右衛門家(金春座大鼓)と、高安三太郎家(金剛座大鼓)を代表者として認めていたようである。

幕末には、大蔵の大倉流・金春流・高安流とし、それぞれ流儀化していった。金春流は、昭和になって流儀は絶え、高安流は、安福建雄が家元権を預っている。大倉流は、明治元年に家元を継いだ十四世大倉繁次郎が東京に上京し、十五世宣利とともに東京で活躍したが、宣利が梅若流樹立に参加したことから、家元権を取り上げられ、現在、小鼓方大倉流家元が、宗家を預っている。

石井流は、大蔵樋口久左衛門石見守の弟子で、文禄年間禁中罷にも出演したことがある。石井庄左衛門(長流)が、流祖である。その子石井孫三郎が尾張藩の大鼓方に抱えられて系譜が続いた。尾張藩の石井家は、弥市・孫三郎・吉三郎と称した人が多く、尾張藩では、石井家を家元扱いにして、萬治二年(一六五九)、尾張藩主二代目光友によって召し抱えられ、切米七十石、後八十八石、扶持七口、後に十口を賜わっている。その子石井孫三郎が尾張藩二代目を継ぐ。概して、京都住まいのまま尾張藩の能役者を勤めたようである。明治十年頃七代目弥市が没して、子供がいなかったため、門人佐枝金市が系譜を継いだ。その死後絶えてしまった。

加賀藩の石井家は、代々孫兵衛・仁兵衛と称し、系譜が継承されてきたが、明治に入って十世石井一斎の没後、宗家は絶え、現在は門人谷口正喜氏が宗家代理を務めている。

現在、名古屋で活躍している大鼓方としては、大倉流では、寛政一氏、石井流では、河村総一郎氏・河村大氏・吉田定男氏がおられる。

次回は、太鼓・小鼓・笛などについて、ふれてゆきたい。参考文献「名古屋歴史」『岩波講座能狂言』『能楽全書第二巻』『一言事典』『能楽全書第二巻』などを主に用いて、まとめたものである。(筆者は岐阜市立女子短期大学教授)

### 夏の素謡会

七月二十一日(日)午後一時始 熱田 神宮 能楽 殿

盛久 野村 四郎 武田 邦弘 祖父江修一

小鍛 治クセ 近藤 幸江 若キリ 高木美智子 虫キリ 熊沢恵美子

熊野 久田 徹二 梅田 邦久 祖父江 正邦

竜 田キリ 今村 嘉男 葛 加賀 敏彦 高橋 一 須部 一英

山姥 中川 雅章 觀世 喜之 小島 一英

附祝言 主催名 古屋 觀世 会 (終子 四時頃)

全館自由席 入場料 四、〇〇〇円 入場券申込先 能楽殿及び出演者宅・チケットがびにて 取扱い。

### ◆皇月の舞台から◆ 「九皇会」と「又三郎古稀 祝賀やるまい会」

竹尾 邦 太郎

「悪太郎」シテ松次郎。若気のバサラ(派手に見栄を張ること)振は、大躍進え衣裳短やかに長刀誇示する傍若無人。今も今とて濃厚な伯父・礼之助を助い、身に覚えの日常の不行跡を些かドスを利かせるつもりでひけらかし、「そしるるげな」と凌む。この微妙なアクセントは、剃髪されて夢枕、俗名に代わる南無阿彌陀仏の名を与えられた後、鉢印の僧号(南無阿彌陀仏)に、怪野ながらも地りかね、「なんぞいおう」と問い返すことと共に、如何にも和泉流発祥の地の郷土の味わいが味覚され、アド二人とのアンサンブルも上々。(38分)

「鶴鶴」シテ喜正。当地初シテと思ふ。襟浅黄・紺無地髪目・茶水衣・白紺分腰。面は朝倉尉か。松明振りたてという程ではないが、少々手首(のスナップ)が利き過ぎの感じと、老体の運びにしては膝から下がよなよなとして見えた。固より長身瘦弱、視覚から来る不利はあるが、今後の鬼畜物の克服願であらう。しかし謡の豊かさは力強さを生み、語りも説得力があった。眼目の鶴ノ段は猛る鶴を、へばつと放せば、や、へばつと放せば、とスミ近く、松明振りに下を面通し、焦点定まらず凝視する辺り、月が上って篝火の光が失せ、首を横に振り絶望を表現して松明と扇括てるや、へばつと放せば、と退つて双シオリするところ、上半身の動きに比べ足捌きなどが良すぎで、卑賤の漁夫の粗野というか荒々しさにそぐわぬ嫌があった。

後シテは赤頭・結黒い小ベシ見・唐冠・紺地狩衣(金で火焔太鼓立羽文様)・赤地半切(金襴妻宝輪文様)。へ千里が外も雲雨れられていた。その頃の京都・大阪、奈良なつかし。

片やのむらとしこさん。「春の雪」。俳句で始まる。「母も死に子も死に河が流れて」。高屋窓秋。窓秋昭和十二年の句集「河」に載る。これを「折々のうた。大岡信(朝日・平成三・二・八同欄)」でみられた。そしてご夫君・親世左近氏・森茂好氏三氏の急逝を哭(なげ)き、思いを新作能・無明の井に馳せ、「姑」にうつり筆を止める。生死と女(の業)にふれる。綿々かつ厚利な文章で、共にゆかし。

高屋窓秋こと高屋正国氏は私が文章を広く深く語り得た数少ない先輩である。昭和十四年大学(英文学)に在ることを辞し、放送局に入ったが、そこに失望し、内外ともに暗い時代の私をやさしく慰めてもらう。戦争が二人の仲を遠ざける。貴公子の風貌は今も失われていない。

「灰色」の段髪目目に扇面散シ文様の濃い萌黄の素袍袴、小サ刀。北白川に宿を取った花子からの便りにも妻を憐れ、「ただ一度ならで返事も致さぬ」痛恨をバネに、叱決して、「女共(妻)を呼び出し、たばかてみようと存ずる」決意の程が、あからさまに利己的なら、苦心惨憺の末に一夜の暇を手に入れるや、にこつ、として、「阿漕ながらもう一夜は成るまいか」と舌舐りせんばかりに付け入る厚顔が更に功利的な印象を与え、花子を恋う一途な思いが少々純から遠退いたのは一種の抑れか。後見座へ退く妻・万之丞と離れ違つてワキ座にきたシテの、常座へ走つて妻の姿無きを確認した歓喜は浮き立つばかり。それだけに、寸刻を惜しむ気分は、太郎冠者。万作を慰し身替りとするなど、目まぐるしく顔の回転によく表現され、さればこそ浮遊し入りと称する中入も宙を飛ぶようである。

一方、正体見破られて怯怖する万作の、渡世を弁まえた小賢しさがしおらしく、その立場に同情する万之丞が、綺麗な端布で巾着などを作つてやる、というも生活くづくとみる。

五月三日テレビ能(NHKK、以下おなじ)屋島・粟谷菊生。喜多流同曲は始めて。後シテ殊におもしろし。シテ常座あたりから一ノ松の切りまで息もつかせぬ。喜多の強吟(修羅物)は音に高いがもう二・三番きいてみたい。本自力強し。地頭友枝附世のはず。次の四日狂言二題。釣狐・和泉元弥。秘曲狸鼓・和泉元秀。この二番立付けは勿体ない。NHKの好意であろうが、少し気が重い。しかし味わいはちがうので楽しめる。この放送も時間が少し短縮。一文惜しみの百知らずの類か。また首が出るが、かつて藤田流先代家元六郎兵衛氏が「いつ理の笛を乞われても心の用意はできておらず」と語られた。今も忘れぬ。

三日目は六日に藤風(宝生英雄・宝生剛・敏哉八子方)ほか。再。ツレ日野賢朝親子の別れ、資朝のむくろを抱えるワキ関のしぐさ、切り(シテの舞台)をつ

奥を透ませて巧妙。身替りの身替りになった妻は、「汝は目に見えぬ所へ行く休め」と促し、太郎冠者は切戸へ退く。入れ違つて後シテは、士鳥帽子は脱ぎ、襟浅黄・素袍袴(瓢箪文様)・右肩脱ぎ、左手に太刀の立出で、一ノ松に辿り着く。心ここにあらず、の風情は、所謂「夢心小歌」を、へ更けゆく鐘は、としみじみ吟じ、東の間の連瀬を眺みしきつた虚脱状態が浅ましい程。「さてもさても美しき女かな」の詠歌も徒事ならず、座禅念のまま聞かせる小歌がかりの惚気話の態の無さは、へよその女顔見て我が妻見れば、山の奥の山猿めが、と、憎々しさを倍加させるが、気分が赴くままに、へ鳥は月に鳴き、スミで月の扇する自己陶醉も、やがては現実に引き戻され、一ノ松に抜けて、へ名残惜しやの、とシテ。その対極には、ひたすら無気味な沈黙を守る妻が居て、圧倒的なサスペンス。「誠に、思ふに別れ、思はぬに添ふと云ふは某が事ぢや」、の後の寸刻の静寂は吐息が聞かれる程。そして一転、登る言葉一語ずつ句切るかの、「や・い・わ・お・と・こ」の凄味。しかし、驚愕から本能的に体勢立て直さんとする又三郎は、口辺にひきつるような薄ら笑いを浮かべる強かきだった。その後がさぞ怖かろう、の余韻を残して追立てられた。

古稀記念と銘打つが、又三郎の年齢を超越した艶のある瑞々しい舞台だった。(1時間5分)

「首引」シテ親鬼・耕介が溺愛するアド姫鬼・健行。その甘つたれぶりが子方の扮する姫鬼とは異なり、お転婆娘のオーバー・アクシオン気味なのも楽しく、男女の機微心得、小アド為朝・良介に仄かな愛情寄せせるかの素振りが見えるのも微笑ましい。並居る戯態の鬼共を庄する直面の良介の存在も中々のももの。好配役で大型の「首引」となった。(28分。5月19日・第34回やるまい会)

観世流謡曲本  
ちくさ正文館  
ちくさ駅前  
電話01137

### 紅梅記

六月の雨  
五月二十日高が鳴く。強くしかりした雨で。小庭に遊び、近所に移り、また訪れてどこかへ帰っていく。月末まで続く。その頃時を同じくしてがま(蛙)もなく、雨が近いのである。これからは雨の中の熱田行になるであろう。

次いで四・二九テレビでみた問題の新作能・無明の井について感想をのべて置きたい(NHK)。これも雨の日にしたためる。力作好演。悲しみも怒りも折りもあり押し付けがましい処もなく、立派な文芸作品となる。シテの迷い、美しいツレ(心臓をうける女)の悩みは十分にあらわれ、大事なアイ(大島寛治)風格あつて佳。新しく生死を扱う能の深遠に感銘。作者の知恵と表現の効果に敬意を。なお、放送はもう少し時間がほしい。能の作者・多田富雄(詞)、橋岡久馬(舞曲)。シテ久馬・ツレ橋岡佐喜男・ワキ鈴木岑男ほかの諸氏。笛は名古屋藤田六郎兵衛氏。貴重な諸資料を受く。十月京都で再演の予定。

本。始の話。堀田吉雄・水谷新左衛門両氏共著。狂言始(驚流)を始め、小舞員尽し・肩衣(始はかの模倣)載る。後者二つは井上祐一氏著者に紹介。佳書。発行。光出版印刷(松阪市)。受贈。「ザインとソレン」。松本武氏著。金春流を好む。元裁判官、現在公証人。日本法律家協会会員は

か。前半法律の講義記録。後半愛する能の話。桜間金太郎(弓川)・梅村平史朗・本田秀男・三氏への恩慕深し。冒頭桜川はか舞姿の写真多数あり。私家版。朝日新聞社。受贈。

九月七日。朝長・佛法(せんぼ)う。親世鎖之丞・ワキ宝生剛・太催主鬼頭喜太郎)行わる。喜太郎氏は親世流太鼓方の家。岡氏祖父為太郎氏が曾祖父追善に佛法(大七)を勤めて以来名古屋で七十五年目の由。シテ親世元義・小田鍋惣太郎・太祖父。

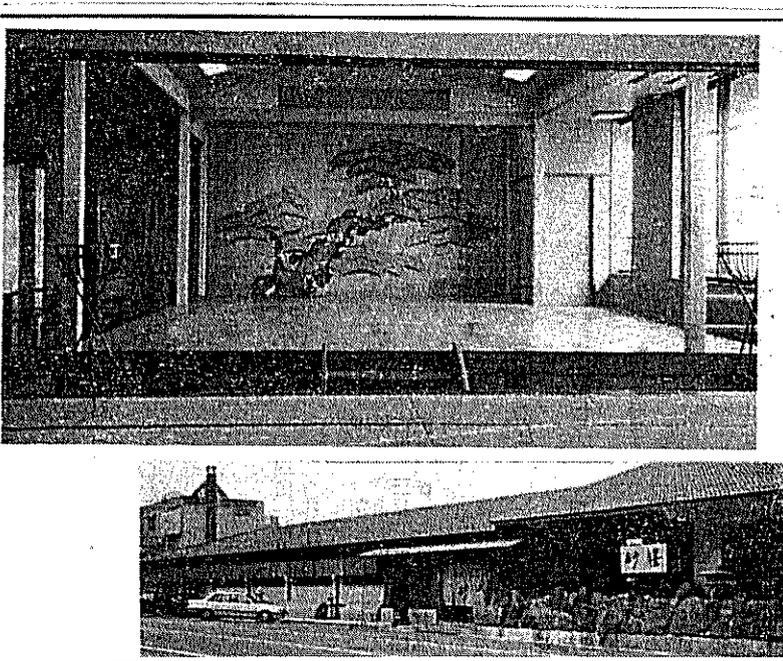
当日は親世元義(後左近、神歌と望月)・橋岡久太郎(羽衣)ほか八人へに寺田左門治(剛、阿漕)各氏出席。

狂言は枕物狂(外堀新太郎)ほか共同社。今回はシテ方五流家元出動(舞囃子)・大能。期待大。(泰山木切う日、野村広二)

「悪太郎」シテ松次郎。若気のバサラ(派手に見栄を張ること)振は、大躍進え衣裳短やかに長刀誇示する傍若無人。今も今とて濃厚な伯父・礼之助を助い、身に覚えの日常の不行跡を些かドスを利かせるつもりでひけらかし、「そしるるげな」と凌む。この微妙なアクセントは、剃髪されて夢枕、俗名に代わる南無阿彌陀仏の名を与えられた後、鉢印の僧号(南無阿彌陀仏)に、怪野ながらも地りかね、「なんぞいおう」と問い返すことと共に、如何にも和泉流発祥の地の郷土の味わいが味覚され、アド二人とのアンサンブルも上々。(38分)

「悪太郎」シテ松次郎。若気のバサラ(派手に見栄を張ること)振は、大躍進え衣裳短やかに長刀誇示する傍若無人。今も今とて濃厚な伯父・礼之助を助い、身に覚えの日常の不行跡を些かドスを利かせるつもりでひけらかし、「そしるるげな」と凌む。この微妙なアクセントは、剃髪されて夢枕、俗名に代わる南無阿彌陀仏の名を与えられた後、鉢印の僧号(南無阿彌陀仏)に、怪野ながらも地りかね、「なんぞいおう」と問い返すことと共に、如何にも和泉流発祥の地の郷土の味わいが味覚され、アド二人とのアンサンブルも上々。(38分)

「悪太郎」シテ松次郎。若気のバサラ(派手に見栄を張ること)振は、大躍進え衣裳短やかに長刀誇示する傍若無人。今も今とて濃厚な伯父・礼之助を助い、身に覚えの日常の不行跡を些かドスを利かせるつもりでひけらかし、「そしるるげな」と凌む。この微妙なアクセントは、剃髪されて夢枕、俗名に代わる南無阿彌陀仏の名を与えられた後、鉢印の僧号(南無阿彌陀仏)に、怪野ながらも地りかね、「なんぞいおう」と問い返すことと共に、如何にも和泉流発祥の地の郷土の味わいが味覚され、アド二人とのアンサンブルも上々。(38分)



幽玄の空間.....  
大広間つき 能楽式舞台

知多半島の高峯山を背景に伊勢志摩を一望できる海辺に面し、純和風の趣きに満ちた「妙膳」に72畳の大広間をもつ能楽式舞台が完成しました。四季折々にまごころこめた海の幸のおもてなしとともに能会、ご社中会のご利用をお待ちしております。

知多半島 海 伊勢 味とる

妙膳

(シーサイドプリンス新館)  
愛知県知多郡南知多町大字内海小榎40  
TEL <0569> 62-1311(代)

平成3年7月・8月放送予定

FM能楽鑑賞(午前8時-9時)

- [7月] 21日(日) 観世流「玄 象」藤波重満 28日(日) 金剛流「満 仲」金剛 〔8月〕 4日(日) 観世流「恋重 荷」坂井音重 11日(日) 喜多流「半 節」喜多節世 25日(日) 観世流「夕 願」山本真賀

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円

郵送の場合 1年1500円

一 部 90円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- [7月] 21日(日) 観世会 楽 会 (有料) 〔8月〕 3日(土) 名古屋新能 (有料)(番組①面) 4日(日) 宵 陽 会 (来場歓迎)(番組①面) 11日(日) 官庁楽団宝生会大会 (来場歓迎) 18日(日) 司 宝 会 (来場歓迎) 24日(土) 衣 斐 正 宜 後 援 会 (有料) 〔9月〕 1日(日) 大 衆 能 (有料) 7日(土) 鬼頭喜太郎舞台生活60周年記念能(有料) 8日(日) 観世会 定 式 能 (有料) 14日(土) 名古屋能楽鑑賞能 (有料) 15日(日) 宝 生 会 定 式 能 (有料) 21日(土) 九 草 会 定 期 能 (有料) 22日(日) 和 泉 会 大 会 (来場歓迎) 23日(祝) 鳳 鳴 会 大 会 (来場歓迎)(番組①面) 27日(金) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎) 28日(土) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎) 29日(日) 郁 風 会 大 会 (来場歓迎) 〔10月〕 5日(土) 幽 花 会 大 会 (来場歓迎) 6日(日) 幽 名 古 屋 会 大 会 (来場歓迎) 10日(祝) 武 田 会 大 会 (来場歓迎) 12日(土) 猫 恵 会 大 会 (来場歓迎) 13日(日) 邦 謡 会 大 会 (来場歓迎)

(演能変更の際はご了解下さい)

鬼頭喜太郎 60周年記念能 9月7日 朝長・懺法上演 観世流太鼓・鬼頭喜太郎の舞台生活六十周年記念能が今秋九月七日熱田神宮能楽殿で催される。

大阪新能 8月11、12日生田神社 第35回大阪新能は八月十一、十二日の二日間、生田神社境内で行われる。

名古屋新能 8月3日(土) 能3番・狂言・仕舞 熱田神宮 「名古屋新能」はことし二十六回をむかえ、八月三日(土)熱田神宮神楽殿前・特設舞台上で催される。

いわむら城新能 8月17日 宝生流能2番 八月十七日(土)岐阜県岩村町の歴史史料館前・藩主邸跡で第七回新能が催される。

はぎわら新能 7月28日 龍「船弁慶」 岐阜県萩原町で初の新能上演。7月28日、会場萩原小学校校庭

第26回名古屋新能 八月三日(土)午後五時半開演 熱田神宮神楽殿前・特設舞台 「八月十一日」能「鶴亀」(小寺一郎)「頼政」(阪田力)「半節」(梅若春高)

Table listing names and roles for the 26th Nagoya New Performance, including names like 観世流, 喜多流, 金剛流, etc.

Table listing names and roles for various associations and events, including 幽花会, 片山慶次郎, 藤井久徳, etc.

# 水辺の草

(119)

えと文 二井栄逸

黄色い浅沙(あさ)の花を浮かした池のそばを通ったことがある。水蓮も美しいけれど、浅沙の花は何となく素朴な趣きがあつて好きである。

日本の池や沼にひろがる水草は、どの草を見ても美しい葉と、素朴な花をもっている。

蓮の花の 葉の如し 水の面 風の無い静かな池面に、小さな蓮の花が水面一面に顔を出しているのを見ていると、楽譜を見ているような気がしてくる。

淡水の蓮は、海蓮とちがって花を開く。色は白か、淡黄緑色など

の地味な色で、陸上の草の花のように目立たないが趣きは深い。私は浅沙と同じように、夏になると必ず生けるのが河骨(こうほね)である。河骨という語源は水底の泥中に横たわる太い根茎が白く硬いので骨を連想させた言葉である。

水中に沈んでいる葉は、質が薄く、丁度、海藻のようにやわらかである。

深い池等の河骨は葉がほとんど水面に浮いているが、浅い沼地の河骨は、抹茶色の美しい葉を茂らせ、黄色い花を咲かせている。

菱の花や、真菰、沢瀉(おもたか)等も素朴らしい。

## 喜多流ゆかた会

平成三年

とき 七月二十八日(日)午前十時半始  
ところ 四日市市元町二一四

寿美家

電話〇五九三三三三三六六八八

- 素東 北 王生 尚子 神保田鶴子 (地) 加藤梅代
- 素三 輪 大川 大三 福田 勝 (地) 二井英世
- 素阿 漕 阿部 久枝 大島 雪枝 (地) 駒田宏
- 素卷 絹 山崎 和子 門 満里子 (地) 井田和子
- 素弱 法 師 小泉 まき 徳田 萬子 (地) 堀木 倫子
- 素柏 崎 柳谷 史夫 菊地 唯詞 (地) 小泉 勝
- 素半 藤 杉山 一子 加藤 春江 (地) 加藤千代子
- 素子 雲 雀 山 能川 泰子 吉田 定男 藤本利三郎
- 素子 鶴 之 段 二井 英世 吉田 定男 藤本利三郎

私が水草に興味を持つのは、浅沙、おもたか、こうほね、菱等は、能楽の文様にもよくつかわれていたからである。特に唐織や、縫箔に多く、長相等にもつかわれていた。私の頭のの中には、山野草と水草が一ぱいに繁茂しているよう

池の玉瀧と見るぞ悲しき  
― 柿本人麿―  
失意のあまり入水した采女であったが、長相姿で現れる采女の姿は、現世の苦想を越えて、仏果をよこさ清逸な境地にあつて、「遊女の序」といわれる序の舞を舞い、永遠の青い波に帰ってゆく女性に姿に昇華してゆく。  
(平成三・七・三夜)



- 独 飛 鳥 川 藤崎 純子
- 居 雛 子 西 王 母 加藤 千代子
- 独 吟 藤 坂 小泉 勝 石原 久蔵 藤本利三郎
- 舞 雛 子 花 月 吉村 万子 石原 久蔵 藤本利三郎
- 舞 雛 子 羽 衣 堀木 倫子 折田 育枝 藤本利三郎
- 竹 生 島 菊地 唯詞 吉田 定男
- 雨 師 小泉 まき 折田 育枝
- 阿 之 漕 折田 育枝 濱口 幸成
- 一 雲 林 院 二井 栄逸 鬼頭喜太郎
- 仕 舞 上 和谷 衡市
- 附 祝 言 主催 二井 栄逸
- 当日 市 二井 栄逸 会

<b>名古屋観世九皇会</b> 観 世 喜 之 加 藤 保 彦 青 木 武 弘 高 木 美 智 子 吉 田 妙 一 高 橋 瞭 一	<b>名古屋淡交会</b> 橋 岡 慈 観 瀬 戸 三 津 子 稲 沢 市 留 島 町 二ノ宮 六 瀬 戸 方 電話(〇五八七)〇三三三八八番	<b>財団法人 鎌倉能舞台</b> 中 森 晶 三 中 森 貫 太	<b>名古屋観生会</b> 野 村 四 郎 東京都杉並区永福四一三〇一〇 電話(〇三三三)二一五二一九 名古屋千種区日和田四ノ一〇 小嶋 方 電話七五一八八〇番	<b>名古屋橋岡会</b> 名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五 山田 紀 子 方	<b>邦 謡 会</b> 梅 田 邦 久 須 部 一 甫 清 沢 美 和 今 田 和 政 本 田 勲	<b>春 鶯 会</b> 梅 若 善 高 〒565 豊中市新千里南町三丁目18ノ12 電話(〇六〇)八三二一七八五 〒120 東京都足立区綾瀬一15 13 302 電話(〇三三〇)四一七四〇九	<b>武田謳楽会</b> 武 田 欣 司 武 田 邦 弘	<b>壺 泉 会</b> 泉 嘉 夫 名古屋市昭和区山里町一〇三 電話(〇三三三)二一三二一八五 西宮市甲陽園目神山町二二二五 電話(〇七九八)二四二五八	<b>初 陽 会</b> 武 田 宗 和 精古場 名古屋千種区今池四丁目 15ノ3 浅井ヒル 電話(〇三三三)三三三三三三三三三三	<b>松 音 会</b> 泉 泰 孝 泉 雅 一 郎 東京都杉並区宮前四一一九一四 電話(〇三三三)二一八二八〇番	<b>大阪能楽会館</b> 大 阪 西 智 久 〒500 豊中市北極家2ノ10ノ3	<b>生 韻 会</b> 山 中 義 滋 〒545 大阪市阿倍野区阪南町六十五ノ一八 電話(〇六〇)六九二一三八二五	<b>下 田 雄 三</b> 豊中市曾根東町四一ノ一二 雄 謙 会 中 部 地 区 連 合 会 名 古 屋 和 石 会 会 一 宮 竹 会 会 岐 原 雄 会 会 下 呂 雄 会 会 萩 山 雄 会 会 高 山 雄 会 会 倭 文 之 屋 社 中 会 会	<b>大 垣 浦 声 会</b> 精古場 大垣市竹島町善念寺 住 所 京 都 市 左 京 区 下 鴨 芝 本 町 五 八 浦 田 保 利	<b>名 古 屋 修 諷 会</b> 梅 若 修 一 上 田 鶴 正 会 能 楽 堂 社 団 法 人 鶴 正 会 会 上 田 鶴 正 会 会 上 田 田 貴 弘 上 田 田 拓 司
---	---	---	---	---	---	---	------------------------------------	--	---	---	---	---	--	---	--

前面に続いて、今回も三代藩主綱誠の治世期の太鼓・小鼓・笛などの主なる役者について、ふれることにする。

綱誠の家督を嗣いで演じられた四日間には、演能の際の太鼓方として、諸井源右衛門、諸井源兵衛が、主に勤めており、それに長谷川与八郎が、加わっている。

諸井源兵衛は、観世流太鼓役者として、寛治元年(一六五八)二代藩主光友によって、召し抱えられ、切米五十石、扶持六口を与えられた。寛文十三年に亡くなり、その子吉右衛門が、二代目を継ぎ、源兵衛と改名する。

この諸井家は、七代目金太郎が活躍する江戸末期まで、芸系が続いている。なお、諸井源右衛門は、諸井家の一族であろうが、源兵衛との関係については、くわしいことは分らない。

諸井源兵衛の流派、太鼓方観世流は、流祖を、観世与四郎吉国(観世元重(八音阿弥)の四男、一四四〇~一四九三)と云う。この観世与四郎吉国は、太鼓を、金春流太鼓の流祖、金春三郎豊氏(神竹伯父)に学んだ。それゆえ、当初は、観世流太鼓の芸系は、金春流太鼓の芸系と同じであったのである。

二世榎垣本(ひがもと)と、与五郎吉久、三世榎垣本(大田夫国忠、四世似我(じが)と左衛門田広と受け継がれた。似我と左衛門田広は、太鼓の名手であったばかりでなく、数種の太鼓の伝書をも書き

### 大阪城新能

7月30日 能3番上演

夜空に浮かぶ大天守閣を背景に催される「大阪城新能」は七月三十日(火)大阪城二の丸庭園で催される。開演午後五時。

主催・読売新聞大阪支社、読売テレビ。入場料一般三千円(前売二千三百円)

能組は、金春流能「氷室」(金春晃美) 観世流能「杜若」(恋之舞) (観世清和) 大藏流能「附子」(茂山忠三郎) 観世流能「安宅」(勸進帳・酌掛) (観世栄夫)

問い合わせは読売新聞大阪本社 大阪城新能係(電話〇六―三三六六)

### 尾張藩の能の歴史(五)

観世流太鼓の家元の名前は、左吉とか、与左衛門とか称する人が多

太鼓方観世流として、現在も名古屋近辺に居住し、活躍しておられる鬼頭喜太郎氏、助川竜夫氏などがおられる。

小鼓方 小鼓方役者としては、観世流小鼓方高田九郎三郎、中地庄左衛門、中地喜右衛門、七右衛門、七十郎、七左衛門、庄右衛門、孫市、理右衛門、権十郎など、十人の名前が見える。

このうち、中地喜右衛門、七右衛門、中地庄左衛門、高田九郎三郎(一八四五)

### 松阪新能

(月見の宴)

八月二十九日午後六時開演。

会場・松阪公園特設舞台、主催・松阪能楽連盟。

能「滑巻」(シテ和合衛市) 能子「高砂」(浜口幸成)

### 佐藤耕司氏還暦 祝賀司宝会大会

宝生流・佐藤耕司師主宰の司宝会は、八月十八日(日)師の還暦祝賀大会を熱田神宮能楽殿で開催

郎などが、主なる小鼓役者として勤めている。

観世流小鼓方高田氏は、初代を高田長左衛門と言ひ、慶安元年(一六四八)に、藩祖綱誠によって召し抱えられ、切米六十石を与えられていた。寛治二年に亡くなり、その二代目を九郎三郎が受け継いだのである。三代目は、伊右衛門と称し、その後、家督を継ぐ者は、伊右衛門と書われる者が多い。九代目で芸系は絶えたようである。江戸末期まで続いた家柄である。

小鼓観世流は、その芸系の祖を、宮増弥左衛門親賢においでしているが

### 飯富良人氏

飯富雅介氏蔵文

高安流ワキ方・飯富良人氏(飯富雅介氏蔵文)は六月十八日午前十一時六分心不全のため逝去された。享年七十五歳。

葬儀は二十日午後一時から熊本市・白川斎場で行われた。喪主は妻恵美さん。

自宅は熊本市黒髪一六の二九(筆者は岐阜市立女子短期大学教授)

既して、めぐまれた環境にあつたためか、流勢拡張に力を注がず、地方諸藩に新九郎流の小鼓役者は少なかつたようである。現在も流勢は弱い。

笛方 笛方の役者としては、藤田清三郎、横井庄助、藤田清兵衛、平岩加兵衛、半六など五人の名前が見える。藤田流については、すでにふれているので、平岩流について説明することにする。

平岩流は、仙台藩主伊達政宗の小姓であつた平岩勘七親好が流祖で、主命によって、笛を牛尾豊前(習った)と云つたようである。藩主の意向で、平岩流と云つたようである。初代は、元和から慶安期に活躍している。一噌流三代目、中村晴庵にも笛を学んでいる。仙台藩から百五十石の知行を得ている。初代の平岩勘七親好の弟平岩加兵衛が、寛永年中に、尾張藩祖綱誠によって、切米八十石、扶持七口を与えられ、召し抱えられる。これより幕末まで、尾張藩笛方として、芸系が続く。

この他、加賀藩にも牛尾流の弟子が召し抱えられて、江戸末期まで続いたようである。

ただし、四座の笛方になつたものは一人もない。

このように、三代藩主綱誠が家督を継いだ元禄七年頃の能役者は、かなりの人数に上るが、それでもまだ十分であつたようである。「羽鶴籠中記」では、元禄十年二月二十一日のところで、次のように記している。

「召玉ニ京ヨリ散衆ノ徒、福井四郎兵衛、小鼓六十石安田義兵衛、狂言三十石伴治左衛門、地謡四十石植村十助、地謡三十石岩室金七、物着三十石吉川伊兵衛、作物師二十石小沢庄七、五人扶持。」

次回は、福井四郎兵衛家についてふれることにする。もうしばらく、綱誠の治世期の能役者について、説明を加えてゆきたい。

参考文献「名古屋市史」「名古屋流能」「岩波講座能・狂言―能楽の歴史」「能・狂言事典」「能楽全書第二巻」

宝生英雄	金春信高	高安会
宝生英照	金春安明	西村欽也
名古屋巽会	金春欣三	飯富雅久
辰巳孝	金春三	杉江元
金剛永巖	春敲会	福王茂十郎
金剛永謹	金春晃実	京都・高安流
廣田後援会	廣瀬瑞弘	岡次郎右衛門
廣田陸一	本田光洋	宝生欣哉
廣田幸稔	喜多流十六世宗家	豊嶋十郎
菊扇会	喜多六平太	谷田宗二郎
後援会	和島富太郎	森田光春
廣田泰三	大阪喜多会	
廣田泰能	和島富太郎	
豊嶋能の会		
豊嶋三春		
金剛流		
松野恭憲		
松野洋樹		
二井栄逸		

青陽会式定能

八月四日(日)午前十時半始  
熱田神宮能楽殿

素田竹生 島 今村嘉男  
馬場 信至 加藤 保彦

仕舞道 明 寺近藤 幸江 地謡  
須部 敏彦 須部 敏彦

須部 敏彦 須部 敏彦

梅田 邦久

政 杉江 元 河村真之介 鹿取 希世

佐藤 友彦

武田宗治郎 五十回忌 追善  
武田太加志 七回忌 追善

鳳鳴会大会

九月二十三日(秋分の日)

午前九時三十分始  
熱田神宮能楽殿

番外 仕舞道 番組 正 三村 恵子  
社 若 武田 文志  
殺生 石 武田 友志

素田采

女 高橋すゑの 村上 郁子

織 飼 笹山 忠 伊藤 義郎

戸 木本 仁之 小敷 義郎

求 塚 矢野 義章 村上 清

卒都婆小町 大坪 重選 武田 志房 小川 明宏

生田敦盛 山本 清 河村真之介 鹿取 希世

後見 親世清和 地謡 高橋 一夫 藤井 千俊 小島 完治 武田 宗和 新井 和明 藤井 徳三 久 広

四方 箕浦さおり 同山 武田 友志 松本 千俊 小川 博久 小川 明宏 古橋 正三 藤井 徳三 山本 則直 山本 明直 木下 義国

素田安

間 山本 則直

楊貴妃 飯富 雅介 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

狂言 仙 師 野村又三郎 松田 高義

上 高安 勝久 吉田 定男 鬼頭 好信

附祝言 井上礼之助

〔当日券三千円〕 主催 青陽会

西行楼 山本 一 西村 欽也 河村総一郎 鬼頭喜太郎 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

難子玉 鑿石井 鏡子 河村真之介 鹿取 希世

難子花 籠 武田 孝子 寛 敏一 鹿取 希世

難子砧 長谷川京子 河村総一郎 藤田六郎兵衛

後見 親世清和 地謡 高橋 一夫 藤井 千俊 小島 完治 武田 宗和 新井 和明 藤井 徳三 久 広

小川 博久 吉田 明 西村 欽也 寛 敏一 助川 竜夫 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

上 西村 欽也 寛 敏一 助川 竜夫 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

後見 親世清和 地謡 高橋 一夫 藤井 千俊 小島 完治 武田 宗和 新井 和明 藤井 徳三 久 広

素田石 橋 浅井 一元 武田 宗和

番外 仕舞道 口 観世 清和 武田 志房

主催 武田 鳴 志 房 会

〒500-11 豊明市間米町敷田三三三-13 連絡先 松 井 弘

〔入場無料・御来場歓迎〕

〇五六二一九二一〇三三五



龍吟会

藤田六郎兵衛

名古屋市中区堀下二丁目一〇番九号 電話(〇五二)五七一五七六三

大倉源次郎

〒501 大阪府吹田市 江坂町五一七-二

谷口正喜

京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号

瀬尾乃武

〒171 東京都豊島区西池袋1-30-10-305

飯島佐之六

〒920 金沢市香林坊2-8-17

亀井俊一

保忠雄

実

前川光隆

前川光長

名古屋和泉会

狂言やるまい会

野村又三郎

〒460 名古屋市中区正木二丁目16-25 電話(三三三)七五五三番

青春流太鼓

青耀会

上田 悟

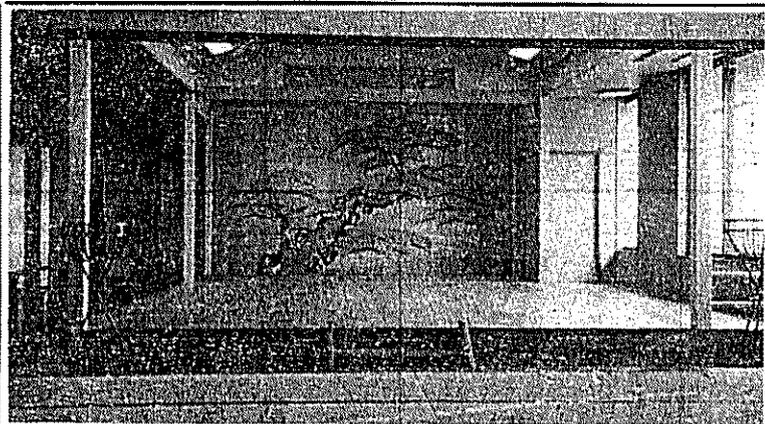
〒500-02 和泉市光明台三丁目15-25 電話(〇七二五)八五三二

大蔵狂言会

大蔵彌右衛門

大蔵吉次郎

大蔵彌太郎



幽玄の空間..... 大広間つき 能楽式舞台

知多半島の高峯山を背景に伊勢志摩を一望できる海辺に面し、純和風の趣きに満ちた「妙膳」に72畳の大広間をもつ能楽式舞台が完成しました。四季折々にまごころこめた海の幸のおもてなしとともに能会、ご社中会のご利用をお待ちしております。

知多半島 海 御宿 味はろ



(シーサイドプリンス新館) 愛知県知多郡南知多町大字内海小樹40 TEL <0569> 62-1311(代)

# 観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話03(3291)2488-9 振替東京3-3552  
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入  
電話075(231)1990 振替京都1-113

# 能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7 9 8 4

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年 1000円

郵送の場合 1年 1500円

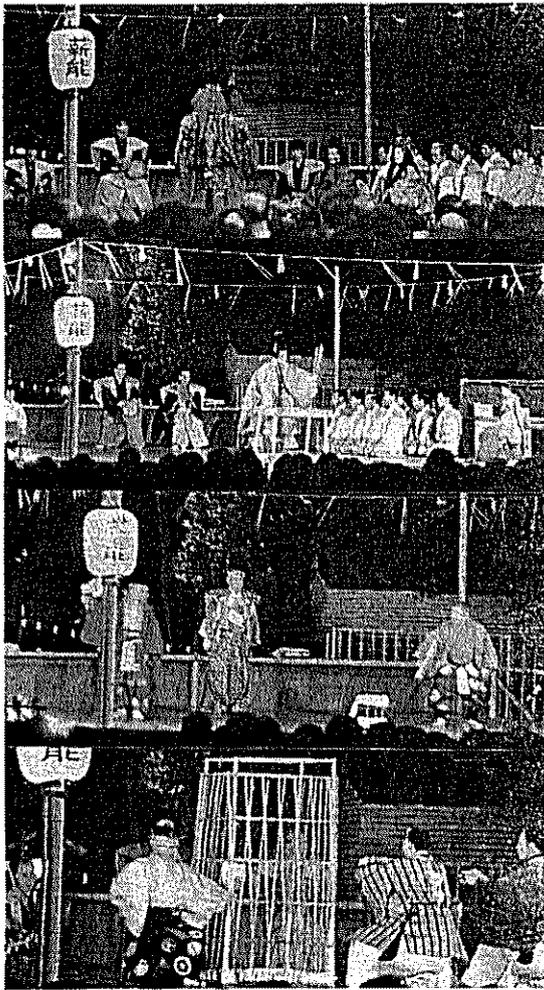
一部 90円

## 演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- 〔8月〕  
24日(土) 衣斐正宜後援会 (有料)(番組⑥面)
- 〔9月〕  
1日(日) 大衆能 (有料)(番組③面)  
7日(土) 鬼頭喜太郎師舞台生活60周年記念能(有料)(番組⑥面)  
8日(日) 観世会定式能 (有料)(番組⑥面)  
14日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)(番組⑥面)  
15日(日) 宝生会定式能 (有料)(番組⑥面)  
21日(土) 九草会定期能 (有料)(番組④面)  
22日(日) 和泉会 (来場歓迎)  
23日(祝) 鳳鳴会大会 (来場歓迎)(番組⑥面)  
27日(金) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎)  
28日(土) 中日文化センター芸能発表会 (来場歓迎)  
29日(日) 郁風会大会 (来場歓迎)
- 〔10月〕  
5日(土) 幽花会大会 (来場歓迎)  
6日(日) 名古屋泉楽会 (来場歓迎)  
10日(祝) 武田恵福会 (来場歓迎)  
12日(土) 猫柳会 (来場歓迎)  
13日(日) 邦楽会 (来場歓迎)  
20日(日) 幸楽会 (来場歓迎)  
26日(土) 清溪会 (来場歓迎)  
27日(日) 淡交会 (来場歓迎)
- 〔11月〕  
2日(土) 重陽会20周年記念会 (来場歓迎)  
3日(祝) 幸友会秋の会 (来場歓迎)  
4日(休) 観修会大会 (来場歓迎)  
9日(土) 濤華会 (有料)  
10日(日) 名古屋観世会定式能 (有料)

(演能変更の節はご了解下さい)



## 第26回名古屋新能

④から能「嵐山」「井筒」  
狂言「茶壺」能「安達原」

名古屋に市立の能楽堂を、という要望は、既報のように中部地区の能楽関係者、能楽愛好家の会を中心に、ことし四月から「建設請願署名運動」が進められてきたが、幅広い各界の共鳴を得て、十万人署名の目標をはるかに超え、

八月十日現在で約十六万人の署名が集計され、能楽堂建設への期待のひろがりを見せている。署名運動は能楽協会名古屋支部、能楽愛好家の会はじめ邦舞、邦楽、洋舞、演劇など約三十団体、芸術家、文化人など六十人の呼びかけ

で展開され、名古屋市、愛知県下はもちろん、岐阜、三重の東海各県、さらに東京、関西地区にまでおよんでおり、「国際都市・名古屋に市立の能楽堂を」のアピールが広がっている。署名は当初目標十万人が設定され、その達成は至難ではないかとの見方もあったが、わずか四カ月間に目標を大幅に上回り、十六万人を超える数字を達成したことに、能楽協会名古屋支部、西村欽也支部長、能楽愛好家の会世話人会・北村利弥代表は「皆様のひとかたならぬご理解、ご後援を得て目標をはるかに上回るこ

## 名古屋城に能楽堂を！ 署名16万人超える 幅広い各界の熱意 凝集

で展開され、名古屋市、愛知県下はもちろん、岐阜、三重の東海各県、さらに東京、関西地区にまでおよんでおり、「国際都市・名古屋に市立の能楽堂を」のアピールが広がっている。

## たつき新能

能「安達原」上演

岡崎竜城ライオンズクラブ主催の「岡崎たつき新能」は八月九日岡崎城二の丸能楽堂で午後六時半開演、酒席の盛会であった。演目は狂言「佐渡狐」(野村又三郎)能「安達原」(シテ泉喜夫、ワキ西村欽也)。後援岡崎市、岡崎教育委員会。演能の収益金は献眼、献賢運動の協力に当てられる。

## 名古屋JC「ターグ」賞 藤田六郎兵衛氏が受賞

この「TARG賞」は昭和六十二年から設けられ、①文化芸術部門②グローバル部門③地域開発部門でそれぞれ一人が選ばれ、能楽関係の受賞は始めての受賞である。また藤田氏は日本青年商工会議所が行っている「TOYOP大賞」の候補者として指名推薦されたことにより賞状と盾が贈られている。なお「TARG賞」の表彰式は九月三十日に名古屋・中区の東急ホテルで行われる。

## 伺 御 中 暑

<b>熱田神宮能楽殿 運営委員会</b> 熱田神宮福司 委員長 岡地幸雄 委員 一同		<b>名古屋観世会</b> 山本真賀 山本章弘 豊中市本町六丁目一〇一六		<b>誠交会 奥善助</b> 東京都世田谷区三軒茶屋二一〇一三 電話(〇三)三四三二二一六三三七番		<b>笙月会 中川雅章</b> 長浜市地福寺町八ノ二九 電話(〇五七)〇六三〇番		<b>洗心会 奥村富久子</b> 〒108 京都市左京区永観堂西町二〇 電話(〇七五)〇七六七番		<b>久田観正会 久田徹二</b> 大倉流小鼓 松月会 久田舜一郎 松田会 前野郁子 松田会 松山幸親 馬場信至 玉木孝男 〒162 名古屋市北区東水切町四ノ四三 電話(〇五三)九八一三三四三番		<b>芳韻会 稻生芳雄</b> 半田市船入町三十一 電話(〇五六)〇八一五		<b>観修会 祖父江修一</b> 多治見市日ノ出町二丁目 電話(〇五七)三六五六		<b>水雲会 水藤元三</b>		<b>賀水会 加賀敏彦</b> 〒163 名古屋市守山区森孝二丁目七〇九 電話(〇五三)七七七八九四五番		<b>猶惠会 熊沢恵美子</b> 名古屋市名東区平和ケ丘3-176 日車マンション四〇四		<b>幸福会 近藤幸江</b> 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三 電話(〇五六)四二五二九		<b>中日文化センター 謡曲・仕舞教室</b> (名古屋栄) 岐阜・四日市 <b>翠謡会 生駒里翠</b> 名古屋市名東区社ガ丘3ノ1503 電話(〇五二)七〇三三三三七番		<b>緑名会 田中武</b> 〒488 尾張旭市城山町三ツ池六一九八 電話(〇五六)一五〇三三〇四番		<b>重陽会 菊池重郷</b> 大山市大山宇相生五九一六 電話(〇五六)八四四一〇番		<b>清風会 今村嘉勇</b> 岩倉市東新町下境52-1 電話(〇五六)七三三八		<b>三村 恵子</b> 〒445 西尾市住吉町三十一 電話(〇五三)二五九四番	
---	--	---	--	---	--	--	--	--	--	---	--	---	--	--	--	-----------------	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--

# 夕顔日記

(120)

## 夕顔

えと文 二井栄逸

栃木県の南部地方では古くから夕顔栽培が盛んに行われていたようです。

七、八月頃、大きくなった果実を採取して回転させ、鉋(かんば)で皮をむき、細長いテープ状にしたものを、流のようにたらし、天日で乾燥するのです。私は若い頃より、巻きずしのしんにした干瓢(かんぴょう)が大変好きでした。

山々から吹き落ちてくる涼風にそよぐさまは、いかにも郷土色ゆたかな風景であったようす。

大分前になりましたが、門弟に栃木の人だったので、写生に連れていってもらったことがあります。

### 各地だより

#### 第3回 明石新能

8月6日 明石公園で

ことし第三回を迎えた明石新能(主催明石新能の会)は、八月六日、明石公園特設能舞台で、能「那那」(シテ久田徹二)半能「石橋」(シテ上田貴弘、ツレ・赤羽子)上田拓司、笠田昭雄、浦田保徳、狂言「磁石」(茂山あきら)仕舞「菊慈童」(大西智久)「天鼓」(浦田保利)「龍虎」(笠田裕、木内十三比古)を上演。

また、明石伝統芸能文化協会主催の第十三回協会公演は八月二十五日(日)明石市民会館大ホールで開催。

能楽は独吟、連吟、仕舞、狂言が上演される。午前十一時開演。入場料千四百円。

#### 名古屋新狂言

##### 大垣狂言の会

##### 和泉宗家後援会

和泉宗家・和泉宗家後援会は八月二十日、二十一日の両日、徳川公園特設能舞台で、「名古屋新狂言」を開催。ジャパンフェスティバル参加、シニクスピア狂言英国公演記念の上演。

さらに八月二十九日、大垣市文化会館で「第九回大垣狂言の会」を開催。和泉元弥の「釣狐」を上演。午後六時始。前売券五千円。

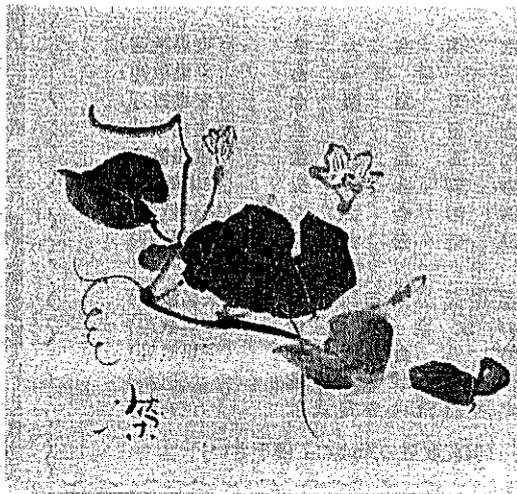
#### 鈴鹿新能

8月23日 能「井筒」(土知) 鈴鹿新能は八月二十三日(金)神戶城跡特設能舞台で行われる。

能「土知」(衣笠正直) 能「井筒」(宝生亮照) 能「清水」(山本則直) 仕舞「船坂」梅田邦久

主催 鈴鹿市新能実行委員会、鈴鹿市、鈴鹿市教育委員会。

源氏は其の後たびたびその女の許に通いますが、或夜、にわかになり、夕顔の花のようにはかなく死んでしまふという凄絶な物語であります。



この夕顔とは別にもう一つの夕顔があります。

これも門弟の家でのごとくが、其の日は気楽な研修の日でエッセイ・トークとしてお話をしました。

夕空がすみれ色にかける頃、ひっそりと静まりかえった庭にポツカリと純白のおよぶりの花が咲きました。それは全く突然で、ほんとかすかな音さえるのです。

五条あたりの半部屋に咲いた夕顔、研修会の庭に咲いた夕顔は同じ名前ですが、四、五年前から、源氏物語の夕顔はつる性の夕顔、研修会の時の夕顔は夜顔というところになりました。私も此の頃はどのようにに別別しています。

(平成三年八月六日夜)

#### わかさ会公演

わかさ会は、九月二十三日(祝)京都・観世会館で「哀調」「哀愁」

「哀調」(哀三題をテーマに公演する。能「教盛」二段之舞(シテ武田)

#### 人間国宝

#### 後藤得三氏 逝去

喜多流シテ方・重要無形文化財保持者の後藤得三氏は七月二十二日午後五時二分、心不全のため逝去された。享年九十四歳。

葬儀・告別式は二十七日午前十一時から東京都練馬区高野台三の

欣司、ツレ分林道治、武田晋、武田衛、ワキ岡次郎右衛門) 能「半部」立花供養(シテ吉井順一、ワキ谷田宗二朗) 能「船弁慶」前後之替(シテ武田邦弘、子方武田大尚、ワキ指取雅之助) 狂言「文荷」(茂山千之丞ほか) 仕舞「那那」(片山慶司郎)「井筒」(片山九郎右衛門)「善界」(杉浦元三郎) 午前十一時始、前売券五千円(当日券六千円)取扱い 京都観世会館(〇七五〇七七一六六一四) 検書店(〇七五〇七五二二一九九〇)十松屋(〇七五二二二二二二五四〇)ほか出演者宅。

東高野会館で執り行われた。喪主は長女長田美沙子さん。氏は明治三十年一月生れ。大阪市出身。十二歳で喜多六平太入門。格調高い四熟の技に幽婉の情趣に切れ味を秘め、昭和三十七年芸術院賞受賞、昭和四十五年人間国宝に指定、五十七年芸術院会員となった。同年海外公演にはパリで羽衣を公演。自宅は東京都保谷市下保谷四一二一九。 謹んでご冥福をお祈りします。

近藤 乾之助 〒170 東京都豊島区巣鴨五二一三三八	正風会 衣斐正宜 〒465 名古屋市昭和区御器所3-23-19 御器所パークマンション802号 電話(〇五二)八八二一五六〇番	衣斐正宜後援会 〒460 名古屋市中村区名駅三二六二六 平松昌彦方 電話(〇五二)五八六一二二〇番	佐野 由於 〒114 東京都品川区大崎五丁目一〇の四 五反田南ハイム一〇〇三 〒460 金沢市泉野町四丁目十二番二十四	倉本 雅 神戸市東灘区田中町一丁目13-26 本山アパマンイン 四〇一 電話(〇七八)四四一五四六五番	宝生 流 鬼頭 嘉男 名古屋市中区和区川名本町二ノ五二	吉田 俊彦 喜多流 山本 才 〒465 名古屋市千種区北千種3-3-10 合同宿舎千種東住宅30号 電話(〇五二)七二二一五七四番	竹腰 勝一 宝生 哲 〒270 松戸市牧ノ原2の1 市営住宅一の番号 電話(〇五七)八五一八一九〇番	司 宝会 名古屋市中村区名駅三二六二六 島田隆住宅三三〇 電話(〇五二)七三七二	金剛流 名古屋周屋会 岐阜周屋会 吉川 周子 〒460 名古屋市千種区西崎町三一六 電話(〇五二)七六一二二二五七	能楽講座 能と狂言に親しむ会 梅田 邦久 藤田 六郎兵衛	富原 富司 忠 〒465 名古屋市昭和区山里町七四 八事パークマンション五二五 電話(八三三)一〇三二番 小鼓教室 名古屋市中区栄 朝日神社内(丸徳池)	河村 総一郎 河村 真之介 〒465 名古屋市昭和区前山町一丁目三三 電話(〇五二)七六一四八八二 河村 大 〒602 京都市上京区仁和寺街道千本西入 コスモトヨタビル四〇二号 電話(〇七五)四六二四一一五	吉田 定男	高安流 岡同門会 清高 水康利 高坂 晴弘 森田 三郎 北野 耕三 塩田 弘 中川 湖 伊藤 久 清水 利雅 谷口 雅信	幸友会 幸友 能 福井 啓次郎 福井 良久 福井 良治 柳原 富司 忠	桂 後藤 孝一郎 会
-------------------------------	---	--	--	--	-----------------------------------	---	--	--	--	---------------------------------------	---	--	-------	---	--	------------

演 能 案 内

第7回衣斐正宜後援会能

八月二十四日(土)午後一時始  
熱田 神宮 能楽殿  
ご挨拶と講演 後援会長 神津善行

敦

衣斐 郷志  
水上 優  
小倉健太郎  
衣斐 正宜  
盛 飯留 雅介  
河村真之介  
藤井啓次郎  
藤田六郎兵衛

空

狂 宮  
山本東次郎  
山本 則俊

放下僧 宝生 英雄  
河村総一郎

葵

山内 崇生  
亀井 保雄  
上 西村 欽也  
高安 勝久  
山本東次郎  
後見 宝生 英照  
佐野 登

〔要員券〕  
当日券五千円、学生二千円  
名古屋市中村区名駅3-26-26  
電話(〇五二)五八六一・二二〇

第32回大衆能

九月一日(日)午前十時半始  
熱田 神宮 能楽殿

能 組

邯

鏡世流 龍  
手方 山田龍之介  
久田 徹二  
西村 欽也  
高安 淳二  
松田 高義

後見 小島 三津子  
今沢 美和  
地謡 黒田 八神  
加賀 敏彦  
梅田 邦久

金春流 仕舞

松 虫 加藤富貴子  
地謡 前田 茂正  
伊藤 幸雄

喜多流 仕舞

藤 戸 長田 鶴  
地謡 松井 郷

金剛流 舞臺子

井 筒 吉川 周子  
後藤孝一郎  
藤田六郎兵衛

和泉流 狂言

栗 焼 井上松次郎  
井上 靖浩  
後見 佐藤 友彦

宝生流 能

竹内 澄子  
葛 高安 勝久  
河村総一郎  
大野 誠

玉

後見 戸田 博和  
玉井 博和  
地謡 加賀山 敬治  
佐藤 孝一  
竹腰 勝一

観世流 仕舞

杜 若 三村 恵子  
地謡 加藤 幸枝  
近藤 恵子

和泉流 狂言

天 鼓 前野 郁子  
地謡 高木 美智子

観世流 能

醉 董 井上礼之助  
佐藤 友彦  
後見 井上 祐一

観世流 能

團三郎 中川 雅章  
鬼 王今村 嘉男  
十郎 加賀 敏彦  
五郎 高橋 敏一

夜討曾我

古屋 松山 幸親  
五郎 九本 博  
立衆 黒田 博  
立衆 八神 孝充

附 祝 言

後見 梅田 邦久  
前野 郁子  
地謡 須藤 保彦  
須藤 保彦  
須藤 保彦

主 催 能 楽 協 会 名 古 屋 支 部

後援 愛 知 県 ・ 名 古 屋 市  
前巻券二、〇〇〇円(全自由席)・当日券三、五〇〇円  
市内各ブレイガイド・能楽殿・出演各楽師宅

鬼頭喜太郎舞台生活六十周年 記念 能

九月七日(土)午前十一時始  
熱田 神宮 能楽殿

神

歌 観世 喜之 八神 孝充

高

砂 観世 清和 河村総一郎  
八段ノ舞 藤井啓次郎 藤田六郎兵衛

熊

坂 宝生 英照 山本 孝  
福井 良久 寺井 啓之

杜

若 瀬戸三津子  
近藤 幸江 鬼頭 宗久

船

弁 慶 塩津 哲生 牧野繁次郎

野

守 豊嶋三千春 小寺 佐七

山

姥 橋岡 慈観 助川 治

葛

城 金森 孝介 飯森 友春

龍

田 本田 光洋 表谷清一郎

小

塩 泉 嘉夫 徳田 与作

羽

衣 金剛 巖 河村真之介  
パンシキ 後藤嘉津幸 寺井 啓之

岩

喜多六平太 鬼頭 英二  
金春 信高 吉田 定男 鬼頭 好信

乱

双ノ舞 金春 安明 後藤 孝一  
後藤 孝一 鹿取 希世

桶

酒 井上松次郎 井上 祐一  
後見 佐藤 友彦

姨

捨 西村 欽也 観世 元信

朝

長 宝生 閑 寛 敏一  
鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛

呉竹会

寛 三 男  
寛 鉦 一

長生会

鬼頭喜太郎  
好 信

大般若 鬼頭英二

助川 龍夫

助川 治

朝日カルチャーセンター  
囃子教室  
小鼓 後藤孝一郎  
丸栄スカイル10階

栄能楽舞台

名古屋市中区栄五十六四  
電話(二六二)一一八三番

楽諷庵舞台

名古屋市中区滝川町四七七八三  
電話(八三三)七〇〇一 番

葵心庵舞台

尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二  
電話 〇五六一五〇二三四六番  
電話 〇五六一五〇六六九八番  
能楽台 電話 〇五六一五〇六六九八番

彰 諷 閣

名古屋市中村区植田西二一八〇二二  
電話(〇五二)八〇五三三〇一  
連絡先 名古屋市中村区鳴海町有松裏409  
電話(〇五二)六二二一四三三八

演能写真

ウシマド写真工房  
〒602 京都市上京区北野上七軒  
電話(三三三)一三四一 番

ビデオ撮影

西川 企画  
〒451 名古屋市中村区西区名駅  
21203 輪の内 小坂方  
電話(〇五二)五七一五八二  
〒460 岐阜市北野町2012  
電話(〇五八)九八六九番

日本能面巧芸会

名古屋市中区東区一丁目15番23号  
チサンマンション栄リバー  
ハイク八〇一 号  
電話(三三三)九五三・一〇九二

能 楽 の 友 社

〔お断り〕  
暑中廣告の掲載は紙面の都合にて勝手  
ながら七月号、八月号に分けて掲載させ  
て頂きました。願不同と併せ何卒ご理解  
賜りますようお願い申し上げます。

紅梅記

金剛、金春、能、朝日狂言会

今年ももう半年が過ぎた。六月末の宵月(旧暦五・二〇前後)が低くかかる。松葉の花が咲く。

まず、六月二日の山姥・大槻文蔵はみられなかった。これは文蔵氏の真価を問う一番であったので、まことに残念。どんな出来であったろう。今関西のシテ方で、長老を指して、みたい面々を少しくあげれば、片山慶次郎・山本勝一・大槻文蔵・金剛永謙(あひさのり)・金春源高(異美氏息)の諸氏である。時たまの花としばしばは(つか)む花とのちがいはあろうが、時々接してその内容充実を知ることにもまた楽しい。関西には東京とちがう楽しみと期待がある。その層はひろく厚く、尊重さるべきである。

六日観世会。賀茂・梅若盛義、運小町・観世喜之。どちらも結晶の固い美しさを展開して佳。賀茂は前シテ慶次郎、後ききびと鮮か。父鶴義氏の鮮かさは鋭と柔とを含んだが、盛義氏のそれは結晶の固さにゆえをみせる。運小町は、詩の中に男が女に抱く怨念を強く表わす。と言っても粗くはな

高氏能面研究会(佳作)。効果的。翌三十日金春能。新田二番。新作能。佐渡は金春能高作、ワキはなし。晩年の世阿弥を少し(孫娘、金春能高の娘)が弟子小太郎(トモ)に付き添われて、秋の一日、運路はるばると訪ねる。寂しい佐渡に明るさが射す。(紅梅記二月号関連、NHK謡曲放送)。夜を徹して語り合ひ、舞もみせ合う。「弘誓のうみに/法のふね/こがねの島のはのほのと/朝(あした)の空は茜さす(八ヶ里返し)」で別れたあと、笛が入り、大小だけのの中を立ちつくす。金島書の小文「世々のしるしに」が謡われ、合奏で結ぶ。今日の二番は共に合奏で終るが、その意味は異なる。世阿弥は老妻寿椿への加護、福路の安全、めぐり合ひの感謝を折つたのであろう。格調のある佳節。シテ本田光洋、娘は少年が扮し直面。後見信高氏。

金春源高(八ヶ里返し)の炎上は、一ノ松まで出て謡いはじめる。立ち姿から大きな美上の曲趣を汲み取る。後は切りの動き殊にあざやか。あれだけ大きく舞って而も崩れず。結び合奏も見事。狂言。長光(祐・松・弘)佳。なお共同社の録音(祐・松・弘)観世会)もおもしろかったので申し添える。

平成3年8・9月放送予定

- FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
[8月] 25日(日) 観世流「夕顔」山本真賀
[9月] 1日(日) 故人をしのんで(1) 観世流「粘」梅若万三郎
8日(日) 故人をしのんで(2) 喜多流「船井」喜多実・後藤得三
15日(日) 宝生流「俊寛」松本恵雄
22日(日) 観世流「井筒」片山九郎右衛門
29日(日) 宝生流「遊行」大坪十喜
TV祝日能(午前9時より教育テレビ)
16日(月) 日光輪王寺新能「小僧」観世栄夫「石橋」梅若盛義
23日(日) 故人をしのぶ「通小町」後藤得三 独吟「熊野」梅若万三郎「道成寺」桜間金太郎・森茂好

観世会定式能(四回)

- 九月八日(日) 十二時半開演
熱田神宮能楽殿
井筒 梅若六郎
指板雅之助 筑紫敏一
福井啓次郎 藤田六郎兵衛
間 井上礼之助
後見 武田邦弘 地謡 加藤保彦
山本勝一 高橋敏彦
祖父江修一 藤田六郎兵衛
小島一英 中川雅章

名古屋宝生会定式能(第35期)

- 九月十五日(日) 午後一時始
熱田神宮能楽殿
龍 玉井博祐
田 飯沼雅介 吉田定男
杉江元 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎
後見 竹内澄子 地謡 加藤保彦
平子 稲葉山 通夫
稲葉治行 石黒孝
稲川次郎 長巳孝

名古屋観世九臈会定例能

- 九月二十一日(土) 午後一時始
熱田神宮能楽殿
狂言 墨 塗 井上松次郎
丸 飯沼雅介 河村真之介
後見 佐々木勝 地謡 高橋保彦
高橋保彦 高橋保彦
高橋保彦 高橋保彦

名古屋能楽鑑賞会公演(第4回)

- 九月十四日(土) 午後二時始
熱田神宮能楽殿
狂言 大 名 野村万之丞 野村良介
梅田邦久 野村又三郎
卒都婆小町 中村弥三郎 山本博明
後見 武田欣司 地謡 柴田隆
片山九郎右衛門 清水寛二 野村四郎

名古屋観世九臈会定例能

- 九月二十一日(土) 午後一時始
熱田神宮能楽殿
狂言 玄 象 青木武弘 加藤保彦
後見 五木田三郎 地謡 高橋保彦
高橋保彦 高橋保彦

船渡 狂言

- 野村又三郎 松田信行
後見 井上礼之助
菊 慈童 武田宗和
松 風 山本勝一
女 郎 花 山本順之
阿 瀧 藤波重和

能盛

- 仕舞 大江山 衣斐正宣
丸 佐藤耕司 地謡 石黒孝
是 野 前 辰巳満次郎 吉田俊彦
久 飯沼雅介 筑紫敏一
西村勝久 福井啓次郎

女郎花

- 竹内澄子 鬼頭喜太郎
高安勝久 柳原富司忠
後見 鬼頭喜太郎 地謡 高橋保彦
高橋保彦 高橋保彦

能盛

- 仕舞 大江山 衣斐正宣
丸 佐藤耕司 地謡 石黒孝
是 野 前 辰巳満次郎 吉田俊彦
久 飯沼雅介 筑紫敏一
西村勝久 福井啓次郎

能盛

- 仕舞 大江山 衣斐正宣
丸 佐藤耕司 地謡 石黒孝
是 野 前 辰巳満次郎 吉田俊彦
久 飯沼雅介 筑紫敏一
西村勝久 福井啓次郎

能盛

- 仕舞 大江山 衣斐正宣
丸 佐藤耕司 地謡 石黒孝
是 野 前 辰巳満次郎 吉田俊彦
久 飯沼雅介 筑紫敏一
西村勝久 福井啓次郎

TEL 052-611-3659



◆水無月の舞台から◆

「観世会」「宝生会」「能を楽しむ会」  
「名古屋金春会」(佐渡)特別公演会

竹尾 邦太郎

「賀茂」シテ盛装・ツレ微二。濃い緑陰、清冽な流れを一セイから上歌にイメージする連時が上々で、ハ神に歩みを進ぶ身の、舞りのない心が如何にも満ち足りて、連時によくちみがある。そして、神寂びた庭に鮮やかに映える白羽ノ矢。それが霞わたたすまいだけに、却って原始の力強さを印象づけてワキに畏敬の念を起こさせ、返り、シテ・ワキ(飲也)問答の神妙もよい。アイ祐一、立シヤベリ・三段ノ舞の生真面目。

後場は先ず露払いの天女・雅章が舞う。袖捌きや扇の扱い少々粗いが、舞上げて更に地(保利・邦久ら)の詞章に添って舞う型の中、ハはずみとる装束を潤す、と扇で袖に水を掛け、その袖掲げや滴りを真近に見るような型に涼気を見せた。後シテは唐冠・赤頭(四手附)・泥飛出。舞袖は雷鳴の家快味よりはむしろ稲妻の切れの良い鮮烈味。ハ光り稲妻の、稲葉の露にも、と跳び上りさまの粗落シヤ、キリの、天によぶ登る姿そのまま、ハ神も天路に、と三ノ松へ墜行するところなど、目覚し

「千鳥」馬に曳かせた米の到着が遅い、とアド酒屋・礼之助の気が持たせるシテ太郎冠者・友彦。何とか策略を凝らし、酒を手に入れようとする努力はみられるが、一樽を巡る駆け引きのゲームに自らのめり込んで楽しむ、といった気分は少々不足。主・弘之との関係にゆとりが無い所為か。(38分)

「通小町・雨夜ノ伝」ツレ邦久。面深井・襟浅黄・白摺袴(露芝)・茶地無紅(秋草文様)唐織に浅黄縷水衣を着た。木の奥返し(喜久・邦弘ら)との掛合はさらさらと進むが、夏安居のワキ僧・宗二朗に素性問われるや、一瞬時が停まり、視線外すかに直すと面を伏せ、ハ恥かしや己が名、となるどころ、肩をすはめて消え

は首露道断、と第二次大戦中なら追撃し喰われ上演禁止もあったのではなからうか。

さて、シテ孝・ツレ雷四夫のコンビは思いっきり感情を押し殺し、芝居に置きぬ様式美の実現を目指してそれは或る程度成功したが、奈何せん直人物、子方(多田奈津子・早都子姉妹中々よくやっつた)との年齢差言うのではないが若い父親仲光のもつ客気のようなもの感じられず、冷静な古武士の印象拭いきれなかった。なお、男舞の途中、囃子が鎮まり左袖返すとツレを見込み、正中へ出て一呼吸。そこで囃子を落すと拾って正先へ墜行したが、吾子の首を刎ねた当て擦りの皮肉のようでも面白かった。(60分)

「鐘ノ音」鎌倉時代末、斯道中興の祖とされる鎌倉住の刀工、岡崎五郎正宗の鍛冶法になる刀剣は相州物と称し、弟子に名工数多輩出したという。されば息子の元服の差料銀のため、鋼の値を聞きにシテ太郎冠者・祐一を鎌倉に遣るアド主・松次郎。怪しいと思ながらも早合点して鎌倉の寺々鐘の音を聞きに行く太郎冠者は憎めない。

鐘楼は寿福寺が鐘柱で「コノ」と堅く、円覚寺はワキ柱で「バアン」と上調子。極楽寺は目付柱で「ジャン・モーン・モーン・モーン」の余韻縹緲で上々。最後は建長寺で、広い境内を探すと、「つー」とあれに在る「通り、一ノ松先の住。橋邊で傾くも珍らしく、音は破れ鐘の「ビシヤビシヤビシヤ」で、五山第一の面目が往々にみせる卑れた小賢しさが無く、だからこそ吐責はされても何れ主の覚え直ぐ戻るのであろうと思わせるほどの味があつた。

「半番」シテ和。前は何となら半番きくしくと柔らかさ見られず、はかなげな風情がなかつた。後シテは白長絹・緋大口・半番を押し上げるのは、観世の逆でシテの左側。後見に任せて型だけする観世と異なり、後見の持つ支竹にシテが左手添えて自分で開けるか具象であるが、支竹を探り、それに手をすべせたりで少々煩

い。ハ今も導き、とワキ雅介に向き、ハそぞろに、左袖でシオル刃の情態はクセ地(雅・博祐ら)と相俟って寂寥感があり、ハあの花折れと、と大小前が扇を開いて半部の下へ行き、花を受ける型は良かった。序ノ舞は、大輪の夕顔の花片、葉脈を透かせる葉を、涼風にそよがせるイメージ抽象化すると思うが、袖扱いに流麗さ不足の上、陰翳を表現する袖を放くことも無く、舞を平板にしていた。袖を被いて後退りに半部の下に入る型も当然なかつた(宝生では無いのか)。キリは、ハ半部の、と作物に入り、出る時同様後見の助けで自分で閉めた。(1時間18分)

「藤戸」シテ英照。前シテは曲見を掛けた。吾子を殺された深い悲しみの虚ろな表情が、いざ殺した当事者のワキ佐々木盛綱・敏也と対面するや、次第に自制心を失い、シオリを重なる度に心弱くなってゆく過程が、一転狂気の激情に昇りつめてワキに迫る描写が凄く、心うたれた。即ち、地(孝・雷四夫ら)の、ハ海士のこの世を去りぬれば、とがっくり安坐すると双シオリ。シオリ解くと、ハとてもの愛身、と左へ抱うように見、ハ亡き子と、と立つや、ハ同じ道になして賜はせ給へと、双手を掲げてワァァァというふう

に棒のようにワキに倒れかかった。それを無情にも強く払い除けるワキの毅然とした態度もまた立派だった。後シテは瘦男。ハ千尋の底に、と静かに沈んで安坐するところから、切地の具象的な型の連続にかけ、就中、ハ悪龍の水神となつて恨みをなさんと、とワキにつつと迫るところなど、英照手堅く見せて充実していた。(1時間11分・6月16日・宝生会)

「小鍛冶・白頭」「能を楽しむ会」も八回目。かつて、跡左衛門・幾三郎や当地の長老、仁三郎は金剛定期能があつたが、目下は今回のシテ宇高通成が後援会組織に乗り孤軍奮闘である。舞金剛の伝統を守る一方、語学に堪能と聞く通成は、外国人の弟子も取り立てて能の国際化にも尽力する。さて、前シテは小書で尉。地(三千春・恭恵ら)との掛合に草

ういえば、先代松間金太郎に贈ったという虚子作「奥ノ細道」のシテも唐帽子だったのが、入江美法の創作面・芭蕉を掛けて効果を上げたと聞く。そしてこれも、光洋亡父秀男が、昭和36年4月、第六回中日五流能で名古屋初演というのも因縁である。では、この曲のテーマは何か、と言えば、「景清」的人情譚では決してなく、ヒメの舞や自身の序ノ舞もむしろ肉付けに過ぎず、猿楽の奥義究めんため求道の方法論だということである。されば、謡を客観的に心に聴き、舞を客観的に心で視ること、即ち「離見の見」をくどく言うのである。とりも直さずそれは世阿弥を喝仰し、この道のバイブルとしたい作者の気持であるだろう。話が外れた。舞台は、真面の少年尚久君の達者なヒメの活躍が光り、ハ月に返す舞の袖、始まり、ハひたすら月に返す舞の袖、ハワキで終る序ノ舞に光洋陰翳の微妙を見せ、キリでは、ハいつしかに、と退つたシテが、ハ今宵限りの、と安坐して、ハ夜は更ける、感懐を反芻するところへ、扇々と一管(六郎兵衛)がアシライ、実に効果的だった。トメは打切で目付柱に一足詰めて放心佇立。ハ黄金の鳥のはのほのと、と微かにテラシ、ハ朝の空は茜さす、と一足引いて合掌しながら下居の後、返シに立って囃子がトメた。余韻上々。(1時間18分)

「葵上」シテ晃実。金地に枝垂桜風文様の豪華な唐織を並折れ艶姿。ハ華やかなりし身なれども、の詠嘆の深さは口唇震え如く、「今は打たで」と、とすくと立つタイミングが絶妙だった。後シテは、「如何に行者」、と右膝着いて睨め上げ威嚇するところ、ワキをたじたじとさせる迫力。全てにスケールの大きなシテ。(50分・6月30日・金春会)

幽玄の空間.....

### 大広間つき 能楽式舞台

知多半島の高峯山を背景に伊勢志摩を一望できる海辺に面し、純和風の趣きに満ちた「妙膳」に72畳の大広間をもつ能楽式舞台が完成しました。四季折々にまごころこめた海の幸のおもてなしとともに能会、ご社中会のご利用をお待ちしております。

知多半島 内海 宿 味とろ

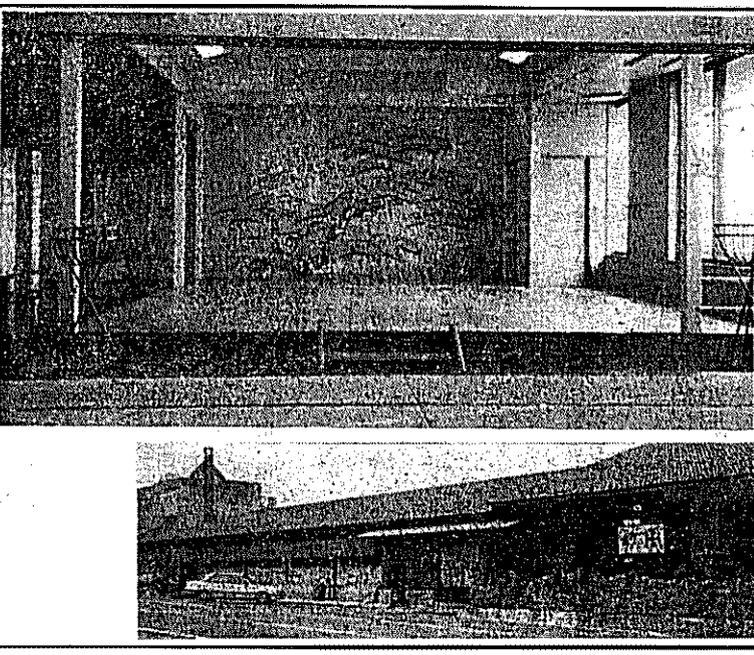
新 膳

(シーサイドプリンス新館)  
愛知県知多郡南知多町大字内海小栴40  
TEL <0569> 62-1311(代)

第10回 日本能楽面展

日本能楽面巧芸会

日本能楽面巧芸会は、「第十回新作能面展」を八月二十八日から九月一日まで名古屋博物館で開催する。愛知県教委、名古屋市長が後援、とくに今回は第十回を記



観世流・金剛流  
宗家本元  
榎書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話03(3291)2488-9 振替東京3-3552  
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入  
電話075(231)1990 振替京都1-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社  
名古屋市中区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464)  
電話 (731) 7984  
振替口座 名古屋 0-36393  
購読料 1年1000円  
郵送の場合 1年1500円  
— 部 90円

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

Table listing monthly events with dates and descriptions. Includes sections for September, October, November, and December.

名古屋市民芸術祭91協賛 伝統芸能鑑賞会

10月4、5日能「景清」と狂言

名古屋市民芸術祭協賛(文化基金事業)の一伝統芸能鑑賞会が十月四日、五日の二日間、名古屋市東区英の名古屋市芸術創造センターで開催される。

狂言共同社創立百周年記念 特別展と狂言の会

名古屋狂言共同社の創立百周年を記念して、「狂言装束と狂言」の特別展が八月三十一日から九月二十九日まで名古屋・東区の徳川美術館で開催される。

和泉流狂言大会

Table listing performers and roles for the Wakuha Ryū Kyogen Taikai. Columns include actor names and their respective roles.

追善 武田宗治郎 七回忌

九月二十三日(秋分の日) 午前九時三十分始 熱田神宮能楽殿

郁風会大会

九月二十九日(日)午前十時始 熱田神宮能楽殿

富士太鼓

Table listing performers and roles for the Fuji Taiko event.

名古屋幽花会秋季大会

十月五日(土)午前十時始 熱田神宮能楽殿

# 秋月雅日記

(121)

## 秋茜に出逢うころ

えと文 二井栄逸

九月になると、白露(はくろ)はすぐ訪れて参ります。仲秋といふのは白露(九月七日頃)から寒露(十月八日頃)までの時期をいいますが、山の秋は里より早く、九月も末になると、冷えこんでまいります。霜が降りますと、たかとうだいが美しい照葉になつたり朝霧がそこはかとなく緑側にはいつたてたり、昔、鈴鹿の山に籠つたことが思い出されてなりません。

又、白露が過ぎる頃になると、もう一つ楽しいことがあります。それは澄んだ空にいかにも似合う赤とんぼが山から降りてくることです。赤とんぼにも種類は多いのですが、その中でも鮮紅色の装いで知られるのは秋茜(アキアカネ)です。六月下旬頃、池等で羽化して高地に移り、夏をやり過ぎて秋の訪れと共に山から群れをなして降りてきます。

稽古には練習曲以外に小督のサン声から二の同までの独吟謡の特殊な稽古をしたいと思います。

嵯峨野の隠れ家にわび住いをする小督の周が琴をひき、虫の音を聞き、秋草に高倉の院をしのぶ破曲文が随所にありまして、九月の

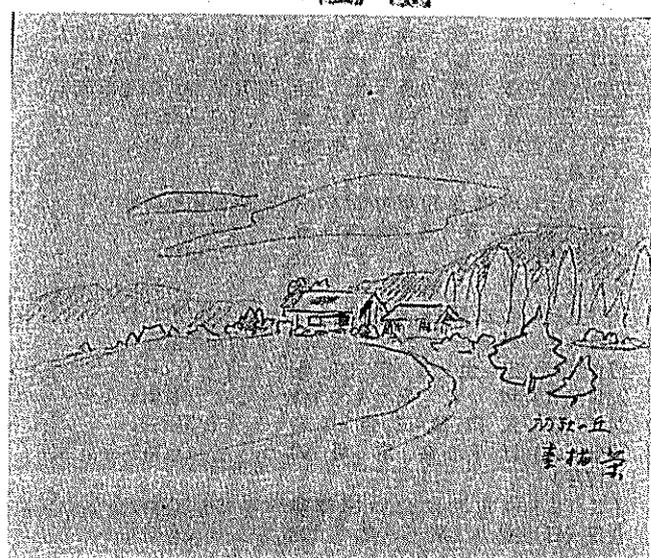
## 吉川周子師岐阜市立女子短期大学定年退職記念

### 金剛流能楽大会

11月10日 岐阜市中央青少年会館

金剛流シテ方、吉川周子師は、岐阜市立女子短期大学教授として多年にわたる教職にあたり、このたび定年退職にあたり、これを記念して、錦秋十一月十日(日)岐阜市京町の岐阜市青少年会館大ホールで「金剛流能楽大会」を開催、吉川師は能「井筒」を所演する。

吉川師は、短期大学の教職を三十五年間つとめ、そのほとんどを岐阜市立女子短期大学の教育に携わり、その間、能楽クラブをつくり、多くの教員を送り出している。定年退職記念の能楽大会が催されるにあたり「人間形成の一助に」とただひたすらに指導に当たってきました。専門の学問と能楽の接点をいろいろとあきらめて教育者として幸せであり感謝して



をこらすのは秋茜(アキアカネ)でしょう。六月下旬頃、池等で羽化して高地に移り、夏をやり過ぎて秋の訪れと共に山から群れをなして降りてきます。

稽古には練習曲以外に小督のサン声から二の同までの独吟謡の特殊な稽古をしたいと思います。

嵯峨野の隠れ家にわび住いをする小督の周が琴をひき、虫の音を聞き、秋草に高倉の院をしのぶ破曲文が随所にありまして、九月の

後藤孝一郎、大波・吉田定男、間野村信行) 後藤孝一郎、大波・吉田定男、間野村信行) 後藤孝一郎、大波・吉田定男、間野村信行)

舞台からの名演技を名筆で描く……

二井栄逸師画抄集 ▶ 予約締切迫る ◀

## 92 能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー1992年版。B3(タテ51.5cm×ヨコ38.0cm)表紙とも7枚の新作美麗カレンダーです。

- ◎ 予約特価 1部 1500円、郵送の場合送料とも1部1850円(2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律500円、例・3部の場合送料とも5000円)
- ◎ 予約申込み期限10月20日(それ以後は1部2000円、但し部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい)
- ◎ お申し込み方法 ハガキで部数明記のうえ当社へお申し込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。(電話での受け付けはいたしませんのでご理解下さい)

申し込み先 能楽の友社  
〒464 名古屋市中区千種区千種2-18-18  
振替口座 名古屋 0 - 36393

## 名古屋泉楽会秋季大会

十月六日(日)午前十時始

主催 名古屋泉楽会(名古屋・岐阜) 李川会、岐阜市立女子短期大学、能楽クラブ、吉川周子、後藤、岐阜市立女子短期大学、岐阜市教育委員会、岐阜県芸術文化会議。

素舞野	宮	波方 晃	三上 文夫
半	藤	岡本 耕蔵	盛クセ 小沢 宣子
舞	藤	和代 千代	舟 中島 佳子
百	村	村川喜久子	河村真之介 帆足 正規
三	井	津田 碩雄	宮崎 晃吉 長谷川宏之
舞	松	比江島孝子	河村総一郎 帆足 正規
阿	浦	石原 雅子	河村光寿 帆足 正規
鼓	西	村 欽也	河村総一郎 帆足 正規
天	野	守	片山 伸吾
附	祝	言	主催 名古屋泉楽会
〔御来場歓迎〕			片山 慶次郎

## 武田謡楽会秋季大会

十月十日(祝)午前九時十五分始

主催 名古屋泉楽会(名古屋・岐阜) 李川会、岐阜市立女子短期大学、能楽クラブ、吉川周子、後藤、岐阜市立女子短期大学、岐阜市教育委員会、岐阜県芸術文化会議。

素舞野	宮	波方 晃	三上 文夫
半	藤	岡本 耕蔵	盛クセ 小沢 宣子
舞	藤	和代 千代	舟 中島 佳子
百	村	村川喜久子	河村真之介 帆足 正規
三	井	津田 碩雄	宮崎 晃吉 長谷川宏之
舞	松	比江島孝子	河村総一郎 帆足 正規
阿	浦	石原 雅子	河村光寿 帆足 正規
鼓	西	村 欽也	河村総一郎 帆足 正規
天	野	守	片山 伸吾
附	祝	言	主催 名古屋泉楽会
〔御来場歓迎〕			片山 慶次郎

四代目尾張藩主徳川吉通は、誠の十番目の子供で、綱誠の死去にもなつて、家督を継ぐこととなる。治政期は、元禄十二年七月十一日(一六九八)から正徳三年(一七一三)七月二十六日の十四年間である。この治政期の幕府將軍は、綱吉・家宣・家継にまたがっている。

綱吉の能狂いは、相変わらず統一ており、元禄十四年九月十九日の「徳川実紀」には、猿樂者西村庄右衛門能重以下七名を、廊下番として召し抱え、城中の私的な演能を勤めさせている。

同じ元禄十四年の十二月にも、猿樂者秋岡勘兵衛某以下五名が廊下番として召し抱えられている。宝永三年四月十日には、「猿樂幸五郎兵衛某、倉谷武右衛門武正、和田安兵衛持義召出され廊下番に加へらる。幸は宇治、倉谷は福田と改む」とある。表面は、武士として取り立てるために、猿樂者の名前を武士らしく改めることもしたようである。幸五郎兵衛某は、幸流小波の方の先祖が、宇治猿樂の出自であることから、宇治と改名したのである。同年四月二三日にも、「狂言師馬場弥一郎幸利、名女川六右衛門政章召出され廊下番に加へられ、馬場は平野、名女川(なめかわ)は近藤と改む」と記されている。

外曲のみを集めた謡本が刊行されるのも、この時期に謡曲に対する関心が高まっていたことを、物語っている。

綱吉の治政期の大きな出来事として、元禄十五年十二月十四日の赤穂浪士の討入りである。元禄十六年二月の「徳川実紀」には、「此月前々も令せられしごとく、当世異事ある時、謡曲・小歌につくり、はた、梓にのほせ売ひさぐ事亦停禁すべし。堺町木挽町戯場にても、近き異事を擬する事なすべからずとなす。」と記されている。当時は、人々の注目する事件を、謡曲につくり、小歌にしたり、時には、舞台で演じて、諷刺したりもしたようである。なお、堺町は、江戸中村のあった場所、事件落着後十二日に、赤穂浪士に因んで「暗留我夜討」を演じ、三日目、山村座のあったところで、元禄十五年三月に、浅野長矩の刃傷に因んだ一幕を、「東山栄華舞台」で演じている。

# 尾張藩の能の歴史(七)

## 辻 宏一

綱吉の宝生流好みも相変わらず続いており、その影響からか、加賀の前田家は、元来は、金春流が主流であったが、元禄五年(一六九二)に、宝生大夫九郎友春の次男、吉之助(後に嘉内)を、加賀藩の江戸の大夫として召し抱えてから宝生の勢力が、次第に金春を圧倒するようになる。

尾張藩でも、始めは、金春流が主流であったが、四代尾張藩主吉通の治政期に入つたが、元禄十六年に、元来は、金春流シテ方であった田中半平を、主命によって宝生流に転じさせている。以後、尾張藩では、金春流と宝生流が同格になって演じられるようになる。

もっとも田中半平は、金春流シテ方であった当時から、その実力は認められており、父田中源之丞と共に、藩主の寵樂の師であったようである。

元禄十五年十一月十八日の江戸

源太 土細 シテ連山十郎左衛門 夫(藩主吉通) 大鼓山村三太夫 小鼓間嶋主殿 大鼓野原与治之助 笛石川一学

源太 逆巻 シテ多羅尾又四郎 小鼓千村又作 大鼓山村三太夫 小鼓花子 安田理香 二人持小川忠治郎 柿山伏 宮野登元

源太 記されている。藩主吉通自身、このシテや、土細のワキを演じているようである。臣下の中にも演能の上手がいたであろう。

元禄十六年七月九日の江戸屋敷での御能は、尾張藩における、宝生流の勢いの強さを示す番組になっている。『蜀錦籠中記』

狂言 唐入相換 八右衛門 備弁慶 シテ宝生嘉内 大鼓太右衛門 小鼓孫三郎 小鼓新九郎 狂言 子益人 八右衛門 松風 シテ宝生太夫 ワキ彦太郎 大鼓三郎 小鼓清六 笛忠二郎

狂言 墨ゆり 次兵衛 道成寺 シテ宝生太夫 ワキ権右衛門 大鼓孫三郎 小鼓新九郎 太鼓左吉 笛兵衛

狂言 子益人 八右衛門 俊寛 シテ御世太夫 ワキ彦太郎 大鼓七左衛門 小鼓四郎兵衛 笛清兵衛

望月 シテ半平 ワキ又三郎 大鼓三介 小鼓九郎三郎 太鼓源兵衛 笛忠二郎

御中入 小原御幸 シテ宝生大夫 ワキ又三郎 大鼓一郎兵衛 小鼓新九郎 笛清兵衛

狂言 比呂厄 八右衛門 照君 シテ八左衛門 ワキ宇右衛門 大鼓太兵衛 小鼓喜兵衛 太鼓十兵衛 笛理兵衛

狂言 田植 加左衛門 鳥帽子折 シテ半平 ワキ忠蔵 大鼓三郎 小鼓忠兵衛 太鼓源右衛門 笛理兵衛

狂言 若市 八右衛門 乱 シテ御世太夫 ワキ宇右衛門 大鼓一郎兵衛 小鼓清六 太鼓三郎左衛門 笛庄兵衛

宝生流四番、御世流三番、田中半平二番(宝生流か)、金春流一番である。

田中半平は、宝生大夫、御世太夫と肩を並べて演じているのである。

# 猶恵会秋の大会

十月十二日(土) 午前十時始

祝賀記念会(六) 十月十三日(日) 午前九時始

舞臺	舞臺	舞臺	舞臺
高砂 三口謙介	梅田邦久	松野あい子	梅田邦久
後藤孝一郎	梅田邦久	後藤孝一郎	梅田邦久
河村真之助	梅田邦久	河村真之助	梅田邦久
助川寛夫	梅田邦久	助川寛夫	梅田邦久
高砂 三口謙介	梅田邦久	高砂 三口謙介	梅田邦久

### 平成3年月9・10月放送予定

FM船橋鑑賞 (午前8時~9時)

月	日	演者	楽師
9月	22日(日)	世流「井流」	高橋片山九郎
9月	29日(日)	宝生流「遊柳」	高橋片山十郎
10月	6日(日)	喜多流「景清」	栗谷菊之丞
10月	13日(日)	世流「江口」	栗谷菊之丞
10月	20日(日)	宝生流「鉄輪」	武田喜永
10月	27日(日)	世流「梅枝」	藤井徳三

TV祝日能 (午前9時より教育テレビ)

9月23日 故人をしのぶ  
「通小町」 後藤得三 独吟「熊野」 梅若万三郎  
「道成寺」 桜間金太郎・森茂好

10月10日 日光輪王寺新能  
「小」 世流「観世」 栗谷寛夫  
「石」 世流「観世」 栗谷寛夫

(放送予定につき変更の節はご理解下さい)

### 幸 謡 会 大 会

十月二十日（日）午前十時始  
熱田神宮能楽殿

附 祝 言  
主 権 幸 近 藤 幸 江 会

奏 隔 羽 衣	光田美津子	野村菊代	奏 隔 清 経	稲葉 和	後藤孝一郎	取 取 希世
舞 舞 子	稲葉 和	後藤孝一郎	半 菊	川越 糸子	河村真之介	取 取 大郎兵衛
富士太鼓	小島 照子	河村真之介	独吟屋 山 嶋	杉浦 則行	後藤孝一郎	取 取 大郎兵衛
舞 舞 子	源氏供養	上田 千代	舞 舞 子	田中 米子	後藤孝一郎	取 取 大郎兵衛
山 姥	立廻り	河村真之介	舞 舞 子	若 簡	前田 鈴子	取 取 希世
杜 若	中根 麗子	大見富美子	舞 舞 子	融	石川 晴子	取 取 希世
奏 隔 弱 法師	小林 俊雄	小森 辰雄	舞 舞 子	恋 重 荷	川越 糸子	取 取 希世
仕舞 采	小林 俊雄	小森 辰雄	舞 舞 子	花	菅 小森 辰雄	取 取 希世
奏 隔 定 家	小野 喜子	石川 晴子	舞 舞 子	菊 慈 童	杉江 元	取 取 希世
俊 寛	加藤千代子	川淵 泰子	舞 舞 子	菊 慈 童	杉江 元	取 取 希世
番外 舞 舞 子	加藤 幸枝	地蔵	舞 舞 子	菊 慈 童	杉江 元	取 取 希世
舞 舞 子	泉 嘉夫	村井 邦子	舞 舞 子	菊 慈 童	杉江 元	取 取 希世

（御来場歓迎）  
電話（表）二一五二九  
電話（裏）二一五二九  
岡崎市鴨田本町十一ノ三

### 葉月の舞台から

#### 盛夏（文月・葉月）の能と 狂言あれこれ （その1）

竹尾邦太郎

「女郎花」シテ胸踊直也。群生する女郎花の一本を土塵に折り取るうとするワキ旅僧（飲也）を谷め立て、古歌の応酬のうちに素性探るかの問答に少々舞みがつき、しゃきしゃきとした老体の印象だった。

後シテは面郎郎。浅昔単狩衣の脇口からちらりと覗く紅白段厚板に伊達っ気があり、ツレ妻（保彦）の郎がたぐった顔に、邪淫の悪鬼に責められる幻覚の中で、へたへたとして行き登れば、と合膝二つするも徒らに嗚りだけ。拗ねられたシテ頼風の困惑が端的に現れたキリに精彩があった。地頭は坂真次郎、よく統率していた。（1時間20分）

も堂に入る。（25分）  
「安達原」シテ喜之面深井。作物を出ると、後手では無くして戸に向き丁寧に閉めた。この細心が以下の準備の端々、例えは昔から今への長い歳月を糸を繰る所作になぞらえるところに見え、刻々の氣持の有り様が微妙だった。へんひ明石の、激憤に駆られた精神輪の廻し様や、へ音のみ独り鳴きも、細かす、安坐双シオりの歌の様子も、中入の「や」はさり気なく、不安は一ノ松に行きかけてつんぬかぬ様に留る。思案時、疑心も切るとに足早に入るところもよかつた。

後シテは白蛇信に青地縫箔（鱗に三巴文様）腰巻で、その鱗それかあらぬか、三ノ松で面切り、千鳥掛に出るところは舞首持ち上げるやするすると滑るよう、ワキ（勝久）との攻防の進退の爪先利いた運ぶも蛇体を思わせた。（1時間25分）

ませる。野村耕介氏（狂言）監修。まず大事な場面転換にはヒナリキ（雅楽）が演奏されて効果的。また笛、太鼓、小鼓が歌われ、舞が舞われる。田楽のサラサも。田楽法師（六月）も演奏能の人々も正成の姉花夜叉は猿樂の一団を率いて花を飾り、八月には服部某（ナツカ）が花夜叉と通小町（深草ノ少将）を舞う。服部某は、尊氏ノ庶子不知識丸（いざやまろ）を率んで今は亡き藤夜叉と姉弟仲の石八いしに、若い女面を打ってほしいと頼む。石は藤夜叉を女面に写し、いと答える。もう猿樂能の時代（世界）である。

「自然居士」觀阿弥作の原典の見直しで説法の詞章を旧に復して追加した所謂「古式」の演出。アイ（又三郎）口開から呼出してシテ（四郎）が出る。小喝食のきりりとした風貌は涼やかで、濃紫水衣に黄色大口の配色も鮮やかに種（いき）を感じさせる。この種を一曲の主調となつて底流し、義を見てせざるも勇なきなり、の血気が存分に發揮されて力満だった。人質には人質の論理、力方（山中雅志君好演）を廻り善と悪との「二道」に極つて、扇でハッタと膝を打つところは我と我が身を奮い起したる意気込みで、説法きつと切り上げてワキ人質（開）を追うシテに胸が透く。シテ、ワキ問答は、互いの明晰な詞の応酬が小気味よく、シテの一種リズムを持つた歯切れのよさがワキの喰りを伴った語氣に拮抗して、言葉が本来持っている力、動きを再認識させて出色の現在物となった。物着後の悪徳の苦慮は、中ノ舞の後、ワキの皮肉なふるりな「余りに舞が短うて見足らぬは如何に」を受けて舞うクセ舞に、平常心で對抗する規矩の正しい爽快さがある。非凡。観客からトメまで、四郎の清涼な姿は些かの揺ぎもなかつた。地頭文蔵、唯子方は六郎兵衛、百司、総一郎、後見は善滋・裕久。（1時間12分・7月13日・野村四郎の會）

「文蔵」食べた物をどうしても思い出させようとする主・弘之だが、当の太郎冠者・松次郎は恐縮こそすれ事の成り行きに身を任せているだけ、といった雰囲気が出ていた。四角四面の弘之と円い松次郎との取り合わせの妙。（29分）

「地蔵舞」擬を楯に宿を斬られたシテ旅僧・弥右衛門。方便を以て宿を借るう、と先ず笠を預からせ、しかる後に地蔵の借地権をその笠の下に主張して入り込むという種気である。そこが主・吉次郎の氣に入らぬ、酒は飲まぬが取り分けはよからう、などと生真

の、何かにつけて息の合った行動が微笑ましい。辛い労働も慰みの小謡が労働歌代り、見舞う主・礼之助が持参の酒に疲れも忘れ、酒が入れば更に陽気になる道理。引くもの尽しの小謡に小舞の連舞と、実りの秋を謳歌する百姓風俗の一端を見る思いである。日が落ち、疲れて寝入った二人に迎える主が声を掛けるキリ。「苦しうない」を振り切り、酔歩「こゆるさい」を繰り返す。狂言師の会には見んぬき、因に獲物の少ないのを愛松、逆を肥松と言いつた。（40分・7月14日・朝日狂言会）

「訂正」本紙八月号、「水無月の舞台から」の中で、六月三十日演「佐渡」の笛・藤田六郎兵衛とあるのは、鹿取希世の誤りにつきお詫びして訂正します。

### 紅梅記

NHKの太  
平記、青佳  
自伝下巻の  
こと

八月十一日夜虫（おろぎ）が鳴く。この前後立秋。夏の演能も盛ん。そして九月、秋の能（朝長・徳法、卒都婆小町）を迎える。

まずNHKテレビ・太平記のこと。六月舞台が鎌倉から京に移り八月中旬鎌倉に戻る。八月十八日の放送がこれからの展開のものとを種々含んでいた。高時自刃の場は、西洋風だが、庄巻（高時・片岡鶴太郎、好演）。高氏が尊氏王が叙覧に供せられる。明るい光景。また原作の始め（第一巻）には琵琶法師を志し、母に伴われて京に上る少年覚一が登場するはずであるが、これは割愛。

「夏之夜」の結び「夏の夜の怪物（か）は狂言で云々」おもしろい。九月新作（十二夜）の英語による英田公演の成功を祈る。これはジャン・フェスティバル九一に参加のため。なおこの秋は梅若研能会（万紀夫氏に浦田保利・茂山真吾諸氏）が英國（ジャパン・ソサィエティ）創立百周年記念）とモスクワを訪ねる由。

二四日衣更直後援能会。教態を舞った衣更氏は本人出色の一番である。格調とか勇ましさとか、何となく舞い揺るが光る。能井保雄氏の奏上は前シテ秀逸。やや重厚かつまきりよし。おくれたが、宝生英雄氏は一調音（大鼓河村総一郎）めずらし。山本東次郎氏の狂言空襲。父上（故人）の固く引き締まった味をたたえた狂言芸に比べると、どこかのびのびと大胆に運ぶ。中途少し騒ぎすぎたが（こはおとなしくてもいい

「観衛会秋の会」  
10月10日 栄能楽舞台  
名古屋観衛会（山本勝一師主宰）は十月十日（祝名古屋市中区栄五）の栄能楽舞台で秋の会を開催する。午前10時始。御来場歓迎。  
素謡「菊慈童」（稲葉子子）

「半藤」（杉野伸江）「田村」（石黒鏡子）「藤戸」（水野たつ子）「大原御幸」（足立奈々子）「砂」（伊藤孝子）「井筒」（山崎栄治）「娘捨」（川久保彰礼）「安宅」勤進（山中節子）ほか仕舞、独吟など十四番。名古屋正花会（山本博通師）共催。

の思いの深きなど広い人間観、文化のみ方の充実と心打たれる。「あ」とが「殊」に佳。「達観の人」である。

おくれたが、表紙には金のこま犬（「呼八うん」の方、上巻は「阿」の方が刻まれ、杉本健吉画伯の肖像画（上部）が頂相（ちんそう）の如く載り、貴重な写真も多数。わが恩師谷川徹三先生とは多大な学問での熟知であったことを知る。また秋五氏は八高時代、わが主治医毛利孝一医師より一期上、今も親交ある由。

さて表紙を開けば、見返し裏の方もあわせて明るく宗教的な画で飾られる。美し。

発行能樂の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464) 電話 (731) 7984 振替口座 名古屋 0-36393 購読料 1年1000円 郵送の場合 1年1500円 一 部 90円

若い御二人の門出に ふさわしい結婚式場 名古屋若宮八幡社 各種会合や宴会にも御利用下さい (駐車場完備) 名古屋市中区栄3丁目35-30 電話(241)0810

能樂の友

金春宗家「翁」上演

福井家・名古屋三百年記念

11月9日 濤華能

小波方福井啓次郎師・幸友会主催の「濤華能」は、きたる十一月九日熱田神宮能楽殿で催されるが本年はとくに福井家初代の福井四郎兵衛友貞が元禄四年(一六九一年)十一月に、尾張徳川家二代藩主光友卿が大納言昇進の祝賀能に出動のため来名してから三百年に当り、これを記念するとともに、名古屋市民芸術祭の別協賛公演とし、金春流宗家・金春信高師による「翁」、本田光洋師の「船弁慶」

能樂堂建設請願 署名19万人越える

名古屋城に市立の能樂堂を、の要望を結集する建設請願署名運動は、八月下旬で十六万人に達したが、その後さらに愛好者各団体からも続々と集められ、十月十日現在で十九万九千八百人の署名に達し、当初の十万人目標の二倍におよぶ記録的な数字

能偶田川上演

11月16日瀬戸市文化センターに親しむ会では、日本に出

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

- (10月) 20日(日) 幸 福 会 大 会 (来場歓迎) 26日(土) 清 瀾 会 大 会 (来場歓迎) (番組①面) 27日(日) 秋 季 淡 交 会 別 会 (有料) (番組①面) (11月) 2日(土) 重 陽 会 20 周 年 記 念 会 (来場歓迎) (番組①面) 3日(祝) 幸 友 会 秋 の 会 (来場歓迎) 4日(休) 観 修 会 大 会 (来場歓迎) (番組②面) 9日(土) 濤 華 能 (有料) (番組③面) 10日(日) 名 古 屋 観 世 会 定 式 能 (有料) (番組③面) 16日(土) 具 竹 會 定 式 能 (来場歓迎) (番組③面) 17日(日) 宝 生 會 定 式 能 (有料) (番組④面) 23日(日) 和 泉 會 (有料) 24日(日) 久 田 銀 正 會 大 会 (来場歓迎) 30日(土) 青 陽 會 定 期 能 (有料) (12月) 1日(日) 歳 末 助 け 合 い 協 賛 能 (有料) 8日(日) 壺 泉 會 能 (有料) 14日(土) 久 田 徹 二 の 會 (有料) 21日(土) 名 古 屋 能 楽 鑑 賞 會 別 会 ・ 狂 言 (有料) [平成4年1月] 3日(金) 能 楽 協 会 名 古 屋 支 部 開 初 式 (関係者のみ) 11日(土) 学 生 能 の 會 (来場歓迎) 15日(祝) 名 古 屋 清 瀾 會 大 会 (来場歓迎) 18日(土) 青 陽 會 定 期 能 (有料) (演能変更の節はご了解下さい)

豊春会秋の能

10月20日 金剛能楽堂

豊春会(豊鶴三千春師主宰)の秋の能は十月二十日、金剛能楽堂で催される。能組は次のとおり。一調「遊行柳」(根本昌三、前川光長) 舞囃子、鶴也(豊鶴訓三) 狂言「寝音曲」(茂山千之丞、松本薫)

秋の清謡会

十月二十六日(土)午前十時始

熱田神宮能楽殿

Table listing performers and roles for the 'Autumn Clear Song' event. Roles include Soloist, Chorus, and various musical parts. Performers listed include names like 須藤源氏, 須藤千晴, 須藤英二, etc.

秋季淡交会別会

十月二十七日(日)開演一時

熱田神宮能楽殿

Table listing performers and roles for the 'Autumn Light Conversation' event. Roles include Soloist, Chorus, and various musical parts. Performers listed include names like 須藤源氏, 須藤千晴, 須藤英二, etc.

重陽会二十周年記念大会

十一月二日(土)十時始

熱田神宮能楽殿

Table listing performers and roles for the 'Double Autumn' anniversary event. Roles include Soloist, Chorus, and various musical parts. Performers listed include names like 須藤源氏, 須藤千晴, 須藤英二, etc.

# 十月雅日記

(122)

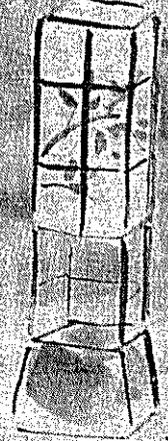
## 有り明け

えと文 二井栄逸

有り明けや 浅間の霧が 膳にはう

これは一茶が江戸から郷里の借州へかえる旅中の或日、早朝、宿の食膳につくと、部屋からまだ空に淡く残っている有り明けの月が眺められ、間近に見える浅間山の霧がすわっている食膳のあたりまで這うようにして流れてくる情景をよんだものであります。

旅の馳走に有り明かしおくと、いったん風情は今の宿では味わえません。今の有り明け行燈は、ともしびではなく、電光でありますから、ゆらゆらとうすれゆく夜明けの情趣は出てまいりません。



稽古を終えて、奥三河にある宿にいたのが夜の一時前、頼まれたいたエッセイの原稿をかき終えたのが夜明け前でした。私は夜を徹する事は、宗家に居る頃から徹す作業になれていきますのでさほど苦になりません。

## 新作「無明の井」

橋岡会特別公演

橋岡会特別公演として十月十八日京都都観世会館で新作能「無明の井」が上演。

シテ橋岡久馬、ツレ橋岡伸明、ワキ鶴木孝男、アイ大島寛治、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・吉阪一郎、大鼓・中村喜彦、太鼓・三島元太郎、後見・観世栄夫、地謡橋岡佐喜男ほか。

## 広田後援会能

広田後援会主催「第七十七回後援会能」は、十月六日金剛能楽堂で開演。能「通小町」(シテ広田隆一、ツレ広田泰能)能「殿」(シテ広田幸稔)

次回七十八回は平成四年四月五日、能「花月」(広田隆一)能「山姥」(シテ広田幸稔、ツレ広田泰能)なお、当日は正午から、湧口能

## 能「望月」古式

梅若盛義、らみの会

平成三年度文化庁芸術祭参加として「第四回梅若盛義こころの会」で、十月五日東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂で能「望月」古式を上演。シテ梅若盛義、ツレ梅若修一、千方井戸和雅、ワキ鶴木孝男、間・野村万之丞、笛・藤田大五郎、小鼓・鶴沢速雄、大鼓・山本孝、太鼓・観世元信、地謡・梅若恭行ほか。後見・梅若雅俊。

## 出版紹介

### 「日月の庭」

丹羽征夫編曲詩集

三重県津市在住の詩人、丹羽征夫氏は、このたび「日月の庭」と題する丹羽征夫編曲詩集を刊行した。この「日月の庭」は新作能をモ

舞台からの名演技を名筆で描く……

二井栄逸師画抄集 ▶ 予約締切迫る ◀

## 92 能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー1992年版。B3(タテ51.5cm×ヨコ38.0cm)表紙とも7枚の新作美画カレンダーです。  
◎ 予約特価 1部 1500円、郵送の場合送料とも1部1850円(2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律500円、例・3部の場合送料とも5000円)  
◎ 予約申込み期限10月30日(それ以後は1部2000円、但し部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい)  
◎ お申し込み方法 ハガキで部数明記のうえ当社へお申し込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。(電話での受付はいたしませんのでご理解下さい)

申し込み先 能楽の友社

〒464 名古屋市中区千種2-18-18  
振替口座 名古屋 0 - 36393

雲雀	山	安田つや子	河村真之助	藤田六郎兵衛
融	梅田てる	河村真之助	河村真之助	河村真之助
雲林	岸	河村真之助	河村真之助	河村真之助
難波	木下志げ子	河村真之助	河村真之助	河村真之助
須磨源氏	高木 波留	河村真之助	河村真之助	河村真之助
吉野天人	菊池 紀子	河村真之助	河村真之助	河村真之助
仕舞岩	船	河村真之助	河村真之助	河村真之助
三井寺	子菊池 紀子	河村真之助	河村真之助	河村真之助
隅田川	子菊池 重裕	河村真之助	河村真之助	河村真之助
高	砂 菊池 敏子	河村真之助	河村真之助	河村真之助
菊	八段之舞	河村真之助	河村真之助	河村真之助
山	刈 鈴木 八寿	河村真之助	河村真之助	河村真之助
田	姥 熊沢 光俱	河村真之助	河村真之助	河村真之助
附祝言	村 梅若 盛彦	河村真之助	河村真之助	河村真之助
幸友会秋の会	十一月三日(祝)午前十一時始	河村真之助	河村真之助	河村真之助
観修会秋の会	十一月四日(振休)九時半始	河村真之助	河村真之助	河村真之助
吉野天人	加藤 国子	河村真之助	河村真之助	河村真之助
羽衣	金田 和	河村真之助	河村真之助	河村真之助
小督	田口久美子	河村真之助	河村真之助	河村真之助
杜若	中村 時子	河村真之助	河村真之助	河村真之助
船井	高石 梅代	河村真之助	河村真之助	河村真之助
養老	有賀 欣哉	河村真之助	河村真之助	河村真之助
田村	浅野美穂子	河村真之助	河村真之助	河村真之助

平成3年10月・11月放送予定

FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

〔10月〕  
20日(日)宝生流「鉄輪」「通小町」武田 喜永  
27日(日)観世流「梅枝」「菊慈童」藤井 徳三

〔11月〕  
3日(日)特別番組にて中止  
10日(日)金春流「籠田」「経政」本田 光洋  
17日(日)宝生流「松虫」「大金」渡辺 三郎  
24日(日)観世流「富士太鼓」「紅葉狩」藤井 徳三

テレビ放送(教育テレビ)  
11月4日(振替休日)(12時~午後1時15分)  
能「紅葉狩」鬼柳 観世流・観世清和ほか  
11月23日(祝)(午前9時~10時20分)  
復曲能「鶴羽」観世流・大槻文蔵ほか  
日本の伝統芸能 能・狂言鑑賞入門Ⅱ(再放送)  
(教育テレビ午後6時~6時30分)  
11月6日(水)第3回「井筒」  
11月13日(水)第4回「茸」  
11月20日(水)第5回「二人大名」  
(放送予定につき変更の際はご理解下さい)

〔御来場歓迎〕

附祝言 主催観 祖父江修一会

花月	林喜久子	河村真之助	大野 誠
善知鳥	海田トシ子	河村真之助	大野 誠
紅葉狩	川瀬 精子	河村真之助	大野 誠
千手	和仁 千鶴	河村真之助	大野 誠
井筒	内田 睦子	河村真之助	大野 誠
菊慈童	加藤 祐子	河村真之助	大野 誠
清経	近藤 重治	河村真之助	大野 誠
海士	安田 茂哉	河村真之助	大野 誠
熊野	加藤 定子	河村真之助	大野 誠
盛安	安田 茂哉	河村真之助	大野 誠
班女	河村真之助	河村真之助	大野 誠
海士	河村真之助	河村真之助	大野 誠
草子洗小町	高橋 慶子	河村真之助	大野 誠
安田 昭子	河村真之助	河村真之助	大野 誠
浅野美穂子	河村真之助	河村真之助	大野 誠
有賀 欣哉	河村真之助	河村真之助	大野 誠
大野 誠	河村真之助	河村真之助	大野 誠

尾張藩主の能楽愛好熱は、尾張領内の能楽興行を盛んにし、勸進能が、しばしば演じられるようになった。

『名古屋市史』によると、貞享五年九月六日から五日間興行された、熱田神宮境内での勸進能が、史書に見る最初と云っている。その後、元禄二年正月の若宮神社境内での川勝治右衛門の興行、元禄十七年一月二日の橋町にての勸進能がある。この時のことを『勸進能中記』では、次のように記している。

### 尾張藩の能の歴史(八)

辻 宏一

つたのであろう。同じ元禄十七年二月七日にも、勸進能があり、次のように記されている。(『勸進能中記』)  
「七日、今日道成寺の能あり。札銭二刀の儀也。奈良より道成寺の大夫一人呼寄、今日も此大夫と唯方も有り。及暮。」  
道成寺の能の興行には、鐘を吊るなどの手間がかかることもあろうが、普通の興行の倍も、見物料

奈良から大夫を一人呼んでの興行であるからこの大夫の役料はかなり高かったであろう。この大夫と、唯方とのめも、なんであるのか、記していないが、出演料との関係もあるのかも知れない。当時の勸進能の能役者の構成を宝永元年(一七〇四)九月の勸進能の役者付によって示すと次のようになる。(『勸進能中記』)  
「二日今日よりあめや町にて、

謡十人外に作物師後見衣裳させ、総勢四十人弱の人数で、勸進能を興行していることになる。こうした勸進能は、必ずしも四座の役者に限定されたわけではなく、手猿楽者の一座も興行しており、武士ばかりでなく、町人もまた自由に観能したのである。  
今回は、勸進能について、もう少し詳しい内容を付け加えたい。又家系についても、その時代の能の特徴についてふれたい。  
参考文献『名古屋市史』『岩波講座 能狂言』『能楽の歴史』  
〔訂正〕前回福井四郎兵衛の元禄三年八月の第二代藩主光友の、大納言昇進の際の祝能参加は、翌年元禄四年十一月十三日の下屋敷の祝能の方でしたので、その年月を訂正します。光友の大納言の昇進の祝能は、二度行われたことになり、それ故、福井四郎兵衛の願は、元禄四年十一月十三日ということになりました。この点につきましては、『名古屋市史』に記載されています。筆者の誤記ですので、訂正します。(筆者は岐阜市立女子短期大学教授)

「橋町裏にて勸進能。今日より始。大夫小松六郎左衛門、ワキ三宅十郎左衛門。六郎左衛門本願寺門跡の大夫と云。今日野々宮の鼓を兼而地役者打んとす。然る処に京役者来り打んとす。彼是争論あり。依之三番めの野々宮半分にて舞足を出す。残り不致之。」  
土地の役者と京都からやってきた役者とが、野々宮の鼓の役を争っていることが記されている。勸進能は、役料も良かったのであろうが、地元の能役者と京都からやってきた能役者とは反りが合わなかつたのであろう。

が取られたようである。それだけ人気が高かったであろう。当時一日の日当が一匁から三匁位の間であるから、現在の日当を、五千円から一万五千円の間とすると、一夜の見物料は、五千円位ということになる。この日は、いつもの倍ということになると、一万円位の料金であったものと思われる。現在と、ほとんど変わらない金額と言えよう。

勸進能有之。  
役者付  
大夫川勝権六 ツレ植佐兵衛  
北村小太郎 子役品村浅之丞  
勝三郎 ワキ山本伝左衛門 吉田十郎右衛門 笛藤田三右衛門  
勝山弥平次 小鼓福見喜左衛門  
三上勘助 坂井右兵衛 竹山平七  
大鼓橋本丹七 福井右衛門八 山本平之丞 太鼓小寺与惣治郎弟子  
一人狂言三宅藤九郎弟子六人地

謡十人外に作物師後見衣裳させ、総勢四十人弱の人数で、勸進能を興行していることになる。こうした勸進能は、必ずしも四座の役者に限定されたわけではなく、手猿楽者の一座も興行しており、武士ばかりでなく、町人もまた自由に観能したのである。  
今回は、勸進能について、もう少し詳しい内容を付け加えたい。又家系についても、その時代の能の特徴についてふれたい。  
参考文献『名古屋市史』『岩波講座 能狂言』『能楽の歴史』  
〔訂正〕前回福井四郎兵衛の元禄三年八月の第二代藩主光友の、大納言昇進の際の祝能参加は、翌年元禄四年十一月十三日の下屋敷の祝能の方でしたので、その年月を訂正します。光友の大納言の昇進の祝能は、二度行われたことになり、それ故、福井四郎兵衛の願は、元禄四年十一月十三日ということになりました。この点につきましては、『名古屋市史』に記載されています。筆者の誤記ですので、訂正します。(筆者は岐阜市立女子短期大学教授)

### 助川龍夫斯道四十年記念

本鼓方・助川龍夫師  
斯道40年記念能  
平成四年二月十一日(祝)午前十一時始  
熱田神宮能楽殿

観世流太鼓方・助川龍夫師は、斯道四十年をむかえ、明年二月十一日(祝)熱田神宮能楽殿で記念能が催される。  
能組は「狸々乱」双之舞(梅若)番組次のおり。

六郎・山本勝一(三輪)白式神楽(観世流之丞)「道成寺」赤頭(武田宗和)の能三番は狂言、舞臺子、一調。  
入場料指定席一万二千元(前売のみ)自由席一万元、学生券五千円。

能三  
観世流之丞  
白式神楽  
輪 森 常好  
河村総一郎 助川龍夫  
福井啓次郎 一噌 龍二

能三  
観世流之丞  
白式神楽  
輪 森 常好  
河村総一郎 助川龍夫  
福井啓次郎 一噌 龍二

能三  
観世流之丞  
白式神楽  
輪 森 常好  
河村総一郎 助川龍夫  
福井啓次郎 一噌 龍二

能三  
観世流之丞  
白式神楽  
輪 森 常好  
河村総一郎 助川龍夫  
福井啓次郎 一噌 龍二

能道成寺  
赤頭  
野村又三郎  
野村行行  
須部 市  
高橋 一  
浅見 重好  
角 寛次郎  
小島 一英

能花  
後見 久田 敬二  
地謡 高橋 孝親  
梅田 宗和  
邦久 和英

能俊  
宝源氏 供養  
足立 知子  
中西 やす子  
山本 とよ子  
後藤 龍夫  
大野 誠

能俊  
宝源氏 供養  
足立 知子  
中西 やす子  
山本 とよ子  
後藤 龍夫  
大野 誠

能船井慶  
遊女ノ舞  
替ノ出  
飯富 雅也  
幸 義太郎  
鬼頭 喜太郎  
鬼頭 希世

能船井慶  
遊女ノ舞  
替ノ出  
飯富 雅也  
幸 義太郎  
鬼頭 喜太郎  
鬼頭 希世

能船井慶  
遊女ノ舞  
替ノ出  
飯富 雅也  
幸 義太郎  
鬼頭 喜太郎  
鬼頭 希世

能船井慶  
遊女ノ舞  
替ノ出  
飯富 雅也  
幸 義太郎  
鬼頭 喜太郎  
鬼頭 希世

能翁  
金春 信高  
横山 紳一  
井上 祐一  
福井啓次郎  
柳原富司忠  
藤田 六郎兵衛

能翁  
金春 信高  
横山 紳一  
井上 祐一  
福井啓次郎  
柳原富司忠  
藤田 六郎兵衛

能翁  
金春 信高  
横山 紳一  
井上 祐一  
福井啓次郎  
柳原富司忠  
藤田 六郎兵衛

能翁  
金春 信高  
横山 紳一  
井上 祐一  
福井啓次郎  
柳原富司忠  
藤田 六郎兵衛

名古屋市民芸術祭引協賛  
福井家 名古屋三百年記念  
十一月九日(日)午後一時半始  
熱田神宮能楽殿

能翁  
金春 信高  
横山 紳一  
井上 祐一  
福井啓次郎  
柳原富司忠  
藤田 六郎兵衛

能翁  
金春 信高  
横山 紳一  
井上 祐一  
福井啓次郎  
柳原富司忠  
藤田 六郎兵衛

能翁  
金春 信高  
横山 紳一  
井上 祐一  
福井啓次郎  
柳原富司忠  
藤田 六郎兵衛

〔面長竹会番組つづき〕

羽衣	祖父江修一	猪瀬孝	助川龍夫
和合	猪瀬孝	猪瀬孝	猪瀬孝
連管中之舞	猪瀬孝	猪瀬孝	猪瀬孝
桜川	高橋一	猪瀬孝	猪瀬孝
賀茂	石川英実	猪瀬孝	猪瀬孝
駒之段	清沢一政	猪瀬孝	猪瀬孝
連調羽	衣大鼓	猪瀬孝	猪瀬孝
狂言謀生種	野村信行	猪瀬孝	猪瀬孝
附祝言	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝
〔御來場歓迎〕	飯田元	猪瀬孝	猪瀬孝

### 名古屋宝生会定式能(第435期)

十一月十七日(日)午後一時始 熱田神宮能楽殿

能葛 飯田元 猪瀬孝 助川龍夫

能百 飯田元 猪瀬孝 助川龍夫

能萬 飯田元 猪瀬孝 助川龍夫

能龍 飯田元 猪瀬孝 助川龍夫

能鶴 飯田元 猪瀬孝 助川龍夫

附祝言 飯田元 猪瀬孝 助川龍夫

〔要員券〕 飯田元 猪瀬孝 助川龍夫

臨時職員券五千元 飯田元 猪瀬孝 助川龍夫

### 葉月・長月の舞台から

#### 「名古屋新狂言」

#### 「鬼頭喜太郎舞台生活六十周年記念能」

竹尾邦太郎

「第三回名古屋新狂言」は、今秋英國で開かれるジャパン・フェスティバルの一環に公演されるシエイクスピア狂言と銘打った新作の二番を披露した。

「じゃじゃ馬馴らし」沙扇の作を先代藤九郎が脚案脚色(一藤九郎新作狂言集)昭和56年能楽書林刊に所収)したものを入れ、元秀は妹娘と馬(止動方角の馬同断)を登場させたが無くもがなと思えた。じゃじゃ馬の姉妹に淳子、野志郎のシテ馬娘に元弥。じゃじゃ馬がシテの圧倒的に自己本位な言葉の綾に翻弄され、意に反してのまでせせられ馴致される辺りは元秀演出が冴えるが、シテにはもう少し垣野な雰囲気を感じ、いし、ぞろりと長持たし込んだ姿より舞物本来の掛素姿を良く

### 紅梅記

#### 台風、朝長

#### 都婆小町

九月は台風が多かった。十九号はあの伊勢湾台風並み。夜通し安眠できず、反転した反転である。能楽神社の貴重な能楽合は屋根が崩れた山(NHK)。大鼓響、大変なことである。九月の大熱田はみるべき能が多いのに、週末になると、台風におびやかされた。

朝長・徳法。

九月七日、太鼓方鬼頭喜太郎舞台六十周年記念能。鬼頭家は親世流太鼓の家で、当主喜太郎氏が四代目・長男・孫と続く(愛知県六輪在住)。名古屋(東海三県)の太鼓は殆どこの流儀である。また鬼頭家の身内には謡をよくし、或は笛を吹く(藤田流)人もいた。謡の方は絶対に橋岡久太郎がいさの人であった。あわせて当主の次男は太鼓を打つ。にぎやかである。

### 主権長生会

まず神歌(親世喜之)からはじまる。シテ方は五流給出演、それは五流の家元(宝生流は家元息)が舞臺で祝う感儀。この後一調(横槍、謡書之・太鼓世元信八親世流太鼓方家元V)・一調一管(唐松、片山九郎右衛門・苗藤田大五郎・太鼓小寺俊三)が大きな花を添える。もう一つ、家元の舞臺子と並ぶ眼玉が朝長・徳法であった。家元たちが清新・地味・匂い・堅固・古拙の舞の中に能の深い心を示すに對し、「徳法」は、普通の演出以上に、能芸の高いわざを通して哀傷・勇・追慕の詩情を万遍なくみせた。

朝長は、シテ親世流之丞、ワキ宝生閉(二人のツレの黒目勝ち八瀬いざかVの水衣印象的)、四拍子は六・大倉源次郎・鉦一・喜太郎の四氏。アイ又三郎・地頭野村四郎(佳)。後見清和、太鼓後見(正)元信・(副)小寺俊三。この四拍子の顔触れに苦心のあとがみえるが、全体十分。

前シテの出よし。ワキとのやり

この辺り、曲の座りがよく元秀も熱演で新作を感じさせない。この歌舞を覚えた王は、呪いを解いて娘を戻すが、元に戻された太郎冠者は遺る顔ない。美女との悦楽も郎那一杯の夢を悟ると、「夜露を合んでしとりと微睡ういでるやうな……妖精の森に独り居る東の間に見た夏の夜の夢舞台は、狂言であったか……くっさめ。」とのメに、元秀しみじみとしたよい味を出した。シテ・アド二人のアンサンブルも上々。なお東東付は、王は厚板(亀甲繫文様)・萌黄下袴(丸紋足)・拾法被(赤地破れ亀甲文様)・美男壁の端を後頭部で結び銀冠に背い美の林檎の木を立てる。女王は浅黄縫結・白綾水衣・美男壁の端を袖の中に入れて金輪冠に赤い美の林檎の木を立てる。林檎がアダムとイヴの樂園を連想させて楽しい。(25分、8月21日・徳川美術館前特設舞台)

「朝長・徳法」徳法とは偽過。罪を悔悔することの意味という。この小書、太鼓方の重習で親世流では当地七十三歳振りの上演であ

朝長の盤所に詣でるシテ音器ノ長者(親之丞)が、其処でワキ旅僧(開)に出会う前場は常と同じ。八秋の桃原の跡までも、とワキ正に薄く面道し、ハタ煙、と微かに見上げる。ハ消し空は色も形も亡き跡を哀れける。と一足ずつ退って返シに面クモル辺り、情景と心象の描写が一体となって、ひっそりとしたシテ語りは、その夜の出来事を洩らすことのないように、一つ一つ反響するかのような細心である。ハかくて夕陽影うつる、の返シに立つはかな気な風情と、ハ青野が原の、と名残りの尽きない気持がしんみりときせる。中入まで一時間五分を要した。

後は、太鼓後見が見せ掛けの太鼓を紫の風呂敷に包んで引くと、代りに萌黄の風呂敷に包んだ本番用の太鼓を出す。アイ居語りには又三郎、神妙に動いた後は常に無二ワキ語りになる。何となく重々しく莊重な気配となり、語り終るとアイとの問答から徐に懐中の経巻を取り出し、ワキツレ従えて正

中横に出て待鶴となった。ハ御法掛のクセハやみやみと討たれ、とワキにアシラウ。ハ更にも、と謡いながら直シ、ハ喜び申すなり、の地でワキにアシラウと打切に直ス。膝を射られる所は、扇を左に取って左袖きりと高く巻き上げると、右に少し体を開き一閃のも

と左膝にさりと突き立てた。その鮮烈な型は、馬が暴れ出すのも気がせかない程だった。床几を立ち、腹を切る所は、如何にも腹極き切る気合が横溢、目の離せない気力充実の舞台だった。シテがトメ拍子踏み、各役全員が退くと、改めて太鼓方が本幕で三ノ松に出た。正ウケで坐り、先の徳法の太鼓の調を締めたもので、平伏して再度音の響きを聞かせて、平伏して再び本幕で入って一曲が終った。緊張のうちに鳴れやかな鬼頭喜太郎の面影が印象的だった。太鼓後見は元信・俊三、後見は清和・九郎右衛門・徹三。(2時間15分・9月7日・鬼頭喜太郎舞台生活六十周年記念能)

**能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ!**  
**舞姿の勉強と記念に是非どうぞ!**

当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きつとご満足いただける自信があります。

テレビ放送番組企画制作  
 テレビデオCM企画制作  
 テレビデオCM企画制作

**ビデオプロダクション 西川企画**

名古屋事務所(〒451)名古屋市中区西区2-20-3輪の内荘 小塚方 ☎(052) 571-5816  
 (〒500)岐阜市北野町20-2 TEL (0582) 63-9869

エンゲージリング  
**山田宝石**  
貴金属・時計・装飾品  
名古屋・本山駅  
電 762-2434代表

# 能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464)  
電話 (731) 7984  
振替口座 名古屋 0-36393  
購読料 1年1000円  
郵送の場合 1年1500円  
一 部 90円

## 演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- 〔11月〕  
23日(日) 和泉金 (有料) (番組①面)  
24日(日) 久田観正会秋季大会 (来場歓迎) (番組①面)  
30日(土) 青陽会定期能 (有料) (番組②面)
- 〔12月〕  
1日(日) 歳末助け合い協賛能 (有料) (番組②面)  
8日(日) 壺泉金能 (有料) (番組③面)  
14日(土) 久田観正会二能リサイタル (有料) (番組③面)  
21日(土) 名古屋能楽鑑賞会別会・狂言 (有料) (番組③面)
- 〔平成4年1月〕  
3日(金) 能楽協会名古屋支部開初式 (関係者のみ)
- 11日(土) 学生能の会 (来場歓迎)  
15日(祝) 名古屋清韻会大会 (来場歓迎)  
18日(土) 青陽会定期能 (有料)
- 〔2月〕  
2日(日) 室生会定式能 (有料)  
9日(日) 親世会定式能 (有料)  
11日(祝) 助川龍夫師道40年記念能 (有料)  
16日(日) 親世九事会定式能 (有料)  
23日(日) 内藤泰二師をしのぶ会 (有料)
- 〔3月〕  
1日(日) 大蔵狂言会 (来場歓迎)  
8日(日) 梅猫会 (有料)  
14日(土) 学生能 (来場歓迎)  
15日(日) 藤田追善能吟会 (来場歓迎)  
20日(祝) 日本能楽会名古屋公演 (有料)  
22日(日) 壺泉金大会 (来場歓迎)  
28日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)
- (演能変更の際はご了承下さい)

**秋の褒章**  
紫綬褒章  
金剛 巖氏  
シテ方金剛流二十五世家元、本名滋夫。大正十三年十二月二十三日、初代金剛巖の三男として京都に生まれる。初舞台は昭和六年、昭和二十七年大阪府民劇場奨励賞、二十九年「暫」で芸術祭奨励賞、三十六年大阪市民文化祭芸術賞、日本能楽会理事、京都能楽会会長、京都能楽会成会理事などを歴任。金剛会を主催。稀山の復活上演につとめ、後進の指導に大きく貢献。

**春日井市で**  
狂言鑑賞会  
11月24日 春日井市民会館  
春日井市、春日井市教育委員会主催による第十二回「狂言鑑賞会」が十一月二十四日(日)春日井市民会館で開催される。協力・狂言を奨励し、上演は次のとおり。  
「秋大名」(野村又三郎、佐藤友彦、井上礼之助)  
「居杭」(山本東次郎、山本則秀、山本則俊)  
「船弁郎」(野村信行、野村又三郎、松田高義)  
午後一時開始、入場料全指定席A席二千円、B席千五百円。問い合わせは、春日井市教育委員会文化振興課(電話〇五六一八五―六四五―)

**武田邦弘独立**  
20周年記念能  
12月7日 京都観世会館  
観世流・武田邦弘師独立二十周年記念能が十二月七日(土)京都観世会館で開催される。  
舞臺子「小袖曾我」(吉井順一、武田欣司)  
能「菊慈童」遊舞之楽(片山九郎右衛門)  
狂言「素袍落」(茂山千五郎)能「安宅」勧進帳、滝流(武田邦弘)  
午後一時開始、会員券申込み先〃京都観世会館(電話〇七五―七七一―六二四) 武田邦弘方(電話〇七五―三三三―六四六)

## 歳末助け 協賛能 合い運動

### 能楽協会名古屋支部主催

#### 12月1日 能 4 番 上演

能楽協会名古屋支部(西村敏也支部長)主催による平成三年度の歳末助け合い運動協賛能は、きたる十二月一日(日)熱田神宮能楽殿で、宝生、喜多、親世の各流による能四番、金剛、金春流仕舞、和泉流狂言など協会支部能楽師の出演で開催される。

この助け合い運動協賛能は毎年協会名古屋支部の主催で行われ、今回は第二十三回目。昨年は愛好者の協力により、愛知県へ二十四万七千六百三十五円、名古屋市へ二十四万七千六百三十五円、合計四十九万五千二百七十円が寄付された。

演能は、宝生流能「鶴亀」(シテ戸田和) 観世流能「巴」(シテ近藤幸江) 喜多流能「土車」(シテ長田鶴) 親世流能「船弁郎」(シテ梅田邦久)

狂言「寝言曲」(野村又三郎) 仕舞・金春流「松風」(近藤修彦) 金剛流「枕草子」(百々康治) 観世流「笹之段」(高木美智子) 「融」(生駒里翠)

午前十時開始、入場料千五百円(全自由席) 前売券各出演者師宅、能楽殿など。(番組②面掲載)

**和泉**  
和泉流現行曲二百五十四曲完演  
舞台生活五十年記念公演  
十一月二十三日(祝)  
午後一時開演  
熱田神宮能楽殿  
三宅藤九郎 和泉 淳子 佐藤 友彦 井上 祐一 大野 弘之 井上 礼之助 井上 靖浩 松田 高義 野村 信行 和泉 元弥 和泉 元秀

**久田観正会秋季大会**  
十一月二十四日(日)午前九時始  
熱田神宮能楽殿

入場券 A席一万円、B席五千円

主催 和泉 宗家 後援会

骨皮	和泉 元弥
素袍落	井上松次郎
狸腹鼓	和泉 元秀
蝸牛	三宅藤九郎 和泉 淳子

**和泉**

殺生	城キリ	村松 鏡
羽衣	田中 雅子	河村真之介
熊野	市野美代子	河村真之介
善知鳥	石黒 操子	河村真之介
鉄輪	横井余史子	河村真之介
遊行柳	木野島定子	河村真之介
捨	川クセ	服部喜美子
郎	久米 宏枝	泉 嘉夫
実盛	石黒 直子	河村真之介
通小町	星野 路子	河村真之介
関寺小町	大島寿美子	河村真之介
俊寛	成経今井 猛	河村真之介
養老	吉川宇良子	河村真之介
鶴亀	神谷 貞子	河村真之介
正尊	山田 義高	河村真之介
須磨源氏	岩田 実	河村真之介
船弁慶	露木サチ子	河村真之介
附祝言	久田 徹二	河村真之介
〔御来場歓迎〕	主催 久田 徹二	河村真之介

(終了予定 六時頃)

# 青月雅日記

(123)

## 貴船菊

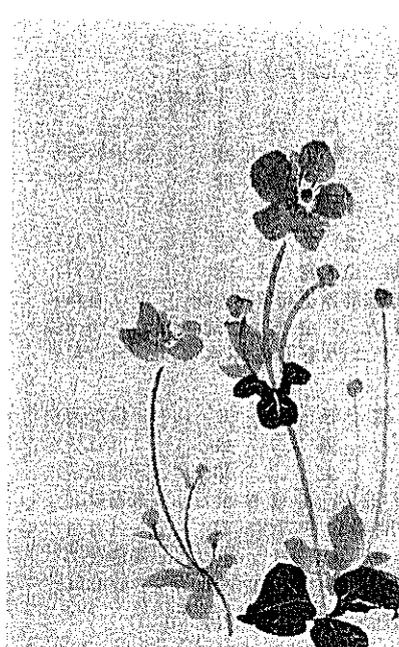
えと文 二井栄逸

美しく咲き続いた貴船菊も終りに近づきました。大体花期は九月、十月が見ごろですが、陽がまりに咲く貴船菊はまだまだ元気です。この貴船菊は菊の名で呼ばれていますが、まったく菊の類ではなく、キンポウゲ科の多年草なのです。花の形がいかに菊に似ているので菊の名をつけられたのでしよう。

四番目能の鉄輪の前半の舞台は、山城の國貴船、今の京都市左京区鞍馬貴船町にある貴船神社の境内であります。この貴船から

鞍馬山にかけてこの花が群生したため、貴船の名前をつけられたのです。本州から九州、中国にも分布していますが、特に群生している、白根菜等のようにその土地の名前がつくものです。

大分前のことになりますが、群生地を見たかったので貴船神社に出かけたことがあります。鞍馬山と、貴船山の谷あいを通る貴船川の清流に影をうつして咲く風趣をはるかに眺めながら、鉄輪の能を連想したりしました。



鉄輪は、能としては珍らしく現代的で、女性の慎しみを忘れて、はげしくうらみの情をあらわす特異の能として鬼気が迫ります。貴船の神に「丑の刻まじり」をする泥眼の女、鬼と化した生成(なまなり)の女とは、まったく似つかわしくないな、と思いがから眺めていました。貴船菊は別名を秋明菊とも呼ばれていますが、秋を明るく花として、本当はこの名前の方が適切であるかも知れません。(平成3・11・1)

### 財団法人 観世文庫が3事業

#### 「講演会」「文献資料公開」など

昨年急逝された観世流二十五世宗家観世左近師の遺志を継承して観世宗家伝来の能楽資料の保全・活用と能楽の振興を主な目的とする財団法人観世文庫が今春設立されたことは本紙既報のとおりであるが、本年度の事業として「観世文庫研究会」と「観世文庫講演会」「文献資料公開」の三つのイベントが催される。同文庫では能楽を愛好される方々の多数の参加をのぞんでいる。各事業の概要は次のとおり。

〔観世文庫研究会〕  
世阿弥の能楽論書、謡曲や古い型付を一緒に読む形の研究会を月に一度、五回を一区切として継続的に開催。

その第一回として「世阿弥の芸術を読む会」を実施。十一月から平成四年三月、申込み順に二十五名まで。

〔観世文庫講演会〕  
十二月三日(火)午後六時～八時半、会場：国立能楽堂大講義室。演題と講演者  
(1) 観世流の歴史 章氏  
(2) 私の見た観世流の高手たち 山崎有一郎氏  
入場無料(先着百六十名限り)  
〔文献資料公開日〕  
一月十八日(土)十九日(日)  
場所：東京都渋谷区恵比寿南一―二―一―四、観世文庫。  
雑誌「観世」(昭和44年9月、51年11月号)掲載の「観世宗家所蔵文庫目録」の諸資料(一部貴重資料は除く)観世宗家所蔵の文献等の閲覧希望者は十二月二十日までに往復はがきで閲覧したい書名と希望日時を記入して申し込む。公開は両日とも午前部は十時～午後一時、午後部は二時から五時まで。

### 平成4年度

#### 観世会定式能 番組

平成4年度の名古屋観世会定式能は二月九日を初回として年五回開催される。とくに初回は二十五世観世左近追悼公演として上演される。予定番組次のとおり。

第一回 二月九日(日) 十二時半始 廿五世観世左近追悼公演 舞臺子 海士 片山九郎右衛門 清 經 観世徳之丞 仕 舞 観世徳之丞 葵 上 観世芳宏 第二回 四月十二日(日) 十二時半始 巻 絹 山本 勝一 仕 舞 山本 順之 善 知 鳥 梅若 六郎	第三回 六月十四日(日) 十二時半始 楊 貴 妃 大槻 文蔵 仕 舞 梅若 盛義 鶴 飼 観世 喜之 第四回 九月十三日(日) 十二時半始 班 女 武田 志房 仕 舞 武田 宗和 阿 漕 橋岡 慈観 第五回 十一月八日(日) 十二時半始 鉢 木 観世徳之丞 仕 舞 片山慶次郎 附 祝 言 山本 勝一
--	--

### 青陽会定式能

十一月三十日(土) 十二時半始  
熱田 神宮 能楽殿

龍太鼓 前野 郁子 仕 舞 今沢 美和 山 姥 今沢 美和 能 組 地謡 瀬戸三津子 近藤 幸江 生駒 里翠	俊 寛 高安 勝久 間 河村真之介 後藤孝一郎 鹿取 希世	雁 大名 井上 祐一 能 井上松次郎 高橋 一 飯富 雅介 吉田 定男 柳原富司忠 鹿取 希世	井 筒 飯富 雅介 間 井上松次郎 後見 今沢 美和 地謡 生駒 里翠 馬場 信至 松山 幸親 加藤 正邦 梅田 邦久	巻 絹 中川 雅章 仕 舞 武田 邦弘 野 宮 武田 邦弘 車 僧 祖父江 修一 近藤 幸江 瀬戸三津子 加賀 敏彦 須部 敏彦	紅葉狩 飯富 雅介 間 佐藤 友彦 後見 前野 郁子 地謡 今沢 美和 梅田 邦久 高橋 一 加藤 正邦 梅田 邦久	附 祝 言 主催 青 後援 中日 新聞 会
---	--	--	--	---	---	--------------------------

### 歳末助け合い運動 協賛

十二月一日(日) 午前十時始  
熱田 神宮 能楽殿

鶴 龜 飯富 雅介 間 井上礼之助 後見 竹内 澄子 地謡 寺部 一威 久野 幸三 竹腰 勝一	仕舞(金春流) 松 風 近藤 修彦 地謡 地謡	仕舞(金剛流) 枕 慈 童 百々 康治 地謡 地謡	巴 近藤 幸江 能 (観世流) 高安 勝久 吉田 定男 柳原富司忠 大野 誠	寝 音 曲 野村又三郎 能 (喜多流) 後見 大野 弘之	土 車 飯富 雅介 間 佐藤 友彦 後見 高林白牛口二 地謡 和谷 衡市 森田 克彦 山本 和男 佐々木 宗一 高林 伸二 加藤 正邦 近藤 幸江 梅田 邦久 梅田 邦久 鬼頭 英二 藤田 六郎兵衛	船 弁 飯富 雅介 間 井上 祐一 後見 今沢 美和 地謡 瀬戸三津子 梅田 邦久 須部 敏彦 須部 敏彦 久野 幸三 清沢 一政	附 祝 言 主催 能楽協会名古屋支部 前次券 各出演者宛 お問合せ 熱田神宮能楽殿 ☎ 六八二―一七五一
--	----------------------------	------------------------------	---	------------------------------------	--	---	--

勸進能興行は、その後も引き続き盛んに行われている。  
宝永二年(一七〇五)三月二十二日より長崎正徳寺の境内で、勸進能が興行されている。大夫は、川北八郎兵衛、ワキは、天谷新右衛門である。  
二七日には、シテ役者は、同じ大夫川北八郎兵衛であるが、ワキ役者は、西村孫右衛門、長谷川左兵衛に代って演じられている。役者を一部入れ替えて、勸進能を演じている。  
二八日にも「勸進能中記」には、「今日より願正寺にて勸進能有之。」と記されている。長期に渡って、願正寺で、勸進能が興行されているようである。  
尾張藩表舞合では、宝永元年七月九日、生見(玉)の能が演じられていた。このように折りに、能が演じられていたようである。  
玉の井 シテ貞之 ワキ合助  
大鼓三郎右衛門 小鼓喜兵衛 太鼓源兵衛 笛忠三郎  
頼政 シテ五郎 ワキ平三郎  
大鼓五兵衛 小鼓喜兵衛 笛忠七  
松風 シテ保生太夫 ワキ茂右衛門 大鼓一郎兵衛 小鼓清六  
笛庄兵衛  
羅生門 シテ権蔵 ワキ源七  
大鼓五右衛門 小鼓九郎三郎  
太鼓源右衛門 加兵衛  
自然居士 シテ喜左衛門 ワキ三郎 大鼓三郎右衛門 小鼓九郎三郎 笛忠三郎  
卒都婆小町 シテ保生 ワキ庄兵衛 大鼓七左衛門 小鼓庄左衛門 笛加兵衛  
七騎落 シテ九郎 ワキ又三郎 大鼓五右衛門 小鼓清六 笛加兵衛  
善知鳥 シテ喜左衛門 ワキ彦太郎 大鼓五兵衛 小鼓喜兵衛 笛忠治郎  
唐船 シテ九郎 ワキ茂右衛門 大鼓三郎右衛門 小鼓九郎三郎 太鼓源兵衛 笛忠治郎  
安宅 シテ保生 ワキ源七 大鼓七左衛門 小鼓喜兵衛 笛加兵衛  
乱 シテ八左衛門 ワキ忠蔵 大鼓市郎兵衛 小鼓清六 太鼓又右衛門 笛庄兵衛

児やぶさめ 勘七、釣狐伝吉、花子 一郎右衛門、首引 源介、枕物狂 一郎右衛門、唐すまふ 伝右衛門、朝比奈 一郎右衛門、能十一番、狂言七番という盛況である。  
同じ七月の十八日頃、江戸でも、三代藩主頼誠の十七男、岩之丞が、能を主催している。その時も、能が十番、狂言七番の番組である。こうした、能楽愛好の風潮は、謡講を武士の間に盛んに広め、浸透させることになった。  
『勸進能中記』宝永三年三月二五日のところに、次のように記している。  
「暮に忽左と同道にて、衣の揃ぬ久兵衛宅へ行。謡講を聞。久兵衛声よく上手也。所々に謡の師の講多けれども、廿五日講を人皆欲す。久兵衛親久兵衛は、福王茂兵衛が弟子にて、当流を謡出したる者也。忽て京都上下謡甚はやり、童部迄仮初にも謡をす。  
。西行様 シテ正田吉右衛門  
ワキ木村七左衛門 花見二郎兵衛 兼平 シテ平八 ワキ喜兵衛 仙原 シテ前田新七 みずの御用達也 ワキ永井七左衛門  
角田川 シテ園久兵衛 ワキ三郎左衛門 男七 子役大助 久兵衛子也。七・八歳」  
頼世屋付ワキ方の福王流の素謡が、当時、尾張藩内で盛んであったようである。福王茂兵衛は、親世黒雪(九世親世大夫)の弟服部頼元の子供で、福王流四世盛厚に、跡継がないことから、養子となつて、五代目を継いだ人で、晩年京に隠居して服部宗巴と号し、素謡の教授に力を注いだ。以後、福王流は、京都の素謡界の主流となる。後に京親世と言われる岩井井上、林、園、浅野の家々も、福王流の高弟であった。この福王流高弟の蘭久兵衛の謡講に、「勸進能中記」の筆者、重章は出かけたようである。評判の高かったことが記されている。  
謡講が盛んになれば、鼓なども習いたいという者が出て来るのも

### 尾張藩の能の歴史(九)

辻 宏 一

当然の成り行きである。こうした習いごとが、きっかけとなって、鼓打と武士の妻との不倫騒動が持ち上がり、妻敵討ちとなったのが、宝永三年六月のことである。この事件を題材としたのが、近松門左衛門作「堀川波鼓」で、宝永四年(一七〇七)二月一日に、大阪竹本座で初演されている。  
当時、この事件を耳にした重章は、「勸進能中記」に、次のように記している。  
「今月初比、京堀川にて女の敵打あり。遠近甚伝之。  
因幡鳥取、松平右衛門大夫吉明台所人あり。在江戸也。妻子は鳥取にあり。子に鼓を稽古せしむ。鼓打此妻と通す。人多知之。本夫の妹京の紺屋の妻たりしが、此奸状を江戸の兄へ通す。兄大に憤り、強て暇をもらひ、帰国し、妻を一刀に切殺し、妹及び妻の妹ともに彼鼓打を狙ふ。本夫は見知らざるゆへ、女を以て物色し、当月二日・三日比にか、堀川にて見出し、先二女を家へ入れ、因幡よりの状を届と云間に、本夫等入て討留之也。……」  
又云、妻の妹、始鼓打に通じ、姉も通ずる故甚恨し、本夫に訴レ之云々。鼓打ゆへに吾姉殺したれば、姉の敵也と討レ之云々。実は、夫と女の敵を打也。  
尾張藩の能とは、直接関係はないが、当時、能の謡や鼓を習うことが、広く全国的に及んでいたこと、子供までもが習いごとにしていたことが知られる。宝永初期の頃の風潮を知る手掛りともなる。その他、謡ごまという遊びが流行していたようである。  
宝永三年十一月九日の「勸進能中記」に、「頃日、江戸謡ごまはやる。当地にても去比より、文七ごまとて勢敷流行す。文七文を重ね六へ木を入て糸にて廻す也。京・大坂よりはやり来るよし。家々に三ツ四ツもたぬものなし。此舞間に小謡一番つゝ謡と云々。」と記されている。  
能の小謡が、風俗として、遊び

の中にも浸透しているであろうか。それとも他の流行歌謡かも知れない。  
宝永六年正月、能狂とまで言われるほどの愛好ぶりを見せた、第五代將軍綱吉が死去する。  
宝永六年五月一日、第六代將軍家宣の將軍宣下の大札が行われる。この大札の儀式に、尾張中納言吉通が、参列している。  
五月三日には、公卿聚席の猿樂がある。「徳川実紀」には、その様子が次のように記されている。  
「長の御持めして、本多伯耆守永先導し、中根大剛守正利御刀の役し、大廣間に供給。三家拜謁せられ、伯耆守正永、大久保加賀守忠増御陣子開きて、公卿ならびに大名以下のともが拝し奉り、中興小姓御簾の役し、少老大久保長門守教寛舞合にのほり、猿樂はじむべきよしを伝ふ。この日殿上人は公卿の後座、両局、告使、副使は御車寄に候す。能組は、翁、三番叟、八幡、風流、高砂、開口の詞に日、それ天長く地久に、うけつけ松のかけ廣く、おなじ緑の早苗月、ふるふ民さへはこらしめ、めでたかりける御代とかや。田村、東北、紅葉狩、祝言、異服、狂言二番、末廣がり、いくのみなり。この半に奏者番、鳥居播磨守忠英猿樂のともがらに唐織、時のふく、要脚を廻頭す。府内の市人もみな芝居して見ることゆるされしかば町奉行丹羽遠江守長守令して鳥目菓子、酒を下さる。人数五千百人、ひとりごとと鳥目一貫文づゝなり。」  
將軍宣下の能には、通常の祝賀の能の番組には、余り入らない、風流や、開口のワキの詞章も取り入れられている。その他、江戸の町人達も、見ることが許され、鳥目一貫文に、菓子、酒も与えられたようである。人数は、五千百人というところから想像しても、ほとんどよく舞台を見ることはできなかったのではないかとと思われる。費用も莫大であったであろう。次回は、家宣の能楽好みと、尾張藩の能楽の動向についてふれてゆきたい。  
参考文献 岩波講座「能・狂言」 能楽の歴史「能・狂言事典」 (筆者は岐阜市立女子短大教授)

### 壺泉会 能

十二月八日(日) 午後一時始  
熱田 神宮 能楽 殿

謡曲「江口」と西行伝説  
甲南女子大学非常勤講師 大森亮尚

舟通小町 梅若万紀夫  
船弁慶 泉 泰孝  
狂言 吃り 男野村又三郎 妻 松野村 信行 後見 井上礼之助

龍江 加藤 春枝 近藤 幸江 泉 嘉夫  
野見山光政 河村隆一郎 高橋 正光 福井啓次郎 鹿取 希世

井上礼之助  
伊藤 嘉章 梅若万紀夫 地謡 鶴田 博 祖父江修一 泉 雅一郎 今村 嘉男 泉 泰孝 山本 正人 浅井 文義

後援 朝日新聞 新泉社

〔入場料〕一般券五千円、学生券二千円(全自由席)  
取り扱い熱田神宮能楽殿(〇五二一六八二一七五)  
泉嘉夫方(〇五二一八三二一三二八五)市内各ブレイカイド

平成2年度名古屋芸術奨励賞 受賞記念

久田徹二「能」リサイタル  
十二月十四日(土)午後二時半始  
熱田 神宮 能楽 殿

独吟 勸進帳 久田 徹二  
箏 采女 下川 直長  
遊 行柳 梅田 邦久  
鞍馬天狗 笠田 稔  
久田 徹二  
笠田 昭雄  
後見 前野 郁子 地謡 松山 幸親 上田 貴弘 中川 雅章 小島 一邦 英久

### 名古屋能楽鑑賞会別会

十二月二十一日(土)午後二時始  
熱田 神宮 能楽 殿

主権 久田 徹二  
共催 名古屋市教育委員会  
後援 名古屋市

前席 三千五百円(当日券四千円)  
学生 前席二千円(当日券二千五百円)  
入場券取り扱い熱田神宮能楽殿、出演者宅

主権 古屋 能楽 鑑賞会  
主権 古屋 能楽 鑑賞会

〔和泉流〕 節 塗 流し  
〔和泉流〕 墨 塗 流し  
〔和泉流〕 川 上 分 塗 流し  
〔大藏流〕 濯 ぎ 川 上 分 塗 流し

大 名 井上 祐一  
太郎冠者 井上 靖浩  
女 佐藤 友彦  
女 山本 東次郎  
女 山本 恭太郎  
女 野村 万作  
女 野村 武司  
女 茂山 千三郎  
女 茂山 正義

小 林 責  
藤田 六郎兵衛  
福井 啓次郎  
河村 隆一郎

武蔵野女子大学教授

平成3年11月・12月放送予定

FM龍泉鑑賞(午前8時~9時)

〔11月〕  
24日(日) 親世流「富士太鼓」「紅葉狩」藤井徳三

〔12月〕  
1日(日) 親世流「野流」「錦流」「美流」宮本 誠三  
8日(日) 親世流「流」「流」「流」若川 沢本 誠宅  
15日(日) 親世流「流」「流」「流」梅三 鶴山 大三  
22日(日) 親世流「流」「流」「流」若川 沢本 誠宅  
29日(日) 親世流「流」「流」「流」若川 沢本 誠宅

テレビ放送(教育テレビ)  
11月23日(祝)(午前9時~10時20分)  
復曲能「編目」親世流・大蔵文蔵ほか  
日本の伝統芸能 能・狂言鑑賞入門Ⅱ(再放送)  
(教育テレビ)午後6時~6時30分  
11月13日(水) 第4回「葺」  
11月20日(水) 第5回「二人大名」  
12月23日(祝)(午前9時~10時)  
(1) 能楽界の話題  
(2) 新作能「安土の聖母」梅若萬彦・泉 嘉夫ほか  
(放送予定につき変更の節はご理解下さい)

長月の舞台から(その二) 観世会 第四回名古屋能楽鑑賞会 宝生会 九阜会

竹尾邦太郎

「井筒」 シテ六郎。小面・襟白赤・白濁指(七宝紫文様)・赤...

「観世会」 第四回名古屋能楽鑑賞会 「宝生会」 「九阜会」

紅梅記

京都市、能 三番、金剛 巖氏の事

十月二十日は十三夜(旧の九月十三日)。中天近くきれいな月をみる。庭の菊ふくらむ。

十一月も演能が盛ん。

十月十八日京都へ。新作能「無明の井」の関西公演である。主治医のM博士(以下先生)と同道で...

(黒垂なし)に黒っぽい地味な装束で、すでに脱俗の様子すら見せていた。枕の吟味にしても、微...

舞に稽古の跡が見られてうれしかった。(1時間19分・9月8日・観世会 因に先回は1時間25分) 「萩大名」 シテ万之丞。素袍...

また、祝賀的にも朽ちた卒都婆に腰を掛けるようではないので、少々損な演出だった。 狂いの前後は、気位高い所謂ベ...

「龍田」 シテ博祐、小面・襟白浅黄。峯を見上げ、演音を聞く面の工合が繊細で優しい。後は天...

と大小前からワキ正へ隣行するの勢。目醒めた大名が、悪戯に興じて墨だらけの顔の女に形見の鏡を...

を明察する太郎冠者(祐一)の利発。目醒めた大名が、悪戯に興じて墨だらけの顔の女に形見の鏡を...

訪ねる。親切な案内で席を確かめ、楽屋へ。橋岡久馬氏に先生をお引き合わせする。文通はあつてもこれが初対面。一つ京都市の目的が...

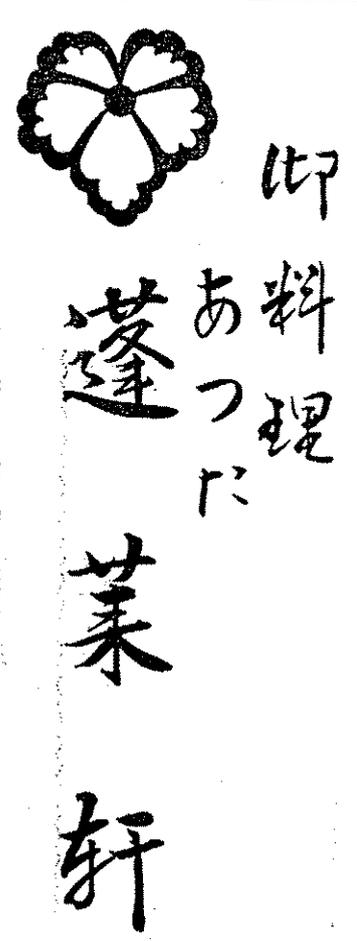
見所のほぼ半数は外国人と見受けられた。ご夫婦同伴もあり、京都の医学会の出席者の方々らしく、多田博士と親しく話す方もいる。狂言(茂山正義)のあと「無明の井」。精神と肉体の死、肉体の死と脳死、脳死可否の深い問題を、日本古来の生死の考え方に由り、能の形で思索する。秀作である。シテは橋岡久馬氏(曲付)。「生き人か、死に人か」の後シテのことは胸をつく。「生

死の有様古より窮まりも印象が強い。「朝には紅顔を、世路に誇れども夕べには白骨となりて、郊原に朽ちぬ」(クセ前)。「無明の森の深き間、鬼火に導かれて、道なき小径辿り行く。鉛色に光るは三瀬の川の渡しなるや。荒けなき渡守、生ける者は乗るまじ云々」(「生き人か」、カケリのこと)の文章あり。「生き人」の英訳は「アム・アイ・リヴィング・オア・デッド?」。ひとつ「胸を割き、臓を取る」のところ、ワキ座のツレ(心臓を提供された若い女性)がしずかにシテの行き過ぎであろうか。共に感動。 多田博士の平明深高な「ノート」、英仏両語の解説と日英対照の謡曲文を配らる。これまでの三・四の資料と合わせて貴重。平安神宮の方に一礼して車中の人となる。京都駅ホームは静かであった。付、遅れたが、アイ狂言(大島寛治)の秀逸を忘れてはならない。

十月四・五日、名・市民芸術祭協賛の能・狂言の会。芸創Cで。四日は景清、シテは九月の好演(卒都婆小町)に続く梅田邦久氏。硬骨・武骨と言ふより、平曲を語り出したとも伝えられる鋭い心の持ち主で親子の情も厚い景清を演じて好演。別れて行くとき、ツレ(娘)がシテに(突き)当った。しばし止まってまた進む。大層効果的。よきパフォーマンス、偶然と言えようか。ひとつのカタにもなるうか。

五日、狂言三番。真中の月見座頭(シテ)を演じた茂山忠三郎氏がすばらしい佳演。しかし相手をする町の人・茂山正義氏の調子が高いので、少し噛み合わせ。借しこの正義氏が先に記した景のときは、これでよかったことを付記。

訂正。紅梅記十月号で、鬼頭喜太郎氏次男は大鼓を打つが太鼓になつていました。お詫びして訂正します。(野村広三)



御料理 あつた菜軒 本店 熱田区神戸町五〇三 電話(051)868618 中店 熱田区神宮一丁目 電話(051)559844 本店 松坂屋本店10階 電話(051)382515 支店 松坂屋本店地下1階 電話(051)376611

観世流謡曲本 ちくさ正文館 ちくさ駅前 電話01137

# 観世流・金剛流 宗家本発元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291)2488-9 振替東京3-3552  
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入  
電話075(231)1990 振替京都1-113

# 能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円

郵送の場合 1年1500円

一 部 90円

## 演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- 〔12月〕
- 21日(土) 名古屋能楽鑑賞会別会・狂言(有料)
  - (平成4年1月)
  - 3日(金) 能楽協会名古屋支部開初式(関係者のみ)
  - 11日(土) 学生能楽会(来場歓迎)
  - 15日(祝) 名古屋清韻会大会(来場歓迎)(番組②面)
  - 18日(土) 青陽会定期能(有料)(番組②面)
  - (2月)
  - 2日(日) 宝生会定式能(有料)
  - 9日(日) 観世会定式能(有料)
  - 11日(祝) 助川龍夫師道40周年記念能(有料)
  - 16日(日) 観世九事会定式能(有料)
  - 23日(日) 内藤泰二師をしのぶ会(有料)
  - (3月)
  - 1日(日) 大蔵狂言会(来場歓迎)
  - 8日(日) 梅嶺狂言会(有料)
  - 14日(土) 梅山大学能楽部30周年記念能(来場歓迎)
  - 15日(日) 藤田追善能楽吟会(来場歓迎)
  - 20日(祝) 日本能楽会名古屋公演(有料)
  - 22日(日) 臺泉會大舞台(来場歓迎)
  - 28日(土) 名古屋能楽鑑賞会(有料)
- (演能変更の節はご了承下さい)

西村市会議員に手渡される請願書



青少年や海外からの来訪者など幅広い人々が親しめる「伝統文化の拠点」として、また、音楽・演劇など様々な分野が新しい創造を

### 請願事項

請願事項および請願理由は次のとおり。  
西村市長、野田副議長も共感を表明、懇談した。  
請願書には渡辺昭(自民)中垣又彦(社会)安井延(民社)宮沢湊人(公明)鈴木松助(共産)近藤昭夫(市民クラブ)の各氏が紹介議員となっている。

## 名古屋に公立能楽堂を 市議会に建設請願

### 12月3日 20万人署名とともに

名古屋に公立の能楽堂を、の要望を結集する建設請願署名運動は能楽愛好家の会(世話人代表北村利弥氏)、能楽協会名古屋支部(支部長西村欽也氏)が中心となり、ことし四月から各界への呼びかけとともに積極的な運動が行われてきたが、本紙既報(十月号)

### 請願理由

能楽堂は、国際都市にふさわしい文化施設です。  
街で外国の人々とすれ違うことが多くなってきました。国際交流をすすめる上では、最新の技術・文化を紹介する一方で、その基礎に伝統の技や文化が脈打っていることを知ってもらうことが重要で

### 請願理由

能楽は、いま内外の注目を集めています。  
静寂の中の気迫と緊張感、そして象徴性ゆえの優れた現代性。そんな能楽は、今、内外の注目を集めています。  
落政期以来能楽の盛んな当地区においても、ほぼ毎週能・狂言が



議長と懇談する世話人、協会支部代表

### 請願理由

能楽堂は、自由で新しい創造空間です。  
近年、能楽は他の分野からも注目を集め、日本舞踊や邦楽はもとより演劇・オペラ・現代舞踊などによっても、新しい創造の場として活用されつつあります。簡素で独特の様式と雰囲気を持つ能楽台は、他の舞台芸術にとっても自由で刺激的な空間なのです。  
東海地区唯一の能楽堂として熱田神宮能楽殿がありますが、その容量は限界にきています。伝統を核に多様な分野の交流をはかるといふ時代の要求にこたえるためには新しい能楽堂が是非とも必要です。

## 観世寿夫記念 法政大学能楽賞(第13回)

### 栗谷菊生氏 受賞

法政大学(阿利英二校長)は、昭和五十四年に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに十二回の授賞が行われてきています。本年も各方面の識者により推薦された候補者について、選考委員(湯川佳一郎、吉越立雄、観世

栗谷 菊生氏  
〔授賞理由〕喜多流の重鎮として氏の演技の重厚さには定評があったが、平成三年三月三日の「栗

狂言共同社  
〔授賞理由〕名古屋の和泉流狂言師の結社として、明治二十四年の結成以来百年、各自が他に類をもちつつ舞台活動を続け、面・装束を共有財産とする等、家・個人を越えた独特の運営形態で、なごやかな酒脱な芸風を保持し続けている。

### 催花賞 岡次郎右衛門氏

法政大学は「観世記念法政大学能楽振興基金」に基づく事業として、能楽鑑賞者等の功労者を顕彰する「催花賞」を設定しているが、第四回の受賞者として、ワキ方高安流・岡次郎右衛門氏を決定した。〔受賞者〕

### 岡次郎右衛門氏

〔授賞理由〕多年、ワキ方高安流の技藝に研鑽を重ね、終始京都を離れず、八十五歳を迎える現在も活発に活動しているワキ方の最長老で、京都をはじめ関西での演能を支え、能楽の普及・発展に甚大な貢献を続けている。

学習研究社・販売局  
〒115 東京都大田区上池台4-40-5 ☎03(3726)8159

1月下旬発売・予約受付中  
定価25,000円(税込)



# 無限表情 三井家旧蔵 豪華コレクション 能楽面

重要文化財・重要美術品など、幻の三井文庫の能面「の全貌を、原寸大で初めて一挙に紹介。  
三井家旧蔵 豪華コレクション  
能楽面  
三井文庫蔵

### 清水眞澄(成城大学教授)

三井文庫の能面は、重要文化財4点、重要美術品40点を含む。最も第一級コレクションでありながら、現在までほとんど知られていません。今回、その凄絶な美の全貌を、全55点すべて新規撮影の道力ある原寸大写真で余すところなく紹介しました。一面につき原則として2点以上の写真を収録。特に主要な能面は、舞台上での能面の多様な変化がうかがえるよう正面・斜め・横などさまざまな角度から多面的に、また、能面の作者や由緒を証明するものとして大変興味深い裏面の写真も全点掲載しました。

●女―(能面作品15面) ●日本の能面  
●男―(能面作品12面) ●能の宗教性  
●翁―(能面作品5面) ●能面の表情と美  
●劇―(能面作品8面) ●作品解説―三井文庫の能面  
●鬼神―(能面作品15面) ●オモカケと花―能面の写と修復

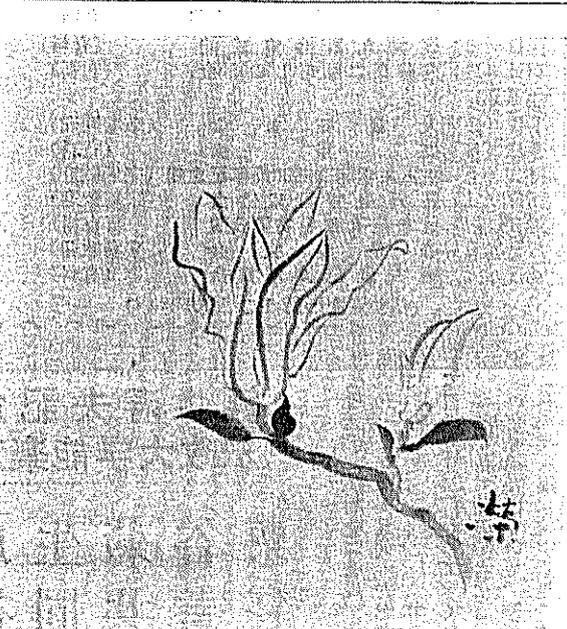
志月雅日記

(124)

酒は微醺を飲む

えと文 二井栄逸

中国の儒者の文章の中に「花は半開を看、酒は微醺を飲む」という言葉があります。花は半開にまざるものはありま



真つ暗になります。村人達は講座のある時はきま

観世流 大槻秀夫氏 逝

12月26日 大槻能楽堂で葬儀

観世流シテ方・大槻秀夫氏は、十二月九日午後七時五分急病で歿

狂言共同社

名古屋を本拠とする和泉流狂言師の結社。明治前期に名古屋在住

岡次郎右衛門氏

高安流ワキ方。本名、船越健一。日本能楽会会員。明治四十年一月

村民たちが伝えた「一色能」

同二十二年九月、近世に禁裏御用を勤めた岡家を継承して十七世

CBCテレビ 元旦早朝に放送

CBCテレビでは新春の早朝放送で、伊勢に伝わる「一色能」を

演能案内

殿島修二師を偲ぶ会

平成四年一月十五日(成人の日)

熱田 神宮 能楽殿

Table with columns for location (e.g., 江口, 丸, 盛) and names of performers.

Large table listing names and roles for the 'Matsuri' (祝) and 'Matsuri' (祝) sections.

宝永元年(一七〇四)に、甲府宰相であった綱吉(家宣)は、將軍綱吉の養子となつて、宝永二年に江戸城西丸に移った。家宣は、甲府宰相の頃から、能楽の愛好家であつたが、西丸に入った後も、綱吉に劣らず演能に熱中し、宝永五年の西丸での能の催しのシテを百二十三番も舞つてゐるようである。

宝永三年九月十二日の「徳川史紀」には、「西城猿楽平田彦兵衛尚信、処士田源六郎某。坂本五郎兵衛某、松平大膳大輔吉広猿楽杉本勘七郎爲利。松平伊予守綱政猿楽中忠右衛門某。金春座長命助三郎某石田某、西城土圭間番御付らる」とある。

西行様、桜川などが演じられてゐる。家宣は、月に十番以上の能を舞つてゐるようである。年間にすると、百二十番以上ということになる。こんなに番数が多くなると、通常演じられる能では、満足はいかず、次第に稀曲上演の機運が盛んが上がつて行く。

三日。また散楽あり。黒塚、柏崎を御所作なり。二月二十五日。奥にて猿楽あり。けふの御所作は野宮、鶴岡、橋弁慶なり。二月二十九日。けふ奥にて猿楽あり。江口、船弁慶をあそばせ給ふ。

### 尾張藩の能の歴史(十)

尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十)

元禄十二年日大坂堀江の新城にて保生佐太夫勸進館に文武あり。眞原源次郎 金助 藤七 武文 庄藏 平八 十郎兵衛 元禄七年尾張名譽屋御城にて空陣あり。田中原之丞 孫三郎 源兵衛 空陣 西村庄兵衛 喜右衛門 清兵衛 元禄五年八月十四日 眞原原にて洪谷三郎右衛門一代能に花軍あり。

狂言「能楽の歴史」と言われる。相当数の稀曲が演じられてゐる。こうした稀曲上演の風潮は、將軍のお膝元江戸ばかりでなく、名古屋、京都、大阪においても波及して行く。

この他に、貞享・元禄期の綱吉時代の稀曲にさかのぼつて拾ひ出すと、鶴岡田・行家・楽天竜神・竜頭大夫・追掛鈴木・郭巨など、四十一番にも及ぶ(岩波講座能楽)。

尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十) 尾張藩の能の歴史(十)

#### 豪華コレクション 「三井家旧蔵 能面」

##### 学習研究社 来春から発売

来春早々、学習研究社から能面コレクションとして、高品質な能面五十五点が、三井家旧蔵の能面全五十五点が、一冊の豪華本になり紹介される。

三井家の能面はその大部分が金剛家伝来の本面で「孫次郎」や「不動」など四点が重要文化財に指定されている。しかし、現在までその全体像が紹介される機会はほとんどなく、一般の能楽愛好家、美術愛好家はもとより専門の能楽研究家の間でさえあまりよく知られていなかった。このたび三井文庫の全面的協力で、五十五点全点の新規撮影が許可され、その神秘的で圧倒的な美の世界が迫力ある原寸大の写真で紹介、これらの作品は室

#### 豪華コレクション 「三井家旧蔵 能面」

来春早々、学習研究社から能面コレクションとして、高品質な能面五十五点が、三井家旧蔵の能面全五十五点が、一冊の豪華本になり紹介される。

#### 平成3年12月・平成4年1月放送予定

[12月] FM能楽鑑賞 (午前8時~9時)	29日 狂言・大蔵流「筑紫」奥流「桑葉」大流「三宅」	29日 狂言・大蔵流「筑紫」奥流「桑葉」大流「三宅」	29日 狂言・大蔵流「筑紫」奥流「桑葉」大流「三宅」			
[12月] NHK FM能楽鑑賞 (午前8時~9時)	1月5日(日) 金春流「春日」龍世本	12日(日) 金春流「春日」龍世本	19日(日) 金春流「春日」龍世本	26日(日) 金春流「春日」龍世本		
年始特集・教育テレビ (7時~8時)	1月1日 狂言「千太郎」金泉流「東」	1月2日 狂言「千太郎」金泉流「東」	1月3日 狂言「千太郎」金泉流「東」	1月1日 狂言「千太郎」金泉流「東」	1月2日 狂言「千太郎」金泉流「東」	1月3日 狂言「千太郎」金泉流「東」

#### 豪華コレクション 「三井家旧蔵 能面」

来春早々、学習研究社から能面コレクションとして、高品質な能面五十五点が、三井家旧蔵の能面全五十五点が、一冊の豪華本になり紹介される。

三井家の能面はその大部分が金剛家伝来の本面で「孫次郎」や「不動」など四点が重要文化財に指定されている。しかし、現在までその全体像が紹介される機会はほとんどなく、一般の能楽愛好家、美術愛好家はもとより専門の能楽研究家の間でさえあまりよく知られていなかった。このたび三井文庫の全面的協力で、五十五点全点の新規撮影が許可され、その神秘的で圧倒的な美の世界が迫力ある原寸大の写真で紹介、これらの作品は室

#### 青陽会定式能 (第136期)

平成四年一月十八日(土)十二時半始

能田	祖父江修一	仕舞玉之段	今沢美和	地謡	三村 恵子
村	杉江元	熱田	神 宮 能 殿	地謡	生駒 里子
	高安 勝久			地謡	近藤 幸三
	佐藤 友彦			地謡	瀬野 三津子
				地謡	河野 三津子
				地謡	河野 三津子

### ◆神無月・霜月の舞台から◆ 「淡交会別会」「濤華能」「宝生会」 「和泉会」

竹尾邦太郎

「恋重荷」シテ善助。昨今話題を提供している所謂妙法型の、天程に二個の重荷ではなく、徒前通り、地(四郎・私・彼二)との掛合に、老体を鼓舞させて重荷に挑む力の有り様から頓挫する迄、描写が細かい。即ち、へげに持ちかゝる、の細を握り締める指が痺れ、感覚失なっている様。へたど頼め、と左右一足ずつ退いた腰の握れ具合。見てをれ、と捨て科白吐きかねぬ程の、凄まじい憤怒が足裏に滲む様な中入、など痛恨如矣。

後シテは、彩色剣落の生(シ)の地肌を見せるや小振りの慰謝。立廻にツレ・祖父江修一を背負杖で押え付ける所や、へまき苦しみと鹿背杖に縋ってじりじり沈むと右膝着き、へまき熱い給へや、とツレを睨めつける所など、生々しい。キリで、へ思ひの煙立ち別れ、

「船井慶」シテ三津子。面若女。都に戻されるのは舟渡・勝久の一存と思いきや、子方・加奈子直々宮で御社上りの儀。舞台の演出が珍しいけれどこれは省く。なお二日間とも夜は南大門の儀(新能)がある。夜の冷気がきびしかった。朝は「どうとうたりたり」、日中は奈良公園のわらび餅、夜ははら貝の音または「ナムカン」の鐘の音であった。俗気な忘れた。

因みにお社頭では八熱田Vの鏡板と地裏の側から拝観した。今記憶に残るのは三人の翁の古風な姿である。  
さて九日の当日。一時半始まり。幕内の切火の音が響く。三十五分干歳(面箱)を先頭にしすしと。三人の翁はワキ座寄りからシテ翁(左翁)ツレ翁と正先に並び、平伏(お社頭でも鏡板が正面に向う)。ワキ座よりから笛座にシテの翁、ツレの翁と座す。千歳が舞い始める。爽やかに。いよいよ三人の翁さんが、面をつけたシテ翁は笛柱を背に、ツレ翁は目付柱の方からシテ翁さんに対して立つ。

### 紅梅記

— 濤華能の翁 —  
受賞 —

十一月九日海華能の「翁」。この「翁」の、翁さんは三人で、十二月往來、父尉・延命冠者の小書が、三番更には烏帽子ノ祝儀・橋掛ノ舞と打掛り(大鼓)の三つがつく。五つ。翁・金巻高はか、三番更・野村又三郎、千歳・面箱は井上祐一。笛・藤田六郎兵衛・小鼓福井啓次郎(催主)ほか、大鼓河村総一郎。

この翁さんは昭和三十年前後奈良春日神社のお社頭で行われるのに参加した。呪師ハしゆしゆ走りの儀である。春三月、東大寺二月堂のお水取り翌日に(唯今は五月に催される)。もちろん金巻流。朝のお社頭は清冷で周辺の紅梅が色あざやかであった。翌日は若

の沙汰と知った時の通る瀬ない心のうち。初風(倉長・栄・彼二)下居して面クモル姿のおしらさや、酒を勧められても涙に咽ぶばかりの表情など、如何にも女流らしい繊細。氣を取り直して舞う中ノ舞もしんみりと、烏帽子はらりと前に落ちる細心だった。後シテは、いつもながらの三津子縦横無尽の活躍が小気味よい。キリに三ノ松に逃れて長刀捨てや、太刀に替えて取って返すスピード感など中々だった。アイは慣行。船中ワキツレ。元を痛罵する場も堂に入る。(一時間23分・10月27日・淡交会別会)

祐一(兼千歳)・元秀・信行に統一的なシテ方三人が静々と運ぶと、ろは社殿の上もない。稚子方は六郎兵衛、啓次郎、良治、貫司忠、繪一郎。地は汎・広明・八郎・鉄郎、三番更は又三郎である。  
爽快な千歳ノ舞の後、へ縁角やとんどや、を聞き、クツロいで居た大鼓・総一郎は右受けて右袖脱ぐと三合程離れた。石井流の型、「打掛り」(本紙第二七八号参照)の真ノ調である。終つて再び袖を通すとクツロギ、その袖で大鼓を包み込んだ。次いで十二月各月のめでたい詞章を掛合で謡う「十二月往來」、そして笛と小鼓のアシライがあつてシテ翁の舞になる。本来の、土俗的素材な翁と打つて変り格調高く崇高な趣である。泉流が「翁」に付き合うのも当地ならではの、珍らしくもめった。(一時間21分)

「福ノ神」シテ松次郎。奈良の三人翁を受けてか、古拙の趣があつた。(16分)  
「船井慶」遊女ノ舞・替ノ出。子方尚久君は兼長(金・銀霞文武)・白大口の貴公子の立出。子方難の折柄、身長年齢これが境界と思えるが、過去に「橋井慶」「望月」「景清」(直面の丸)の好演があり、安定感抜群で冷やくすする所無難、シテ光洋も存分に力量を發揮して好舞台となつた。

前シテは面小面。風流あるため少々重い運は舞合に出るから更に傷心を深める。行末千代、と酒を勧められ、飲まねば一さし舞を所望されれば、詮方無く立ち上る心持ちに光洋充実振りを見せ、烏帽子は金色。イロエを抜きクセを抜くのは逆巡する氣持をふっ切るためか、へ袖打ち振るも恥かしや、の地(安明・広明・忍ら)から直ぐ舞になる。小書「遊女ノ舞」で、途中一ノ松に抜け、扇つまむと句欄に寄つてカザシ。子方を見込んでゆくりと二度シテ翁のいがいにもさめざめと泣く風情である。へはや纏をとくとくと、は拍子踏んで舞を指し、子方が立つて正先近く出ると、シテは、へ泣くく、下居してシテ翁と、烏帽子の紐を解いて左手に持つて脱ぎ、静かに捨てた。中入はアイ友彦の送り込み、語尾を曳く「先ず私宅へ帰らう」と哀調を

掛ける。一ノ松でアイの立シヤベリがあり、アイ・ワキ・ワキツレに動きがあつて俄に慌しく、「立ち騒ぎつづつ舟子共」とワキ正に出て便溺するワキ勝久が確りしている。舟中の場の間に、長絹の右袖を背に巻き込み戦闘準備の子方も凛々しい。替ノ出で、後シテは、へ波に浮かみ、と半幕で姿を見せ、幕内で名宣つて一旦幕が下りてから、早笛で走り出た。白地拾狩衣の袖を折込んでエモンに着け萌黄半切、面は淡明か。へ沙を蹴立て、の乱れ足、鋭氣強爽の働キも、キリは、へ次第に遠ざかれば、と二ノ松で長刀捨てや太刀を抜いてすたすた取つて返すか、へまた引く沙に、と流し足に流れ、太刀突き出しますますたといいつた風に入ります。トメた。(一時間20分・11月9日・濤華能)

「葛城」シテ瀬次郎。面深井・横浅黄・白羽袖・紺地縫箔(龍目・鉄線文様)・腰巻・白水衣・雪結付魚袋。作物は出さない。呼びかけから常座に至る運びに、深い雪の組を往く雰囲気がよく出ていたが、問答で、「うたてやな」「申すにや及ぶ」とワキ元にアキラウのが、肩肘張つて凍こむような感じがしないでもない。後は萬ノ天冠・黒垂・面増・緋大口・白地長絹。へ見苦しい顔ばせのところ、袖アシライしてワキに向せて微笑ましい。舞に袖被くことはなく、巻上げるだけだったこと無難。トメは、へ岩戸にぞ入り給ふ、とシテ住手前で乗込、拍子つと両袖返してトメた。(一時間24分)

「萩大名」シテ大名礼之助。「あの尖つた所が火打石の横じや」という事で御座る」などと、失言を反復して言い繕うところや、「あの花のパーッと散つたところは」と、扇開いて両手を高くと挙げるところなど、如何にも無邪気にして粗野な感じが秀逸。一方、無然とした表情の園主・松次郎。一首纏めかねる大名に、「亦進いませたか」の、頭を天辺から出たような素つ頓狂な声で見所を測かせた。太郎冠者・友彦。(29分)

「理腹腹」シテ元秀。幕際で祖先で松山藩お抱えの能役者、同氏の重要無形文化財総合指定の認定を期に郷里の松山城下で催す追善能である。  
能組は「雷」(シテ金剛藏)「望月」(シテ宇高通成、ツレ谷口宗義、子方宇高竜成)入場料前売券五千円、当日券六千円。  
問い合わせは宇高通成後援会(電話〇七五七〇一〇七九三)

「観世流謡曲本」  
ちくさ正文館  
ちくさ駅前  
電話01137

に至る道中を描写するクセは、感情を抑えた確の淡々とした舞振りであつて心持深く感じられたが、地が少々ふらつき残念。立廻で一ノ松へ行き、句欄に足踏めながら薄く右へ望見すると、左袖を面に当ててシテ翁、へこれ程多き人の中に、と吾子の見当らないのを嘆くところは、その遠近感(心理的にも)が素晴らしい。アイ友彦・経緯味が会釈間に味があつた亡父秀雄に似ていたのが懐しい。(57分)

「鶴飼」空の開けた海辺、安房園からのワキ旅僧・雅介。「日も暮れて候程に借らばやと思ひ候」と、ワキ座先で見上げたのが、いかにも山袂の甲斐園石和川の暮れた狭い空の感じがした。その暗い流れに沿つて松明振り振り出るシテ耕司が、常座で殺生の半生を述懐する辺り、心の闇を異氣に反映させるかに、よい異氣を出す。没我の境で魚を追う鶴飼次郎に、「いつみても気味よい飲みぶりじゃ」と、感に堪えない伯父・礼之助の口吻。虚実の被服、その絶妙の酔態で突つ掛かる松次郎を、いなして受ける礼之助。その呼吸がよく合ひ、スケールの大きな好一番になった。主は私之。(28分)

「骨皮」新築意・元弥に寺務一切を譲りはしても、吝嗇なアト老僧・元秀は氣掛り。しかし、後手に回る助言がそれれ所用の異なる来客(須治・高藏・信行)に对应できないのも道理。利発そうに見えても本質は愚鈍、というこのシテの役柄は、理屈抜きに感に徹しないと、つい理が頭を拾げて上りしかなない。恍惚した味は芸功を積むことで得られるものだろう。(28分・11月23日・和泉会)

「宇高六兵衛」  
喜太夫追善能  
12月23日 松山・県民文化会館  
金剛流・宇高通成師は、十二月二十三日、松山市の愛媛県民文化会館で「宇高六兵衛喜太夫追善能」を開催する。  
宇高六兵衛喜太夫信休、四郎三郎信俊、喜藏信重は宇高通成師の

「観世流謡曲本」  
ちくさ正文館  
ちくさ駅前  
電話01137

「観世流謡曲本」  
ちくさ正文館  
ちくさ駅前  
電話01137